



HOSEI University

28 November 2015

国際文化

情報学会

2015

2015年度国際文化情報学会概要

開催日時：2015年11月28日（土曜日）

12時50分～13時20分 学会総会

13時30分～18時00分 研究発表会

18時10分～20時00分 表彰式 懇親会

場所： 総会・学会本部：外濠校舎 S405

研究発表：外濠校舎各教室 4F ギャラリー

表彰式・懇親会：さったホール

学会総会議題

- 1、2014年度会計報告
- 2、2015年度の学会運営方針
- 3、国際社会人叢書第2冊発行について
- 4、その他

懇親会&表彰式スケジュール

- 1、開会挨拶
- 2、学部パンフレット表紙コンペ結果発表と表彰
- 3、FIC サロン（国際文化学部生対象就職セミナー § 懇親会）のお知らせ
- 4、学生審査員および学会発表者への連絡事項
- 5、乾杯、懇談
- 6、学会各部門最優秀賞、奨励賞結果発表と表彰

研究発表部門：

- (A) 論文発表：質疑応答を含め30分。
- (B) ポスター発表：模造紙1～6枚まで。補助の机をボード前に設置可。
- (C) 映像作品：質疑応答を含め30分。
- (C-1) 一般映像作品
- (C-2) 学部紹介ビデオ
- (D) インスタレーション、パフォーマンス：一教室を用いて70分。

審査、表彰、『異文化』掲載について

1、審査

論文の予備審査は教員二名によって行われ、それぞれの発表概要に10点満点での評価がなされる。本審査は学会当日の発表を見て、行う。ポスター、作品発表の審査はそれぞれ四人の教員および五人の学生の採点（10点満点）の合計によって、論文発表は予備審査の結果と、学会当日の発表を見た学生または院生審査員三名による採点の合計によって、最優秀賞1件、奨励賞2件を決定する。また審査とは別に一般参加者に対し、アンケートも実施する。

<審査方法>

論文の予備審査は教員二名によって行われ、それぞれの論文予稿に10点満点での評価がなされる。

本審査は学会当日の発表を見て行う。ポスター、作品発表の審査は、それぞれ四人の教員および五人の学生の採点（10点満点）の合計によって各賞を決定する。論文発表は予備審査の結果と、学会当日の発表を見た学生審査員3名による採点の合計によって各賞を決定する。

① A部門（論文）当日発表の評価基準は以下に示す通り。該当する項目に○をつけ、その合計とする。

1. テーマに対して、説得力のある結論が導き出されていたか？
2. 発想に独創性や意外性があったか？
3. 論理展開はしっかりしていたか？
4. 先行研究を踏まえ、引用や参照が示されていたか？
5. 発表の仕方に工夫がこらされていたか？
6. 冗長や不足がなく適切に表現されていたか？
7. プレゼンテーションに説得力はあったか？
8. レジюмеや資料、パワーポインター、映像に不備はなかったか？
9. 質疑に対して適切な回答が得られたか？
10. 時間内に発表を終わったか？

② B部門（ポスター）の評価基準は以下に示すとおり。該当する項目に○をつけ、その合計とする。

1. テーマに対して、説得力のある結論が導き出されていたか？
2. 発想に独創性や意外性があったか？
3. 論理展開はしっかりしていたか？
4. 先行研究を踏まえ、引用や参照が示されていたか？
5. 発表の仕方に工夫がこらされていたか？
6. 冗長や不足がなく適切に表現されていたか？
7. ポスターの表示や機材に不備はなかったか？
8. ポスターの完成度は高かったか？
9. 口頭説明に説得力はあったか？
10. 質疑に対して適切な回答が得られたか？

③ C部門（映像）の評価基準は以下に示すとおり。該当する項目に○をつけ、その合計とする。

1. テーマに対して、説得力のある結論が導き出されていたか？
2. ストーリーはよく練られていたか？
3. 演出に説得力はあったか？
4. 手法に独創性や意外性があったか？
5. 映像編集に工夫が見られたか？
6. 音声は聞き取りやすかったか？
7. 作品の完成度は満足のいくものだったか？
8. 機材の操作に不備はなかったか？
9. 質疑に対して適切な回答が得られたか？
10. 時間内に発表を終わったか？

④ D部門（インスタレーション、パフォーマンス）の評価基準は以下に示すとおり。該当する項目に○をつけ、その合計とする。

1. テーマに対して、説得力のある結論が導き出されていたか？
2. 発想に独創性や意外性があったか？

3. 展示の仕方やパフォーマンスに工夫が凝らされていたか？
4. 展示の仕方やパフォーマンスに興味をそそられたか？
5. 作品の完成度は満足のいくものだったか？
6. 機材や装置の操作に不備はなかったか？
7. 主張の根拠が理解できたか？
8. エンターテインメント性は高かったか？
9. 口頭説明に説得力はあったか？
10. 質疑に対して適切な回答が得られたか？

評価の目安として以下を参照。

- 10～9 優秀賞に値する。
- 8～7 奨励賞に値する。
- 6～4 可もなく不可もない。
- 1～3 劣っている。

2、表彰

A,B,C(1,2),Dの部門ごとに最優秀賞1点(現金2万円)、次点に奨励賞2点(現金1万円)を贈る。ただし、A部門の論文発表については学部学生と院生の二部門に区分し、Cも1、2の二部門に分け、それぞれに賞を贈り、教員および外部参加者は除外する。同点で最優秀賞が2件以上、奨励賞が3件以上出た場合、教員の採点が高い順位で決定する。それでも差がつかない場合、同点の両者に該当の賞を与える。ただし、最優秀賞が2件でた場合、奨励賞は1件とする。応募が3点以下の場合是最優秀賞1点のみとする。受賞者に対して、点数を発表する。講評に関しては、学会終了後に発表者の要望に応じて、企画広報委員会が行う。

3、制作補助

B部門の発表については1万円、C,D部門の発表については、3万円までの制作費を実費で支給する。制作にかかった費用のリストに領収証を添えて、学会当日までに学部事務に提出すれば、企画広報委員会が審査し、妥当と思われる金額を支給する。

4、『異文化』への掲載

学会発表の概要は『異文化』に学会報告として掲載する。応募時に提出した発表概要を改稿し、学会終了後一週間以内にメール(国際文化学部事務: jkokusai@hosei.ac.jp)に提出すること。

最優秀賞受賞作は『異文化』に掲載する。パフォーマンスや映像作品に関しては、誌面に掲載可能な形態のものに限る。

5、国際文化学会の教員審査の結果通知を希望する人へ

学会発表に対する教員審査員による評価を知りたい発表者は、以下の事項を書いて12月4日(金)17時までに、国際文化学部事務窓口で書類で申請するか、メール(国際文化学部事務: jkokusai@hosei.ac.jp)で申請すること。12月21日(月)より、教員審査員投票用紙一式を学部事務窓口で渡す。なお、グループ発表の場合、教員審査結果通知の申請をすることをグループ全体で確認してから、学会プログラムに出ている代表者が申請を行ってください(発表グループ内の一部のメンバーだけが知るという事態を避ける必要があります)

提出用フォーマット見本

【直接学部事務窓口に提出する場合は、本プログラム最終頁のフォーマットに記入・切取の上、提出すること】

発表部門(いずれかに○)	A B C1 C2 D
発表者名(グループ発表の場合は代表者名)	
学生区分(いずれかに○)	学部生 大学院生
発表タイトル	
ゼミ名	
<u>※グループ発表者のみ記入すること</u> 教員審査結果通知の申請を行うことは グループ全体で確認済みですか？	はい いいえ

A. 論文部門【院生・学部生】*右端の数字は掲載ページです

S301	13:30~14:00	なぜ開発途上国がバラエティ番組で扱われるようになったのか〜テレビにおける開発途上国の取り上げ方の変化から〜	松川友姫 (松本ゼミ)	22
	14:10~14:40	イギリスのブラッドフォードにおける市民による多文化主義への取り組み〜コミュニティ農園の事例から〜	江部綾 (佐々木ゼミ)	23
	14:50~15:20	在日中国人の子どもたちに対する教育支援の現状に関する分析・考察	チャンエンニイ (院・浅川ゼミ)	15
	15:30~16:00	日本人ひきこもりと在日外国人ひきこもりの比較: 家庭環境と社会環境による影響。	林婷民 (院・浅川ゼミ)	16
	16:10~16:40	移転住民の生活再建とソーシャルキャピタルーベトナム北部の少数民族とハノイの事例からー	宋漢娜 (松本ゼミ)	25
	16:50~17:20	日韓のドラマコンテンツからみる比較文化論的考察	金賢廷 (佐々木ゼミ)	26
S401	13:30~14:00	林京子『予定時間』論	熊芳 (院・川村ゼミ)	9
	14:10~14:40	フロー理論と森田理論の比較研究	平田真也 (院・浅川ゼミ)	9
	14:50~15:20	SA プログラム研究-今後の SA プログラムの発展のために-	大久保秀斗 (興石ゼミ)	33
	15:30~16:00	政府との連携と NGO の役割ーミャンマーの開発事業における異議申立の事例からー	松浦未和 (松本ゼミ)	34
	16:10~16:40	日本社会における「税金の使途の監視」という考え方の定着 ー二律背反ともいえる態度はいつ、どのように生まれたのかー	大石純平 (松本ゼミ)	49
	16:50~17:20	国際協力と嫌われた技術 ーダム技術と炭鉱技術の事例からー	西原寛人 (松本ゼミ)	31
S402	13:30~14:00	ハンガリーにおけるロマ差別撤廃への取り組みーEU 加盟との関係からー	鈴木友理香 (今泉ゼミ)	24
	14:10~14:40	南北分断による離散家族の存在とそれに伴う家族観の変化ー離散家族は南北統一の鍵となるのかー	神長倉理恵 (今泉ゼミ)	24
	14:50~15:20	「結婚移住女性の日本への社会適応に向けて」	呉善美 (院・高柳ゼミ)	17
	15:30~16:00	なぜ外国人労働者の人権侵害は解決しないのかーハーシュマン理論からの探求ー	望月智美 (松本ゼミ)	39
	16:10~16:40	バレエと敵性文化ーロシアの文化はなぜ排斥されなかったのかー	藤村茉由 (松本ゼミ)	40
	16:50~17:20	大衆社会におけるメディアと暴力 ー映画『ハンナ・アーレント』から現代を考えるー	田島樹里奈 (院・森村ゼミ)	19
	17:30~18:00	現代中国におけるミャオ族社会の変貌 ー改革開放後の婚姻習俗を中心にしてー	任涵廷 (院・曾ゼミ)	20
S404	13:30~14:00	訪日中国人旅行者の消費行動に関する研究	覃芙蓉 (院・中島ゼミ)	21
	14:10~14:40	食品偽装事件からみる「食の安全」への意識と構造の変化	柏倉妃香里 (佐々木ゼミ)	27
	14:50~15:20	グローバリゼーションと先住民族ーユカタン・マヤ先住民族のフェアトレードの事例から〜	千葉かんな (佐々木ゼミ)	28
	15:30~16:00	公民館からみるまちづくりとソシアビリテー長野県飯田市の事例からー	藤本理沙 (佐々木ゼミ)	28

	16:10~16:40	「脱ホームレス」への要因を探る～ The Big Issue の事例を通して～	矢田真俊（松本ゼミ）	30
	16:50~17:20	東京在住の台湾系華僑における宗教儀礼の機能と変容-主に東京媽祖廟を事例に	洪志武（院・曾ゼミ）	13
	17:30~18:00	ハイデルベルク、ナンタケット、パリから学ぶ魅力的な街づくりー持続可能性に繋がるのは、活性化ではなく成熟ー	新村麻里恵（島田ゼミ）	31
S501	13:30~14:00	アフリカサッカーから見る近代スポーツのグローバリゼーション	田中直実（佐々木ゼミ）	32
	14:10~14:40	日本の学校教育における「南京事件」ー平和のための教育教材としてー	海野里奈（今泉ゼミ）	33
	14:50~15:20	自由における価値の地平ーバーリンとテイラーの自由概念を手掛かりに	釜土詳二（院・森村ゼミ）	10
	15:30~16:00	ボランティアはどのようにして受け入れられるのか？-「する側」と「受ける側」の関係から	桑原恭平（院・松本ゼミ）	11
	16:10~16:40	移民2世の言語選択とアイデンティティ	郭林艶（松本ゼミ）	36
	16:50~17:20	拡大する中国対外援助の言説ー日本語と中国語の研究論文比較からー	春名林（松本ゼミ）	36
	17:30~18:00	『国際協力に活かされる日本の経験ーラオス子どもの家を事例にー』	松原早也花（松本ゼミ）	37
S502	13:30~14:00	離島における持続可能な観光とはー式根島の事例をもとにー	三角静那（曾ゼミ）	38
	14:10~14:40	シンガポールと ISIS（イスラーム国）-民族間・宗教間融和の視点を中心に-	市岡卓（院・中島ゼミ）	17
	14:50~15:20	中国農村留守児童を取りまく状況ー親子の離れて暮らす視点からー	満伶（院・松本ゼミ）	18
	15:30~16:00	日本における観光ガイドの現状と課題ー文化のインタープリターという視点からの考察	鈴木佳子（曾ゼミ）	41
	16:10~16:40	20世紀アメリカにおいて対比的に構築された移民への排斥のまなざし	小口夕香（佐々木ゼミ）	42
	16:50~17:20	新大久保における日本人と外国人が共生していくための取り組み	桑本佳奈枝（曾ゼミ）	43
S503	13:30~14:00	イラク帰還兵からみるアメリカ格差社会-Iraq Veterans Against the War(反戦イラク帰還兵の会)の活動から考察する-	牛津七海（今泉ゼミ）	44
	14:10~14:40	法政大学の国際化改革の内と外ー国際文化学部生としてー	岩田加奈子（熊田ゼミ）	45
	14:50~15:20	社会変化の在り方ーマルキ・ド・サド『野心の罪』と北川千代三『H大佐夫人』についての社会哲学による比較考察ー	福田明音（前川ゼミ）	46
	15:30~16:00	再考 NGO 論ー「NGOらしさ」の検証ー	大塚弘貴（松本ゼミ）	47
	16:10~16:40	分離壁の潜在的機能ー「テロ防止」の陰で何が起きているのかー	油井花穂（松本ゼミ）	48
	16:50~17:20	ブルキナファソにおける食料不安（Food insecurity）の考察ー脆弱性の概念を手掛かりに-	鵜澤光佑（院・大中ゼミ）	12
	17:30~18:00	プエノスアイレスにおける沖縄移民の「救済活動」ー第二次世界大戦直後の沖縄系社会	月野楓子（院・今泉ゼミ）	13

B. ポスター部門

4F ギャラリー	14:00~15:30	もののけ姫から読み解く屋久島の環境民俗学と諸問題	木下颯将 (中島ゼミ)	50
		「知」のコミュニケーションを生み出す場としての空間デザイン	出川瑛美子 (甲ゼミ)	50
		南三陸町における津波の経験を活用した自然との共存と地域開発の可能性	飯島大地 (島野ゼミ)	51
		見つめなおす世界遺産～地味だけど地味じゃなかった富岡製糸場～	柴翔太郎 (佐々木直ゼミ)	52
		観光の文脈の中で消費される秩父札所巡礼	田中直実 (佐々木一ゼミ)	53
		英語学習における語彙力強化アプリケーションの紹介 (Scrabble)	山田真之 (重定ゼミ)	54
	16:00~17:30	若者の教育課程における集団意識形成	齊藤翔大 (衣笠ゼミ)	54
		新作能「タイタニック」	酒井奈穂 (竹内ゼミ)	55
		神楽坂と文化人 (神楽坂、文化人に愛される場所)	水谷遊菜 (岡村ゼミ)	56
		サウンドデバイス開発に於ける Raspberry Pi 及び Pure Data の活用に関する検討	田村隼士 (松村・大嶋ゼミ)	57
		これからの家族 (ファミリー) 向けの道具の在り方を考える	橋本あゆみ (甲ゼミ)	58
		聞こえていますか? 沖縄の声 ～基地問題から考える政治的無関心～	木嶋諄 (今泉ゼミ)	58

C. 映像部門

S406	13:30~14:00	KAGUYA	面川梨夏 (鈴木晶ゼミ)	59
	14:10~14:40	「7 2 3」	青山里奈 (鈴木晶ゼミ)	59
	14:50~15:20	「厳選! 映像研究ゼミが本気で作った映像作品 8 作! 2015」	青山里奈 (鈴木晶ゼミ)	60
	15:30~16:00	登録削除	高田茉友子 (島田ゼミ)	61
	16:10~16:40	EXOPHONY ～国境を越える国際文化～	福田涼 (和泉ゼミ)	65
	16:50~17:20	「Following」	小泉堯史 (島田ゼミ)	62
S407	13:30~14:00	チャーリーの夢十夜「#今日の夢」	東井勇樹 (島田ゼミ)	62
	14:10~14:40	『あの夏を求めて』 おもてなしの原点	山口卓也 (山根ゼミ)	62
	14:50~15:20	『RIMMA DOI』 人を惹きつける力	風巻純佑 (山根ゼミ)	63
	15:30~16:00	『本音と建前』 +CM 集 本音と建前の使い分け、一番伝えたいことを伝えること	木村優香 (山根ゼミ)	64
	16:10~16:40	「市民にとっての戦争とは」	仲島友理 (鈴木靖)	65
	16:50~17:20	Discover	松田美里 (無所属) 代理: 柿沼里帆 (曾ゼミ)	66

D. インスタレーション部門

S504	13:30~14:40	La cultura islámica en España スペインのイスラム文化	菅野亜美 (田澤ゼミ)	67
	15:40~16:50	Are we living in the same world?	柏瀬将吾 (熊田ゼミ)	68
S602	13:30~14:40	(Imagining!展)	新村麻里恵 (島田ゼミ)	68
	15:40~16:50	TODAY (仮)	磯野志保 (稲垣ゼミ)	68
S603	13:30~14:40	Do Experience	松坂絵里香 (甲ゼミ)	69
	15:40~16:50	完璧	上田瑞季 (森村ゼミ)	70

A. 論文部門【院生】

発表者氏名：熊芳

所属ゼミ：川村ゼミ

発表教室：S401

タイトル：林京子『予定時間』論

発表概要：

林京子は上海を素材にして三つの長篇小説を書いた。単行本発行の時間順で挙げれば、それぞれ『ミッシェルの口紅』（一九八〇）、『上海』（一九八三）、『予定時間』（一九九八）となる。前の二作は、戦時下における幼児期から少女期のおよそ十四年間の上海生活、戦後三十六年ぶりの上海再訪の体験に基づいて書かれた、私小説の形で語る林京子の創作スタイルに一貫した自伝的な作品である。ところが、最後の一作は、林京子の通常の創作手法と異なり、アジア・太平洋戦争中、新聞記者として二回も上海に渡り、敗戦後もそこにしばらくいた男性主人公「わたし」が老後、自分の上海体験を回想的に語ったものである。この意味においては、上海を題材とした創作で異彩を放つこの作品は、林京子の文学を考える上で注目に値すると言っ

て良いだろう。『予定時間』を『群像』に発表した直後、川村湊がこの作品を次のように評している。

軍国主義の立場からも、反日主義の立場からも、等距離的にバランスのとれた日本人記者が、上海での見聞や従軍記者として体験したことを声高になることなく、坦々と語り続ける（実在のモデルがいそうだが）。戦中の、いわば普通の人が見て、体験した上海や中国がそこには描かれていて、軍国主義や植民地主義の貴重な証言となっているのだが、やや「予定調和」的な構成になっていて、主人公の優等生ぶりに物足りなさを感じた。（『毎日新聞 一九九八年五月二六日付夕刊』、『文芸時評 1993-2007』、水声社、二〇〇八年七月、二二三頁）

この評論を読んで、いくつかの疑問が浮かんだ。川村の言う『予定時間』における優等生ぶりの実在のモデルとはどのような人物なのだろうか。戦時下の上海生活は、武田泰淳や堀田善衛をはじめとする大勢の文学者によって、数多くの小説にすでに描かれている。では、なぜ林京子はやや「予定調和」的な構成で新聞記者の上海生活を書くことにしたのだろうか。林京子の通常の創作からさらに、なぜこれまでの創作に登場させなか

った男性を主人公にしたのか、すでに少女の視点から戦時下の上海の生活を語ったにも関わらず、大人の視点からもう一度上海の生活を描く理由はいかなるものだろうか。作品にどのような上海、あるいは上海生活が描き出されたのか、新聞記者の上海生活を描くことによって作者は何を伝えたいのか、等々疑問に思う。

以上の問題意識から生まれたのが本発表である。本発表では、これらの「謎」を解くために、『予定時間』という作品を対象に、主人公と登場人物のリタ、作品の成立、物語の展開について詳細な考察・検討を試みる。なお、上海を題材に採った前の二作『ミッシェルの口紅』、『上海』との比較を行い、林京子の夫婦関係をテーマにした『谷間』などの作品とを関連づけてみることによって、作者の創作意図を明らかにする。さらに、以上の考察を踏まえて、林京子の文学における『予定時間』という作品の位置づけについて論じてみたい。

参考文献

発表者氏名：平田真也

所属ゼミ：浅川希洋志ゼミ

発表教室：S401

タイトル：フロー理論と森田理論の比較研究

発表概要：

フロー理論とは、アメリカの心理学者ミハイ・チクセントミハイ（1934-）が提唱する理論である。ここでは、何もかもを忘れて行為に没頭している状態が「フロー」として定義され、このフローを中心に理論全体が構築されている。

フローの構成要素は以下の8つである。(1) 現在の能力より高すぎも低すぎもしない挑戦 (2) 明確な目標と進行中の事柄についてのフィードバック (3) その瞬間にしていることへの焦点の絞られた集中 (4) 行為と意識の融合 (5) 自我の喪失 (6) 行為や環境を支配できているという感覚 (7) 時間的経験の歪み (8) 内発的報酬による自己目的的な性質。また、このフローを経験している人の例として、ロック・クライミングに熱中する人やチェスに没頭する人などが挙げられている。

一方、森田理論とは日本の心理学者である森田正馬（1874-1938）によって形作られたものである。森田が独自に創始した森田療法は神経質治療として知られ、近年では海外からも注目を集めている。

本研究では、フロー理論と森田理論を比較研究することで、

個人がフローを経験するためのヒントを提示することが目的である。そのために、質問紙調査・文献研究・実験調査の三部構成を予定している。

まず、質問紙調査ではフロー尺度と森田理論尺度を用いる。

フロー尺度では「日常生活においてどれくらいの頻度でフローを体験しているか」を測定できる。一方、森田理論尺度では、森田理論における幾つかの鍵概念が尺度化されており、個人の「あるがまま・とらわれ」などといった傾向を測定することが可能である。

これら2つの尺度を用いて調査を行い、相関分析によってフロー理論と森田理論の関連性を明らかにしたい。もっとも、フロー理論と森田理論の関連性は既に文献研究によって指摘されているため、ここでは実証的に両者の関連を示すことが目的である。

次に、文献研究ではフロー理論における「フロー」と「パーソナリティ」の両面、すなわち一時的体験と恒常的人格の両面から森田理論を読み解いていく。具体的なテーマとしては「文化比較」「強迫観念」「流動」「苦悩」「不安」などを予定している。

「文化比較」ではフロー理論と森田理論の文化的背景を比較する。フロー理論が西洋発祥であるのに対し、森田理論は日本発祥である。したがって、まずは理論の前提となる文化的背景を比較することで両者の差異と一致を明確にしたい。また、森田理論は単純に純日本的と位置づけられない面もあるため、その特殊な立ち位置も併せて考察する。

「強迫観念」では、森田が治療の対象とした強迫観念をフローの対極として位置づけることを試みる。これはフローの各構成要素を反転させて森田理論に当てはめていくことで行いたい。このようにフローの対極となる体験を定義づけることによって、よりフローの特徴が明瞭になると予想される。

「流動」では、意識の流れそれ自体の価値を考察する。そもそもチクセントミハイが没頭体験を「フロー」と名付けた理由は、その体験がしばしば「私は流れ (flow) に運ばれた」と語られたことに由来している。一方、森田は神経質治療において、まず流動を先行させている。ここでは、フローに入った結果として意識が流動していくというより、むしろ敢えて意識を流動させることでフローに入るという逆の関係が見受けられる。

「苦悩」「不安」といったテーマでは、一見ネガティブな要素に含まれる積極的価値について考察する。フロー理論ではこれらを「心理的エントロピー」と呼び、注意集中を阻害する要因としている。一方、森田理論では「煩悶即解脱」「不安定即

安心」などとして、敢えて苦悩や不安を増大させる。

最後に実験調査についてだが、詳細は未定である。現時点では、ポジティブ心理学の視点で森田療法を自助として活用する試みを考えているが、倫理的問題や危険性を伴う可能性があるため、今後慎重に検討したい。

発表者氏名：釜土詳二

所属ゼミ：森村修ゼミ

発表教室：S501

タイトル：自由における価値の地平——パーリンとテイラーの自由概念を手掛かりに

発表概要：

本発表では、アイザイア・パーリンとチャールズ・テイラーにおける「自由」概念を手掛かりに、自由における価値の問題を明らかにすることを目的としている。特に、パーリンの論文「二つの自由概念」、および、テイラーの論文「消極的自由の何が間違っているか」に焦点を絞って論じることとする。

まず、現代社会において、「自由」の問題が取り上げられる文脈のひとつに、「宗教と民主主義の共存」という問題がある。例えば、2015年1月17日のシャルリー・エブド襲撃事件は、民主主義的な「表現の自由」と「テロリズム」の対立と捉えられる傾向にあるが、実際には、「表現の自由」と「信教の自由」の対立の事例と見ることができる。シャルリー・エブド紙は、「表現の自由」を盾に、しばしばムハンマドの風刺画を描いてきたが、イスラム教を侮辱するこのような「自由」が、ムスリムの信仰を侵害するものであったことは事実であり、一部の過激派とイスラム教を同一視することはできないとはいえ、公然たる侮辱の結果、テロによる報復を招いたのは明らかである。もちろん、残虐なテロ行為が許されないのは当然であるが、マスコミによる宗教的風刺画の出版は、フランス社会におけるイスラム教の「歪められた承認」を意味し、事実上の「信教の自由」の侵害を意味しているのではないかと問うことはできるだろう。「表現の自由」を盾に、人間の実存の根幹にかかわる重要な「価値」を侵害する自由は認められるのか。むしろ、「表現の自由」を盾にした攻撃から、信仰の価値は守られるべきとはいえないか。この点、擁護すべき「自由」とは何かという問いが存在するといえる。先進諸国を中心に世俗化が進展する一方で、世俗化の進展に抗する宗教勢力の重要性も増す現代社会においては、世俗と宗教の共存、宗教的複数性を担保する民主主義の原理が問われうるのである。

次に、バーリンとテイラーの「自由」概念を取り上げる意味は、どのような点にあるのか。バーリンの論文「二つの自由概念」は、1958年の教授就任講演がもとになっているが、「二つの自由概念」における自由の消極的／積極的区別は、その後の政治的自由論に多大な影響を与え、自由論における古典的議論としての位置づけを確立している。一方、上記の講演は、東西両陣営の冷戦という政治的背景をもとに全体主義体制の復活を危惧するバーリンが、リアル・ポリティックスの趨勢を見据えた上で行った議論であり、当時の政治的・時代状況の制約を負っていることも事実である。そのため、政治的自由論の文脈では、バーリンによる消極的自由の擁護／積極的自由の批判という立論に対して、様々な議論が行われている。例えば、「共和主義的自由」の立場からは、自由な国家なしには個人の自由はないとして、マキャベリに依拠するかたちで積極的自由を擁護するスキナーや、消極的自由の概念をより精緻に議論しているペティットがいる。また、承認論の文脈では、ホネットが、消極的自由は「文化的帰属性」という積極的自由を前提していると論じている。

ただ、筆者の見解では、多様な価値観の共存が問題となっている現代社会においては、政治的自由についての議論だけではなく、自由の担い手である人間についての議論も必要である。なぜなら、人間の自由は、各人にとって重要と見なされる価値の実現を目指すものである以上、実現すべき自由における価値の地平を問うことなしに十分に論じることはできないからである。この点、テイラーの前述の論文は、バーリンの政治的自由に対し、哲学的人間学の立場からの批判として重要な論点を含んでいる。「擁護されるべき自由とは何か」という問いに回答するに当たって、今なお重要な視座を含んでいる、というのが筆者の見解である。以上、自由における価値の問題の考察を通じて、自由論は人間論によって基礎づけられる必要があることを明らかにする。

発表者氏名：桑原恭平

所属ゼミ：松本悟ゼミ

発表教室：S501

タイトル：ボランティアはどのようにして受け入れられるのか？-「する側」と「受ける側」の関係から（途中報告）-

発表概要：

総務省の平成23年度社会生活基本調査によると、1年間に

何らかのボランティア活動を行った人は約3,000万人と国民の4人に1人にのぼっている。10年前の調査よりやや減少しているが、20代から50代では増加傾向にある。そうした中で問題も生じている。

北田（2001）はボランティアの不真面目な態度が受ける側との関係を悪化させていると指摘する。また、経済活動で自立を進める東日本大震災の被災自治体が支援物資は商売の妨げになると断ったり（チャールズ 2013）、助けられることを不名誉に感じてボランティアを拒否したり（マクジルトン 2013）するなど、支援する側と受ける側の間の摩擦も報告されている。

本論文の目的はボランティア活動が拡大する中で生じている受ける側との摩擦がどのようにして起きるのかを参与観察によって明らかにすることであり、そこから、どのようにしてボランティアは受け入れられるのかを検討していく。

なお、一般的にボランティアは、自発性、無償性、公共性の3要素で定義されるが（内海 2011）、実際には大学の単位のため、あるいは有償での活動も含まれることが多く、定義では捉えきれないのが現状である。そこで本論文ではボランティア活動を「する側」「受ける側」がそう認識する行為と定義し、その行為をする人をボランティアと呼ぶ。

調査地は東日本大震災の被災地の陸前高田市など数ヶ所である。震災前からこの地でボランティア活動をしているNPO法人の日本国際ワークキャンプセンター（以下、NICE）から派遣されるボランティアとして2015年6月16日から約2ヶ月間参与観察を行った。そのうち陸前高田市で漁業や農業のお手伝いをした6月16日から7月21日までの範囲を研究対象とする。

その結果、先行研究が指摘するような「摩擦」の種はしばしば見て取れた。例えば「受ける側」のニーズが充足されていないという問題が挙げられる。漁業のお手伝いで行った養殖途中のカキを大きさと選り分ける作業はボランティアにとっては非常に難しく、「受ける側」がやり直すという二度手間が起きていた。しかし、それでもすでに2年間以上この作業にボランティアを受け入れている。また「迷惑事件」も起きた。ボランティアと「受ける側」が深夜一緒に騒いだことで近所から苦情を受けたのである。この事件はボランティアの拒否につながる可能性もあったはずだが、実際には一緒に騒いだ「受ける側」がボランティアから遠ざけられた。

こうした問題は必ずしも地域との決定的な摩擦やボランティア拒否に至らなかった。理由として考えられるのはボランティアと地元社会の交流である。参与観察中、頻りにボランティアと地元の人たちとの間でモノや食事を媒介にした交流が行

われた。こうしたいわば贈与や交換が、個別の問題の悪影響を打ち消したり弱めたりしている可能性はある。また、NICEはこの地で4年以上活動しており、その間に生まれた信頼関係もあるだろう。しかし、だからと言って「受ける側」の足手まといになったり、地域の人々の間に亀裂を生みかねない「事件」が起きたりしているにもかかわらず、それだけでボランティアの受け入れが続いているという説明は説得的とは言えない。

今後は、こうした点に着目し、NICEと地元社会が構築してきた関係を業務日誌や活動当初から続いているブログなどの一次資料からひもとくと同時に、再度現地での参与観察を行うことで、どのようにしてボランティアは受け入れられるのかという問いに更に深く取り組んでいく。

参考文献

- 北田鶴士「「奉仕活動」問題にボランティアを問う」、『日本ボランティア学会 2000 年度学会誌』、vol2、pp104～111、2001年。
- チャールズ・マクジルトン「支援を拒む人々-被災地支援の障壁と文化的背景」、トム・ギル・ブリギッテ=シテガ・デビット=スレイスター編池田陽子訳『東日本大震災の人類学-津波、原発事故と被災者たちの「その後」』、人文書院、pp31～62、2013年。
- デビッド・スレイター「ボランティア支援における倫理」、トム=ギル・ブリギッテ=シテガ・デビッド=スレイター編『東日本大震災の人類学-津波、原発事故と被災者たちの「その後」』、人文書院、pp63-97、2013年。
- 内海成治「ボランティア論から見た国際ボランティア」、内海成治・中村安秀編『国際ボランティア論』、pp3-25、京都：ナカニシヤ出版、2011年。

発表者氏名：鶴澤光佑

所属ゼミ：大中一彌ゼミ

発表教室：S503

タイトル：ブルキナファソにおける食料不安 (Food insecurity) の考察—脆弱性の概念を手掛かりに—

発表概要：

本論文では、ブルキナファソ（ブ国）における栄養不足の問題を脆弱性の視点から捉え、既存研究の整理と今後の研究課題を提示する。本研究では外部からの危機に対して抵抗措置を

有しているか否かに当たる条件付けを「脆弱性」と呼ぶ。この概念は栄養不足といった目に見えない問題を把握するのに適している。

現在約8億7千万人が栄養不足に陥り、世界の減少傾向に反してサハラ以南アフリカでは上昇している。同地域の食料安全保障に関する先行研究によると、食料問題は①旱魃など自然要因、②インフラの不足による社会経済要因、③民族対立による政治要因が複雑に絡み合い発生している。しかし、同地域の民族紛争が存在しない国の政治要因を正確に把握できていない。

また、脆弱性に関する先行研究では、対象地域や主体の現状を分析し脆弱性を減少に向けた解決策が論じられているが、対象の持つ脆弱性の歴史的な変化に着目していない。

先行研究を踏まえ、本研究では民族対立が起きずに栄養不足が発生しているブ国の食料問題に関する議論の動向を脆弱性の変化に着目して明らかにする。

デブロー（1999）は、脆弱性が存在する要因を5つ挙げている。①所得や食料源の変動、②単一の所得や食料源への依存、③社会保障や相互扶助の欠如、④政治的な権力の剥奪、⑤武力衝突だ。ただしブ国では民族対立が見られないため第5の武力衝突は考察としない。

レビューの対象文献は、日本語とフランス語の論文検索ツール CiNii、Cairn.info、そしてブ国の歴史に関する論文集 *Burkina Faso Cent ans d'histoire* を中心に得られたフランス語、英語そして日本語論文、計56件である。各文献をレビューし、農業政策、食料や財産の消費、そして共同体組織の3つに分類し分析した。

第1に、農業政策に関する研究動向である。植民地期以降の換金作物の導入は農業の近代化であり、政府による市場からの撤退と外部ドナーの流入は農民の国際的な市場へのアクセスを可能とし、地域市場の活性化に繋がったという。先行研究では換金作物栽培による国際的な販売先確保によって農民の脆弱性が緩和したと分析しているが、デブローの第1の要因、「収入や食料源の変化」による農民の脆弱性の強化を述べていない。

第2に食料や財産の消費に関する研究である。ブ国では植民地化以前から食料不足に対応すべく採集活動が行われていた。デブローの第2の要因、「単一源泉」を歴史的に避けてきたと言える。また、村落内の権力構造が食料貯蔵、端境期の発生、食料や現金の使用に影響していると述べられている。そうした研究の多くが男性による社会的なつながりを優先した財の使用によって、女性や子供、そして遊牧民といった権力構造によって排除される個人の消費する食料や現金が減り、彼らの脆弱

性が增大しているとされる。しかし、誰が村落内の権力構造によって食料不安を脱しているか検討する必要がある。なぜなら、民族対立以外の政治要因である食料不安に影響を及ぼす地域社会の政治性すなわち、デブローの第4の政治性を明らかにできるからだ。

第3に共同体に関する研究である。植民地化前の農村における相互扶助関係は労働や食料の助け合いだけではなく、教育など社会全体にも機能を果たしていた。ただし、組織内の非民主的な問題点も指摘されている。植民地化や政府の政策、そして外部ドナーの流入によって、相互扶助関係が失われ、経済的な利益を追求する生産者組織が生まれた。こうした生産者組織は、かつての相互扶助関係で民主制が欠如していたという問題点を引き継いでいる。それにもかかわらず、地方の発展の鍵だと述べられている。しかし、こうした研究にはデブローの第4の要因である相互扶助が失われたことによる影響、それに代わる制度や援助の有無について述べられていない。

先行研究ではブ国は食料の生産の面で外部の影響を受け、消費の面で伝統的な社会の影響力を維持している国家として描かれてきた。文献レビューを通じて、ブ国に関する先行研究では、デブローの第1、第3、第4の視点が欠けていた。これらの視点から同国を改めて研究することで食料安全保障に関する研究の一助となるのだ。

参考文献

デブロー、スティーブン著、松井範博訳（1999）『飢饉の理論』東洋経済新報社。

発表者氏名：月野楓子

所属ゼミ：今泉裕美子ゼミ

発表教室：S503

タイトル：ブエノスアイレスにおける沖縄移民の「救済活動」——第二次世界大戦直後の沖縄系社会

発表概要：

本報告では、第二次世界大戦終戦後にアルゼンチンの首都ブエノスアイレスに暮らす沖縄移民によって行われた「救済活動」を通して、戦後の沖縄系社会の特徴を明らかにする。報告では、アルゼンチンにおける沖縄移民の歴史、生活史を踏まえた上で、第二次世界大戦後に沖縄移民らによって行われた日本及び沖縄への「救済活動」に触れ、戦後の沖縄系社会の形成とその特

徴について考察する。

南米のアルゼンチンでは20世紀初頭から日本人が仕事を求めて入国を始めた。日本人の移民による集団での入植が戦前に行われなかったアルゼンチンでは、入国した者の多くは首都であるブエノスアイレスを中心に居住し、日本から親族を呼び寄せた。第二次世界大戦開戦までに約4000人の日本人がアルゼンチンに暮らしており、その多くを占めていたのは沖縄出身の移民であった。隣国ブラジルやペルーの日系社会と比較してアルゼンチンの日系社会は小規模であったが、同郷者や職業ごとの組織などが形成されながら生活基盤が築かれつつあった時期に起こったのが第二次世界大戦であった。

同大戦が終結した後、ハワイ、北米、南米各国に戦前より暮らしてきた日本人移民は、敗戦した「祖国」の窮状を救うべく、「救済活動」を展開した。連合国の一員であったアルゼンチンにおいて、枢軸国を祖国に持つ日本人移民は「敵国人」であったが、アルゼンチンは日本に対して終戦直前まで国交断絶及び宣戦布告を行わず、強制収容が大規模に行われたアメリカ、ブラジル、ペルーにいた日系人と比較すると戦中・戦後の待遇は悪くなかった。敗戦国日本を救うための活動が開始された時期も比較的早く、衣類や食料などの物資を送ることで、戦後の困窮した日本を支援しようと「救済活動」が始められた。

アルゼンチンの日本人移民の中で多くを占めた沖縄移民については、第二次世界大戦で地上戦が行われた故郷は望んでも帰ることのできる状況ではなく、故郷を支援するための「救済活動」には多くの人が協力した。また、それは、戦後の日系社会の中で沖縄系社会が一部において中核を担いつつ、独自の存在になっていくという意味を持つものであった。

救済活動にかかわった主な組織は、日本戦争罹災者救恤委員会、沖縄救済会、沖縄音楽舞踊協会であった。なかでも沖縄音楽舞踊協会は、資金集めにあたって大きな成果をあげたのみならず、沖縄の音楽や踊りを通して、被災状況や親族の様子もわからないまま故郷と離れて暮らす沖縄移民に慰安と親睦の場を与えたとされる。こうした戦後のアルゼンチンの沖縄移民による「救済活動」と、「救済活動」をめぐる組織形成が、戦後の沖縄系社会の形成においていかなる特徴を有していたのか、本報告を通して考察する。

発表者氏名：洪 志武

所属ゼミ：曾ゼミ

発表教室：S404

タイトル：東京在住の台湾系華僑における宗教儀礼の機能と変容-主に東京媽祖廟を事例に

発表概要：

一 研究背景

(1) 媽祖信仰について

媽祖は福建省莆田市の湄洲島に林愿ほでん（願）の六女としてりんげん生まれた。母は王氏である。彼女は生まれてから全然泣かないので、默（娘）と名付けられた。彼女は太平興国4年（979年）3月23日に生まれたので、この日は媽祖誕生日である。景德3年（1006年）に亡くなった。媽祖は吉凶禍福を予知する能力があるので、村人の病気や悩みなどを解決することができた。媽祖が亡くなった後、村人は彼女の霊能が助けてくれることを信じ、最初は海運安全の利益があるので、海の村人たちに信仰されていた。彼女の霊能が素晴らしいことがどんどん広まって、そして、中国の皇帝は次第に媽祖に封号を賜った。宋時代から清代までおよそ28回の封号が掲げられている。康熙23年（1684年）に康熙帝から「天后」が賜われた。

(2) 日本媽祖会の建立と盛衰。

日本媽祖会は1978年7月9日に発足しました。最初は台湾北港朝天宮からの分霊を箱根観音福寿院の本堂に安座された。入江修正さんは初代会長を務めた。1991年6月12日に「日本媽祖廟建廟委員会」が設立された。「2007年12月17日に北港

朝天宮から鎮殿媽とうえいぼ（東瀛媽）・進香媽（朝京媽）、及び曾マリさ

んからは金媽祖かんじょう（宝興媽）三尊の勸請式典に入江名誉会長をはじめ、日本媽祖会の役員が参加した。20日午後、成田空港に大勢の信徒に出迎えられた。12月20日に小岩に「東京朝天宮」に媽祖様を仮安座した。[林丕継 2009]しかし、東京媽祖廟の連代表によると、日本媽祖会は資金や場所などの問題で幕を閉じました。2013年10月に小岩に仮安座されていた鎮殿媽は東京媽祖廟の二階に勸請され、正式に安座した。ある元日本媽祖会の信徒の話によると、日本媽祖会の金媽祖は現在千葉県香取郡神崎町にある宗教法人日本大道院純陽宮に移された。

(3) 東京媽祖廟は詹徳薫会長、連昭恵代表などの台湾華僑たちが資金を寄付し、建立した廟である。連代表のインタビューによると、詹徳薫会長はかつて媽祖にある重要なビジネスが成功させられたら、東京で媽祖廟を作ると立願した。後ほど、このビジネスは本当に成功したので、詹徳薫会長は媽祖に約束を守り、東京で媽祖廟を建立するプロジェクトを始めた。詹会長

が投資していた会社の連昭恵代表は宗教上に詳しいので、実際に建廟することに取り組んでいる。連代表は「東京媽祖廟は日本媽祖会の取り組みによって建立されたのではなく、詹徳薫会長の立願と私の働きによって華僑を動員し、廟の場所を探し、2013年に建立することができた。日本媽祖会との関係は小岩の東京朝天宮に祀られていた鎮殿媽を東京媽祖廟に移され、そして、入江修正さんからの1000万円の寄付だけだ」と話しました。

二 研究目的

(1) 本研究の方向性は主に宗教人類学の立場から、研究を進めていきたい。

(2) 以下の問題を明らかにし、調査を進める。

①東京媽祖廟の建立過程を明らかにしたい。②儀礼で使われている神具や供物の意義及びそのプロセスの意義も明らかにしたい。③その儀礼は東京在住の台湾系華僑のエスニシティに

果たす役割を解明したい。④東京媽祖廟の連昭恵代表が信徒拡大の取り組みを明らかにしたい。⑤東京媽祖廟2階の日本朝天宮の分霊は北港朝天宮であり、3階は福建省泉州の天后宮の分霊である。分霊先のお寺の状況も明らかにしたい。

三 研究方法

①東京媽祖廟の運営の仕組み、東京媽祖廟と関連している信徒組織の状況、東京在住の台湾系華僑のエスニシティ、新たな東京在住の台湾系華僑コミュニティの構築に関しては連昭恵代表と護持協賛会の蔡美銀会長と住職の証覚法師による聞き取り調査で研究を進める。②東京媽祖廟で行われている宗教儀礼の内容やプロセスについては参与観察で調査を進める。

四 先行研究

(1) 鈴木洋平・前野清太朗は日本媽祖会の長年の活動によって、数度にわたる挫折を経た東京媽祖廟の建立過程と日本媽祖会が在日台湾人コミュニティに果たしている役割を考察している。具体的には「東京媽祖廟を建立する際に最大の牽引力となったのが、1976年に台湾出身者を中心に結成された日本媽祖会であった。日本媽祖会は日本での媽祖廟建廟を目的に、一時的な頓挫や仮安座を繰り返しながら、大久保の東京媽祖廟に結実するまで、様々な計画を実施してきた。」「日本媽祖会の果たした役割は様々であるが、いずれの時期にあっても共通していたのが、日本に台湾出身者が集合し得る心の拠り所となる廟の建立という目的であった。」「[鈴木・前野 2015]と指摘した。

しかし、東京媽祖廟で行われている儀礼は述べていない。そして、鈴木・前野は一つの点で間違っている。それは東京媽祖廟の建立及び経営運営管理会の主な担い手は詹徳薫氏と連昭恵氏であって、東京媽祖廟の建立は日本媽祖会の取り組みによって、結実されたわけではないことである。その背景は日本媽祖会の曾鳳蘭氏が東京朝天宮の金媽祖が東京媽祖廟に移転しなかったのが原因で、東京媽祖廟1周年記念晩餐会の講演で詹徳薫¹会長は「最近よく東京媽祖廟と日本媽祖会が同じ組織だと思っている方がいるのですが、ここで私ははっきりしたいのは東京媽祖廟が日本媽祖会とは全く違う組織です。」と述べていた。私は東京媽祖廟の建立過程と東京媽祖廟の宗教儀礼が東京在住の台湾系華僑のエスニシティに果たしている役割について連昭恵代表の語りによって聞き取り調査を行いたい。

五 参考文献

鈴木洋平・前野清太郎「結節点としての『廟』-在日台湾人コミュニティに

おける東京媽祖廟の建立」(東京都市大学共通教育部紀要 抜刷) VOL. 8、

2015年

林丕継『日本媽祖会創立三十周年記念特刊』勃佳(瑞泰)印刷 文具有限公司、

2009年

発表者氏名: チャンエンニイ

所属ゼミ: 浅川希洋志ゼミ

発表教室: S301

タイトル: 在日中国人の子どもたちに対する教育支援の現状に関する分析・考察

発表概要:

研究背景

近年の世界は急速にグローバル化が進み、日本企業の国際競争力を高めるために、安価な労働力と日本の経済発展に有益とされる「高度人材」が必要とされた。1989年「入国管理及び難民管理法」の改定により、日系南米人が外国人労働者としての来日する途が開いたことを契機で、日本に定住するニューカマーが急増した。法務省入国管理局(2012)の統計によると、在日外国人の数は約215万人、日本の人口に占める割合は1.7%

¹詹徳薫会長は1960年代に来日したオールドカマーであり、早稲田大学に留学していた。現在(2015年)は日本中華聯合総会の名誉会長である。

である。その中において中国人の割合が増加傾向にあり、大人のみならず子供の数も増えてきている。大人と一緒に移動してきた子どもたち、日本生まれ育ちの子どもたち、学齢期にあたる子どもたちの数は合わせて11万人に上る。このような文化的、言語的、民族的に異なる背景を持つ子供達が小中学校に入学することによって、教育現場に大きな影響が出ている。このような彼らに対する第二言語としての日本語教育は極めて重要である。子どもたちが日本でどのような生活を送っていて、どのような問題を抱えているのだろうか。彼らに対する多文化教育を果たすべき役割が多いと思う。

子供たちは自分から好んで日本での生活を選んだわけではない。日本ではマイノリティーとしての彼らは母語や祖国の文化から切り離され、祖父母と離され、親子間のコミュニケーションの際に生じる摩擦やホスト社会からの差別により自らのアイデンティティに悩み苦しむ。さらに現在、日本と中国は領有権問題や靖国神社の参拝問題、南京事件の問題等の歴史認識に関する問題をめぐって摩擦がある。中国人の子供達には自己肯定感が低くなる恐れがあると言われている。異文化の中で、最も多感な子ども時代を心理的な問題などを抱えながら成長していくと、成人してから、ホスト社会に適応ができていくという恐れもある。

外国につながる子どもたちは様々な問題を抱えているが、それに対するサポートも少しずつは進んでいる。例えば、偏見を低減するような国際理解教育が行われ始め、マイノリティーに向けて継承語の教育も重視されてきている。現在行われているこのような教育支援によって、マイノリティーである子供達が自分なりのアイデンティティを確立し、自己肯定感を向上するため、さらにグローバル化が進む現代社会において多文化、多言語資源を身につけるように今後さらなるサポートの充実化が求められるであろう。

研究目的

本研究では、ライフストーリーの視点から、中国にルーツを持つ家族にインタビューし、彼らが抱える問題を分析し、現在に至るまでの日本における彼らへのサポートの現状を明らかにすることで、より良い効果的なサポート体制を考察することを目的とする。

研究方法

1 文献調査

多文化教育に関して書籍を読み、外国につながる子供たちへのサポートについて、多様化の方法を比較検討する。

2 インタビュー

中国にルーツを持つ家族、教育現場の教師、あるいは地域社会のボランティアの方にインタビューをし、今まで進んでいるサポートのアクセスと活用を検討する。

研究意義

本研究により、これからの在日中国人の子供達の抱える問題に対して少しでも光を当て、多言語、多文化教育の発展につながれば幸いである。

参考文献

加賀美常美代 『多文化共生論 ー多様性理解のためのヒントとレッスン』(明石書店、2013)

鷹田佳典「多文化社会と教育の社会的公正ーニューカマーの子どもが抱える学習困難」(人文書院、2013)

加賀美常美代・横田雅弘・坪井健・工藤和宏 「多文化社会の偏見・差別 ー形成のメカニズムと低減のための教育」(明石書店、2012)

渡戸一郎、井沢泰樹編著『多民族化社会・日本〈多文化共生〉の社会的リアリティを問い直す』(明石書店、2010)

趙 衛国 『中国系ニューカマー高校生の異文化適応ー文化的アイデンティティ形成との関連からー』(御茶の水書店、2010)

植田晃次、山下仁編著『「共生」の内実ー批判的社会言語学からの問いかけ』(三元社、2006)

中島和子編著『バイリンガル教育の方法』(アルク、2001)

太田青雄編著『ニューカマーの子どもと日本の学校』(国際書院、2000)

中島智子編著『多文化教育 多様性のための教育学』(明石書店、1998)

発表者氏名：林婷民

所属ゼミ：浅川希洋志ゼミ

発表教室：S501

タイトル：日本人ひきこもりと在日外国人ひきこもりの比較：家庭環境と社会環境による影響。

発表概要：

◇研究目的

目的として、ライフヒストリー研究法に通して、家庭環境と社会環境が日本人ひきこもり対象者と在日外国人ひきこもり対象者にとって、どういった影響があるのかを明らかにしたい。そして、この研究の結果をさらにひきこもり対象者の支援(支

援団体へのフィードバックなど)に応用したいと考えている。

◇研究方法

ライフヒストリー研究法を使用すると考えている。

◇ひきこもりについて

「ひきこもり」とは、不登校や就労の失敗などをきっかけに、何年もの間自宅に閉じこもり続ける人の状態像を指す言葉である。ひきこもりは精神疾患の診断名ではなく、あくまでも状態像である。

本研究で使いたいひきこもりへの定義は、ひきこもり研究の第一人者、斎藤環先生の定義を使っていきたい。

- ① 六ヶ月以上社会参加していない。
- ② 非精神病性の現象である。
- ③ 外出していても対人関係がない。

上記すべてを満たす場合は、「ひきこもり」と考える。

◇ひきこもりの現状

平成22年に内閣府の行った調査によると、15歳~39歳の年齢層を対象にした調査結果は、「狭義のひきこもり対象者」が約23万人で、「準ひきこもり対象者」が約46万人と推計された。両者を合わせると実は約70万人ものひきこもりの若者が存在するという結果だった。

同じ調査で、ひきこもりになったきっかけに関する質問の回答は、職場関係(就職活動に失敗した、職場に馴染めなかったなど)は44%占めていて、学校関係(受験失敗、学校の人間関係など)が約20%占めている。

◇海外から見るひきこもり

ひきこもりに関する初の国際共同調査の紹介ーひきこもりは海外にも存在するのか?ーの文献は、日本と海外の精神科医にインタビューし、ひきこもりの症例をどんな診断をするのかを調査した。ICD-10(疾病及び関連保健問題の国際統計分類第10版)・DSM-IV(精神障害の診断と統計マニュアル第4版)の診断基準で診断できるかどうかについて、日本精神科医は5割以上その診断基準で診断できないと回答した。他国の精神科医の回答も様々であったが、日本の精神科医と同様に、診断できないという回答を多く得た。

ICD-10・DSM-IVの診断基準にとらわれずに、最も相応しい診断名も自由記載してもらった。「Hikikomori」とダイレクトに診断したのは日本、韓国、台湾、タイ、アメリカの精神科医の

一部であった。

◇研究対象

- ・日本人ひきこもり対象者
- ・在日外国人ひきこもり対象者

今現状引きこもっている対象者にライフヒストリー研究法を実施するのはいくつかの難点があるので、今一番望ましい対象者は「ひきこもり経験者」である。

◇予想している結果

家庭環境と社会環境はひきこもり現象に関係あると考えられる。そして、この二つの環境はどうやってひきこもりになる原因やなる過程に影響してくるのはライフヒストリーの調査結果として求めてたいと思っている。

さらに、ライフヒストリーの調査結果を分析して、日本人ひきこもり対象者と在日外国人ひきこもり対象者の差異を比較したい。そして、研究結果をひきこもり対象者の支援につなげることができればいいと思っている。

◇今後の問題点

1. 調査対象者への接触のプロセス。

支援団体とコンタクトを取り、協力してもらえる「ひきこもり経験者」を調査対象として調査を行いたい。

2. 二人の対象者（日本人のひきこもり対象者と在日外国人ひきこもり対象者）を調査し、内容として著しい差異がない場合は、どうやって分析するのを考えなければならない。

発表者氏名：呉善美

所属ゼミ：高柳俊男ゼミ

発表教室：S402

タイトル：「結婚移住女性の日本への社会適応に向けて」

発表概要：

1 テーマ

「結婚移住女性の日本への社会適応に向けてー多摩市及びその周辺で生活する結婚移住女性を中心に」

2 研究の目的

- (1) 日本人と結婚し、外国から移住した女性の異文化適応努力とその家族の異文化受け入れ努力について調べ、結

婚移住女性が直面した問題の解決に向けて課題を検討する。

- (2) 地域の国際交流センター・外国人支援団体・女性支援団体による多文化共生支援施策の内容とその課題を考えることによって支援のあり方を考察する。

3 背景

- (1) DV の問題、離婚の問題、コミュニケーションに関する問題など、結婚移住女性をめぐる問題については多くの先行研究がある。しかし、このような問題解決のための結婚移住女性だけではなく、その家族も含めた研究は十分行われていない。
- (2) 結婚をつうじて日本社会、その家族の中に入る結婚移住女性は、外国人と女性という二重の脆弱性を持ってあり、家族の異文化理解の努力が重要である。
- (3) 外国人の集住地域で生活している結婚移住女性に比べ、都心から離れている郊外で生活している結婚移住女性の場合、同じ出身国のコミュニティからの支援を受けにくく、孤立される恐れがある

4 研究の内容

- (1) 国際交流センターを利用している結婚移住女性と接し、外国人のコミュニティに参加することで事例を探し、移住女性とその家族のインタビューを行い、異文化理解努力を分析する。
- (2) 結婚移住女性の異文化適応を容易にするため、国、地域社会による支援のあり方や当事者である結婚移住女性とその家族ができることについて考察する。
- (3) 国際交流支援センターの活動内容とネックになる問題点について考察する。

発表者氏名：市岡 卓

所属ゼミ：中島成久ゼミ

発表教室：S502

タイトル：シンガポールと ISIS (イスラーム国) ー民族間・宗教間融和の視点を中心にー

発表概要：

シンガポールは、2001～02 年のテロ未遂犯の拘束以降、ムス

リムの過激化防止に取り組んできたが、最近では、ごく少数ではあるがムスリムが ISIS (イスラーム国) の活動に加わっている。本発表では、シンガポールにおけるムスリムの過激化防止への取組みの問題点について、民族間・宗教間融和の視点を中心に検討する。

(発表内容)

1 シンガポールのムスリムと過激主義

多民族・多宗教国家シンガポールは、過去に3回あった民族紛争を二度と繰り返さないよう、広範にわたる民族間・宗教間融和のための政策を推進してきた。ムスリムは14.7%と少数派であり、その大半をマレー人が占めている。

しかし、2001~02年には、東南アジア地域で活動するイスラーム過激主義組織ジュマ・イスラミーヤ (JI) のメンバーであるシンガポール人ムスリムが国内でテロ未遂犯として拘束された。このことは、ムスリムへの不信・敵意が民族間・宗教間の分裂を招き、国の存立をも揺るがしかねない、深刻な事態と受け止められた。そこで、政府の意向に沿って穏健なイスラームの教義の普及などが進められる一方で、宗教指導者による拘束者の再教育・社会復帰支援や過激主義の防止対策が行われてきた。これは、1970年代以降の世界的なイスラーム復興の潮流の中でのムスリムの宗教意識の高まりを懸念し、イスラームの管理を強めてきた政府が、管理の一層の強化を図る過程でもあった。

2 ISIS の台頭とシンガポールへの影響

その後 JI は弱体化したが、現在は、2014 年以降台頭してきた ISIS (イスラーム国) が新たな脅威となっている。ISIS は世界中のムスリムを勧誘しているが、シンガポールからは数名が現地に渡り、また、数名が渡航前に拘束された。

ISIS の戦闘要員が出身国に戻ってテロ行為を行う可能性が指摘されており、ISIS は国内治安上の脅威とみなされるが、政府は、テロが起こってしまった場合に民族間・宗教間融和に与える影響について、より大きな懸念を持っている。

3 シンガポールの ISIS への対応をめぐる課題

ISIS は、過激主義への対応に取り組んできた宗教指導者たちに新たな困難をもたらしている。JI は宗教学校で組織的に勧誘を行っていたが、ISIS はインターネットを通じて勧誘を行っており、治安当局が個別の事案について把握することが困難である。また、JI が各国の政府を倒してイスラーム国家を樹立する

としていたのに対し、ISIS の勧誘は、「現代の聖遷(ヒジュラ)」と称して彼らの実効支配領域への移住を促すなど、より訴求力が強いとされる。ISIS の強力なメディア戦略に対抗できるネット上のコンテンツ開発が課題である。

また、対策に当たる宗教指導者は政府の利益を代表しているという見方がムスリム社会の中では根強い。このような疑念を持たれていることは、彼らの活動の障害となる恐れがある。情報公開などによりムスリム社会からの信頼回復を図ることが課題である。

4 ISIS の台頭がシンガポールの民族間・宗教間融和に及ぼす影響をめぐる考察

現在、ISIS に参加するムスリムがいても、かつての JI のテロ未遂犯拘束の時のようには、ムスリムへの不信・敵意は広まっていない。国を挙げての民族間・宗教間の対話・交流の成果だともいわれるが、国民全体が物価高騰、交通混雑、外国人労働者増加などの政治課題を共有し、エスニック・グループ間の連帯が強まっていることも一因と考えられる。

シンガポールでは、イスラーム過激主義はムスリム社会の問題であり、ムスリム社会が一義的に対処すべきとされ、ムスリムが「テロリスト予備軍」として疑念の対象になってきた。しかしヨーロッパ諸国ではイスラームへの改宗者が ISIS に参加した人々の約6人に1人を占めるともいわれる。イスラーム過激主義は本当にムスリム社会だけの問題なのか、また、そうではなかった場合にシンガポール社会は対処できるのか、さらに、民族間・宗教間の関係にはどのような影響があるのかなどの点に、注目していく必要がある。

発表者氏名：満伶

所属ゼミ：松本悟ゼミ

発表教室：S502

タイトル：中国農村留守児童を取りまく状況

——親子の離れて暮らす視点から——

発表概要：

本研究の目的は、中国において、親の愛情を極めて欠如させる農村留守児童問題について、子どもや家族の視点から、親子が一緒に暮らすことが困難な理由を明らかにすることである。

中国の農村留守児童とは、親の片方または両方が都市に長期

間出稼ぎに行くことで、戸籍のある農村に残され、親と一緒に生活できない18歳未満の未成年者を指す（全国婦女連合会2008）。

改革開放後、出稼ぎのため長期間大都市で暮らす農民（農民工）が大量に発生し、農村に取り残される留守児童が増え続けている。その結果、人生に積極的な意義を見出せずに自殺したり、親の保護を受けられずに不慮の事故に合ったりするケースが後を絶たない。問題の深刻さはメディアでは報道されるものの、先行研究では統計的な調査が多くミクロな視点が欠けている。本研究では、留守児童と家族への聞き取り調査を通して、ミクロな視点から問題が解決しない理由の一端を明らかにする。

先行研究では、留守児童が通う学校と家庭の2つの側面から論じられている。まず学校だが、農村では教員が不足しており（稲井 2011）、留守児童は成績の両極化、学習習慣がよく身に付けないなど問題が指摘されている（謝他 2010）。家庭では、両親の代わりに面倒をみている祖父母が教育の重要性を理解せず（稲井 2011）、家庭内のコミュニケーションが少ない（余 2013）。筆者は2015年2月に留守児童が多い湖南省で調査を行ったところ、留守児童は学校でよく体罰を受け、非留守児童より学習能力が低く、学習に消極的な状態だった。生まれてから十年以上両親と離れて暮らすことが子どもにとってマイナスなことは明らかだった。出稼ぎが必要だとしても、ではなぜ親子と一緒に出稼ぎ先の都市で暮らせないのか。

この問いに対して、2つの仮説を立てた。第1は、子どもと都市で一緒に生活する費用を稼ぐことが難しいから（余 2013）、第2は、文化や習慣の違いなどから留守児童自身は地元の農村で就学したいから（肖 2012）というものである。

この仮説を検証するために、筆者は今年8月に、出稼ぎ者が非常に多い広東省東莞市で留守児童を抱える5人の出稼ぎ者にライフヒストリーインタビューを行うと同時に、留守児童の親でトラック運転手をしている7人にフォーカスグループディスカッションを行った。

その結果、第1の仮説に対しては、経済的な理由はあるものの、それ以上に時間の問題が大きいことがわかった。出稼ぎ者の収入は基本的な生活は可能なレベルだが、仕事の不安定さや長期間労働によって子どもの世話をする時間がない。

第2の仮説に対しては、子供は親と共に生活し都市で就学できるなら都市で就学していた。ただし、都市の公立学校の入学条件が厳しいため、都市で就学する出稼ぎ者の子女は衛生状況や教育環境が公立学校より劣悪な民弁学校と呼ばれる私立学

校に入学していた。そこでは先生も生徒の親と同様に稼ぎ者であり、公立学校では起こるような差別などは起きていなかった。また、子供は年齢が小さいから、早く適応でき、方言の問題もなかった。

また、調査を通して親と子供が都市で暮らせない別の理由あると考えられる。中国の制度上、大学に入る前の試験は戸籍所在地で参加しなければならず、ある出稼ぎ者は「中国では地域によって教材や試験内容が異なるため、子供は都市での勉強が、地元の試験によく活かされるわけではない」と言っていたからだ。

本調査の結果、仮に子どもが出稼ぎ先で親と一緒に暮らせても、親と一緒に過ごす時間は限られており、精神的・物理的に安定した生活を送ることは難しいと考えられる。教育面でも質のよくない民弁学校に通うことは必ずしも子どもたちの将来に良いことだとは考えられなかった。留守児童が両親と一緒に暮らす場所として現状では出稼ぎ先は適切ではない。だとすれば、農村で一緒に暮らすことはできないのか。この点を今後更に研究する必要がある。

参考文献

- 全国婦女联合会、「全国农村留守儿童状况研究报告」、2008. 2. 27
余凌、「留守经历与农村儿童发展」、上海：上海社会科学院出版社、2013年
肖庆华、「农村留守与流动儿童的教育」、北京：中国社会科学出版社、2012年
谢妮、申健强、陈华聪、「农村留守儿童教育现状研究」、北京：经济科学出版社、2010年
稲井 富赴代、「中国の貧困農村における義務教育についての一考察」、高松大学 研究紀要 第54・55合併号、2011. 2. 28、p. 47～70

発表者氏名：田島樹里奈

所属ゼミ：森村ゼミ

発表教室：S402

タイトル：大衆社会におけるメディアと暴力

—映画『ハンナ・アーレント』から現代を考える—

発表概要：

本発表の目的は、映画『ハンナ・アーレント』を切り口に、大衆社会におけるメディアと暴力の密接な関係について哲学

的な考察を加えながら検討することである。その際、2013年に岩波ホールでも公開され、現在ではDVDにもなっている映画『ハンナ・アーレント』を切り口とすることで、10代・20代の学生の方々にも身近な問題として本テーマに関心をもってもらうことを意図している。というのも、メディアや暴力の問題は、現代社会に暮らす私たちにとってもっとも身近な問題であり、「国際文化」というフィールドにいる以上、避けることのできない重要なテーマだからだ。歴史が途絶することなく続いている以上、現在と過去とは地続きであり、それが未来へと繋がっていく。私たちが過去から学び、現代と未来について思考しなければ、よりよい未来は訪れない。アーレントが「私たちには世界を変え、その中で新しいことを始める自由がある」と述べたように、私たちは新しい未来を切り開く自由をもっている。その自由をいかに活用するかは私たち次第である。

本発表で映画『ハンナ・アーレント』を取り上げる理由は、映画とアーレントの思想を通じて、一般的に避けられがちな哲学に少しでも関心をもち、身近な学問であることを伝えたいという気持ちがあるからだ。難しい哲学書を読むことだけが哲学を学ぶことではない。私たちが生きるさまざまな場面で哲学的問いは生起する。アーレントは、人が考えることをやめたとき、人として生きることを放棄することになると述べていた。彼女がさまざまな問題に巻き込まれながら、あらためて学んだことは「他者の視点に立って考えてみること」の重要さである。ユダヤ人問題、全体主義、ユダヤ人絶滅計画、こうしたさまざまな問題は、私たちと同じ人間によって引き起こされた歴史である。人は善くも悪くも世界を変えることができってしまうのだ。本発表では、とくにアーレントの晩年の思想を時代背景とともに考察していきたい。

哲学者アーレントが生きた時代は、近代科学技術が飛躍的に進み、人々の生活が向上した一方で、2つの世界大戦が勃発した、まさに〈暴力の世紀〉でもあった。ドイツでは1933年にヒトラーが政権を掌握すると、たちまちに国内が一変した。ヒトラーは純粋血統主義を目指すべく、ユダヤ人絶滅計画を実行した。結果として、600万人ものユダヤ人たちが人権を剥奪され、生きる資格を奪われた。ここで忘れてはならないのは、ナチス政権の指導者ヒトラーは、ドイツ国民の投票による民主的な選挙によって選ばれたことである。なぜ国民はヒトラーを選んだのか。そこで力を発揮したのがメディアである。科学技術の進歩に伴い、映画やラジオなどのメディアが急速に広がった。とくにラジオは、当時の人々にとって一大情報源となった。現代の私た

ちがスマートフォンに関心を向けるように、当時の人々は新しいメディアに魅了され、夢中になったに違いない。こうしたメディアの強大な力に目をつけたのが、ナチス政権の指導者・ヒトラーであった。本発表では、ナチス政権とメディア、全体主義と暴力などの問題をアーレントの思想と絡めながら考察したい。

発表者氏名：任涵廷

所属ゼミ：曾ゼミ

発表教室：S402

タイトル：現代中国におけるミャオ族社会の変貌

—改革開放後の婚姻習俗を中心にして—

発表概要：

本研究の目的は、婚姻儀礼や婚姻習俗の変化原因の分析を通じて、近代化がミャオ族の伝統文化に与える影響を明らかにすることである。

改革開放以降、経済発展やインフラの整備、また民族観光の振興は、外部の観光客の流入、そして若者たちの出稼ぎを生み出した。こうした人の流動により、少数民族社会は重大な転換期に直面している。彼らの伝統文化が急速に変容し、場合によっては消失しようとしている。しかし、民族の風俗習慣の変化と近代化との関係について、文化的な視点からの研究が少ない。

伝統的なミャオ族社会は父系親族集団を基盤として成り立っており、婚姻関係を通して人々のネットワークを広げている。本稿ではミャオ族の婚姻習俗を中心にして、ミャオ族の伝統文化の変化を論じたい。

ミャオ族の婚姻習俗の変化は、主に初婚年齢、恋愛形式、女性の嫁ぐ時期、民族衣装、婚姻範囲において起こっている。①女性の初婚年齢は、1990年代から20歳代が主流となり（佐藤、2014）、②生涯の伴侶を伝統的には対歌（歌掛け）によって得ていたが（鈴木・金丸、1985）、今では歌わ／歌えなくなったこと、③女性は婚礼後も相当の期間「不落夫家」（実家に留まること）をしていたが（巖、1996）、1990年代以降は時を置かずに「坐家」（夫方で夫婦同居）に至っていること、④それに伴い、実家から婚家への新婦の移動と嫁入り衣装の移動がもはや同じタイミングでは行われなくなったこと（佐藤、2014）、⑤人の流出が起こり、

外地において同じミャオ族でも異なる下位集団の異性や他の民族の異性と結婚するケースも出てきていること(曾、2002)などである。

これらの婚姻習慣の変化の原因として、国家意志、民族政策や教育の発展、メディア、ファッション、市場原理、科学知識、文化伝統など様々な要素の影響によりこの半世紀余りの間に変化してきているという分析がある(刘・吴、2009;楊・徐、2000)。

筆者は2015年8月に中国貴州省の黔东南苗族侗族自治州雷山県に属する上郎徳村で予備調査を行った。現地の概況を把握しながら、先行研究の内容を検証した。さらに結婚集中時期を確かめ、婚姻習慣を中心にフィールドワークを実施した。また、当地の人と信頼関係を結び、本調査の調査対象を選んだ。

その結果、先行研究が指摘するように、人口流動の面において、出稼ぎまたは進学就職のため、村に出入りのケースも少なくない。また、初婚年齢は20代が主流だった。恋愛形式は主に自由恋愛で、その対象もミャオ族に限らず、各民族の人々と通婚できる。婚姻儀礼及び婚姻習慣を簡略化する傾向も出てきている。

筆者は婚姻習慣の状況と変化について、主に恋愛形式、持参財、結納品、結婚披露宴の出費、送親(嫁入り)、迎親(嫁取り)、そして帰省の変化に関する聞き取り調査を行い、そして、異民族間の通婚例を探した。なぜなら、近代化の下に、民族伝統的な婚姻習俗の文明化への適応、異民族の文化によるミャオ族の婚姻習俗への影響と受容を明らかにするためだ。予備調査では、儀礼や習俗のミクロな視点から比較し、検討した。今後、マクロな視座から、異民族間の通婚による民族伝統的な婚姻習俗への影響を検討する。そして、民族伝統的な婚姻習俗を通時的な視野から比較し、婚姻習俗の変化の意味、すなわち、婚姻習俗において変化した部分と変化しにくい部分を分け、後者が伝統文化の中で果たす役割について考察したい。

参考文献：

日本語文献：

嚴汝嫻『中国の少数民族の婚姻と家族』第一書房1996年

佐藤若菜「衣装がつなぐ母娘の「共感的」関係：中国貴州省のミャオ族における実家・婚家間の移動とその変容」『文化人類学』79(3):2014. 305-327

鈴木正崇・金丸良子『西南中国の少数民族——貴州省苗族民俗誌』古今書院1985年

曾士才「中国における少数民族の“観光出稼ぎ”と村の変貌」鈴木正崇、吉原和男編著『拡大する中国世界と文化創造』弘文堂、2002年

中国語文献：

刘鋒, 吴小花. 「苗族婚姻制度变迁六十年——以贵州省施秉县夯寨为例」『民族研究』, 2009, 02:38-46+109.

杨昌萍, 徐海兵. 「黔东南苗族婚俗的变化」『贵州师范大学学报(社会科学版)』, 2000, 03:58-60.

発表者氏名：覃芙蓉

所属ゼミ：中島成久ゼミ

発表教室：S403

タイトル：訪日中国人旅行者の消費行動に関する研究

発表概要：

本研究は中国国内で特別な消費行動を行う「80後」世代が日本でどのような消費行動を調査し、彼らの海外旅行における文化的な行動様式の特徴を明らかにすることを旨とする。

中国の「80後」とは、「1980年代生まれ」の世代を指す。「80後」をターゲットとする理由は2つある。第1に、日本観光局のデータによると、訪日中国人は20代や30代の「80後」が中心になっているからだ。第2に、改革開放や一人っ子政策の下に生まれ育った「80後」は、文化大革命の影響を受けた世代と違い大学教育を受け、ホワイトカラーの職に就くなど所得の面、またインターネット使用の面でも明確に一線を画す世代だからだ(松浦、2008)。

日本観光局によると、2014年の訪日外国人旅行者は約1341万人で、そのうち中国人旅行者は240万人で三位だったが、前年比の伸び率は83.3%で一位である。2014年に国別の旅行消費総額では、中国が前年比102.4%増で最も多く、総額の約4分の1以上に上った。また、1人当たりの旅行消費額の伸び率も過去最高だった。1人当たり旅行中支出では、中国人が一番高く、約20万円である。2015年2月に中国の春節期間中、訪日中国人45万人、消費額約60億元(約1140億円)という驚きの額をたたき出した。そうした消費行動は爆買いと呼ばれた。

日本観光局では統計的な調査だけで購買理由は明らかにさ

れていない。先行研究では、中国人の中国国内の消費行動の分析や、ニュースでの訪日中国人旅行者の爆買の理由が一言はあるが、文化的な側面からの分析は見られない。そこで、本研究では「80後」への聞き取り調査から、訪日中国人観光客が海外旅行における文化的な消費行動を明らかにする。

中国人の消費行動に関する先行研究では、面子、人間関係など文化の側面から論じられている。面子は中国人の人間関係において最も精緻な基準であり、義務と差別化としての面子消費が見られる（金春姫，2010；林語堂，1935）。また、集団主義を重視する日本人に対し、中国人は自らの関係集団のみを重視する関係主義という行動をとる（園田茂人，1997）。中国人の自分を中心とした同心円状の人間関係「圈子」を形成する（費孝通）。「圈子」の中で、メンバーは情報交換することが多いため、同じ消費行動を取る（徐向東，2015）。

中国人の購買行為は個人の財力や社会的身分を示すシンボルであり、「圈子」の中で社会的ステータスを示すために面子消費を重視している（王衍宇，2006）。「80後」消費行動に関する先行研究によると、両親や祖父母からの愛情の一人っ子への集中は、豪華一点主義をもたらしている（隅田孝，2006）。また、「行動・価値観」の面では、80後世代はマナー、健康、ボランティアの意識が強くなっている（小野田哲弥，2012）。

筆者が2015年の9月と10月の「80後」を対象として日本での予備調査から「80後」以前の世代と「80後」世代では消費行動に違いが見られた。年上の世代は日本製の製品を重視するが、「80後」は一番多く買った化粧品についても生産地を重視せず、ブランドを重視していた。また、爆買の商品について、ぜいたく品の以外は主に電気製品と健康商品を年上世代が購入したのに対し、「80後」には同様の消費行動は見られなかった。したがって、「80後」は日本でも年上世代とは異なる特別な消費行動があると考えられる。爆買は年上世代による一時的な現象ではないか。「80後」の日本における消費行動を調査し、今後の研究で明らかにしたい。

参考文献

- 隅田孝（2006）「若者市場論」，pp. 117-118
- 金春姫（2010）「中国市場における面子と消費者行動に関する考察—既存文献のレビューに基づいて—」
- 園田茂人（1997）「企業—異文化理解の落とし穴」，有斐閣
- 徐向東（2015）第2部「爆買の背後にある中国人の消費性向」
- 王衍宇（2006）「中国におけるブランド消費市場の形成と企業ブランド戦略に生成」，環太平洋圏経営研究、第8号、

- 金春花（2013）「中国『80後』の特性から見る自動車購買志向についての考察」
- 小野田哲弥（2012）「中国“80后”消費者意識調査レポート（I）」

A. 論文部門【学部生】

発表者氏名：松川 友姫

所属ゼミ：松本悟ゼミ

発表教室：S301

タイトル：なぜ開発途上国がバラエティ番組で扱われるようになったのか

～テレビにおける開発途上国の取り上げ方の変化から～

発表概要：

本論文の目的は、テレビにおける開発途上国の取り上げ方の変化を分析することで、開発途上国への向き合い方を再考することである。

筆者は中学生の頃に観た、タイの孤児院で活動する女性を描いたテレビ番組がきっかけで国際協力に関心を抱いた。その当時、テレビを通して伝えられる開発途上国のイメージは貧困や紛争であったと記憶している。筆者の個人的な記憶を検証するため、日本が世界最大の援助国になった1990年から25年間のNHKを含めた東京キー局の番組表を5年おきに分析した。その結果、2005年までは開発途上国を扱う番組のほとんどがドキュメンタリーに分類できるものだったが、2010年頃からバラエティ番組が中心になっていることがわかった。

先行研究によれば、開発途上国は政治や核実験、国際貢献といったテーマでマスメディアに扱われてきた（荻原1996；卓1995；田中2004）。筆者の記憶に近い。その一方で、バラエティ番組の基本は笑いの追求であり（鹿島2011-12）、その題材として前述したようないわば「問題」ばかりを抱えている開発途上国が扱われていることに疑問を抱いた。

なぜ開発途上国がバラエティ番組で扱われるようになったのか。この問いに対する仮説を構築するため、2つの民放番組の内容分析を行った。1つがテレビ東京の『世界なぜそこに？日本人～知られざる波乱万丈伝～』、もう1つがテレビ朝日の『世界の村で発見！こんなところに日本人』である。この2つの番組を調査対象に選んだのは、開発途上国を頻繁に扱っていること、また、高い視聴率が期待できる時間帯の放送であり民放の多くがバラエティ番組を放送する時間帯（鹿島2011-12）であることが理由である。2つの番組は芸人やディレクター

が海外で活躍する日本人を訪問し、その日本人の過去や現在の生活についてのVTRをスタジオにいる芸能人と観てコメントをする流れになっている。内容分析の方法は萩原滋『『ここがヘンだよ日本人』のメッセージ分析』を参考にした。番組改定が行われない2014年11月から2015年の2月までの番組を対象にし、扱われた国や日本人に起こった大きな出来事、VTRとスタジオで繰り広げられる会話やスタジオの反応を細かく番組構成表にして分析した。その結果、問いに対して次のような仮説を導いた。

(1) 視聴率が見込めるバラエティ番組で扱うことによって、開発途上国の負のイメージを払しょくしようとしているのではないか

(2) 困難の中で頑張っている日本人を放送することで、日本人を元気づけようとしているのではないか

これらの仮説を検証するため、2つの番組の担当プロデューサーにインタビューを申し込み、テレビ東京の『世界ナゼそこに?日本人~知られざる波乱万丈伝~』を担当する三沢プロデューサーへインタビューを行った。

インタビューの中で三沢氏は開発途上国の現状を自分たちの見てきた実際のものをテレビで伝え、人やモノ、文化や風習を「悪者にしない」という気持ちがあると語った。見方を換えれば開発途上国の先入観に囚われず肯定的な姿勢で制作に臨んでいると言える。また三沢氏らは取り扱う国から先に探すのではなく、初めに「頑張っている日本人」を自分たちの手で一生懸命探していることを語った。その「頑張っている日本人」の視聴者を惹きつける魅力的な生活や体験を紹介することで、日本に住む人たちを元気づけようとしている意図がインタビューに明確に表れていた。これらから仮説(1)は部分的に支持され、仮説(2)は支持されたとと言える。

日本に閉塞感が漂う今日、開発途上国の過酷な環境の中で頑張る日本人をポジティブに紹介することで、日本社会を元気づけようという番組の意図は理解できる。しかし現実には貧困や紛争、難民といった困難が今もなお厳しい現実として開発途上国を取り巻いていることも事実である。こうした現状に目を背けたまま、日本人を元気づけるためだけに開発途上国が取り上げられていることには複雑な心境である。本研究を通して、日本のメディアの中で開発途上国がどのような存在として取り上げられているかを検証することの意義を示すことができた。バラエティ番組に組み入れられた開発途上国が抱える問題それ自体とどのように向き合うべきかを考えなおす必要がある。

参考文献

- 萩原滋・国広陽子編著『テレビと外国イメージ メディアとステレオタイプ研究』勁草書房、2004年、3-42頁。
萩原八郎「地方新聞紙上にみられるラテンアメリカ報道の分析」『四国大学経営情報研究所年報』第2号、1996年、31-40頁。

鹿島我「テレビ番組におけるバラエティ番組の位置づけ」『京都光華女子大学短期大学部研究紀要』第49号、2011-12年、69-80頁。

卓南生「『南方報道』と『東南アジア報道』の連続と不連続—問われる日本のジャーナリズムの姿勢—」『マス・コミュニケーション研究』No.47、1995年、60-79頁。

田中滋「2003 龍谷大学 国際社会文化研究所シンポジウム 日本のアジア報道・アジアの日本報道」『国際社会文化研究所紀要』第6号、2004年、389-405頁。

発表者氏名: 江部 綾

所属ゼミ: 佐々木一恵ゼミ

発表教室: S301

タイトル: イギリスのブラッドフォードにおける市民による多文化主義への取り組み~コミュニティ農園の事例から~

発表概要:

グローバル化の進展に伴い、エスニック・マイノリティが増加しているイギリス。第二次世界大戦後、イギリスは政府・自治体による社会統合という観点から、多文化主義政策を進めてきた。社会的結束と文化的多様性の両立を目標に掲げ、移民法や人種関係法の改訂などを通じて多文化主義社会の実現へと取り組みを進めた。

しかし、市民間に共通の市民性と価値観を醸成することは困難を極めた。相互理解なき多様性の増大は社会に分裂をもたらすことになった。1958年のノッティンガムの人種暴動を初めとし、戦後イギリスの都市で発生した主な人種暴動の数は8回にのぼり、これらは多文化主義政策の歪みの現れであるとされた。そして、2011年にキャメロン首相が「イギリスの政府主導の多文化主義は失敗した」と演説したことは記憶に新しい。このような背景から、イギリスの政府・自治体による上からの多文化主義政策に代わる、市民による下からの多文化主義へのアプローチの可能性が昨今模索されるようになっている。

そこで本論文では、市民による多文化主義の取り組みを、ブラッドフォードというエスニック・マイノリティの人口割合が20%を超える北イングランドの地域に焦点をあて検討する。ブラッドフォードは、産業革命期に毛織物工業により繁栄し、戦後は労働力不足を解消するためアジア系移民労働者が大量に移住した。結果、同市の人口のほぼ10人に1人がパキスタン系移民となっている。そのためブラッドフォードにおいても自治体による多文化主義政策が行われてきた。しかし、2001年には大規模な人種暴動が起こるなど人種問題が解決されないまま、エスニック・マイノリティの主流社会からの隔離に拍車を

かける結果となった。

本論文では、市民による多文化主義の取り組みの事例として、Horton Community Farm というコミュニティ農園を取り上げる。この農園は、パキスタン系移民が多く住むブラッドフォードのシティセンター近くにある。この Horton Community Farm では主に、①地域の持続可能な食糧システムへのアプローチ②エスニック・マイノリティにとどまらず移民・難民・障害者という広い意味での社会の周縁の人を地域社会に取り込むという活動を行っている。今回の発表では、このコミュニティ農園の「場」と「人」に焦点を当て、①社会統合のための「場」としてのコミュニティ農園の役割・機能②農園での「人」のつながり・関係性を検証し、このコミュニティ農園における下からの多文化主義へアプローチの可能性や課題を検討したい。

検証方法としては、現地で 2 カ月間行ったフィールドワーク、具体的にはコミュニティ農園のボランティア活動に参加する中で行ったインタビュー結果をもとに、コミュニティ農園という場の役割、そしてホストとゲスト達の関係性を見ていく。

イギリスの政府・自治体による上からの多文化主義政策の変遷を踏まえ、ブラッドフォードのコミュニティ農園がいかなる場と人間関係を創り出しているのかを検証することで、そこから見える市民による下からの社会統合としての多文化主義へのアプローチの可能性・課題を論ずる。

キーワード【イギリス・多文化主義・社会統合・コミュニティ農園・マイノリティ】

【参考文献】

安達智史『リベラル・ナショナリズムと多文化主義 イギリスの社会統合とムスリム』勁草書房、2013 年。

安達智史「ポスト多文化主義における社会統合について—戦後イギリスにおける政策の変遷との関わりのなかで—」『社会学評論』60 巻 3 号、2009 年。

Mark Rebusk 「再考されつつあるイデオロギー：イギリスにおける多文化主義」『名古屋市立大学人文科学部研究紀要』20 巻、2006 年

巻口勇次『現代イギリスの人種問題』信山社、2007 年。

松井清『教育とマイノリティ 文化葛藤のなかのイギリスの学校』弘文社、1994 年。

“David Cameron sparks fury from critics who say attack on multiculturalism has boosted English Defence League” The Guardian , 5th February, 2011,

<http://www.theguardian.com/politics/2011/feb/05/david-c>

発表者氏名：鈴木 友理香

所属ゼミ：今泉ゼミ

発表教室：S402

タイトル：ハンガリーにおけるロマ差別撤廃への取り組み—EU 加盟との関係から—

発表概要：

本報告では、東ヨーロッパに多く居住する少数民族ロマに焦点を当て、EU 加盟を契機としたハンガリー政府のロマ差別撤廃への取り組みについて考察する。少数民族ロマは 14 世紀の奴隷制、20 世紀のナチスドイツによって行われた大量虐殺という大きな歴史的問題を抱えているにも関わらず、ロマに対する認識が低く、未だ差別の対象となっている。また、本論文で対象とするハンガリーは、1989 年社会主義体制崩壊後、「市場経済」や「民主主義」といった新しいシステムを求めた組織や制度の再編成が進んだ。

1993 年、EU のヨーロッパ理事会では新たな加盟申請国に対して、少数民族への保護を保障する制度の義務付けを含む「コペンハーゲン基準」が決定された。4 年後の 1997 年、EU のヨーロッパ委員会による加盟申請国の加盟準備進捗状況報告書でハンガリーは、コペンハーゲン基準をほぼ満たしているが、ロマを中心とするマイノリティ問題があると指摘された。1990 年の国勢調査によると、ハンガリー国内総人口は 1037 万 4823 人、ロマの人口は 14 万 2683 人であり、総人口に対して 1.37% の割合である。また同年のハンガリーの平均失業率は 2.6% だったのに対し、ロマは 19.1% と著しく高かった。このような状況を改善することを EU はハンガリーに対して求めたのであった。

ではなぜ EU がハンガリーにロマの地位を改善することを求めたのか。それは EU が掲げる目標が大きく関係している。1992 年マーストリヒト条約によって発足した EU は、自由と安全、さまざまな権利の確保、経済的、社会的な発展の促進を目標としている。その中でもマーストリヒト条約において「財、人、サービス、資本の自由移動は「連合市民」の直接享受する権利」として定められている。そのため、EU 加盟と同時に中・東欧諸国の市民も自由に EU 諸国に居住し、労働する権利を得ることが出来る。そこでロマが多く居住する東欧諸国が EU に加盟することによって、西側諸国はロマ労働力の流入が自国の労働市場や社会保障制度に大きな影響を与ると考えたのである。つま

り、東欧諸国が EU 加盟を望んだことにより、東欧諸国だけではなく西側諸国もロマ問題への対応に迫られたのである。ハンガリーを初めとする東欧諸国の経済には、EU による財政的援助はきわめて重要である。EU への加盟準備を促進するために、ハンガリーとポーランドを対象に行われた「PHARE プログラム」が 1989 年に設定された。ロマに対するプロジェクトについてハンガリーには 2 回補助金が出された。1994 年には法制度でロマの法的補助のために 5000 ユーロ、2001 年には住居の状態を改善するための社会的統合を促進するために 500 万ユーロである。しかしこの補助金をもとにプロジェクトが行われたものの、第 3 回の EU 加盟申請国の加盟準備進捗状況報告書において、以前と改善されていないという評価を受けた。2001 年の国勢調査によると、住居や地域の特徴に関して、ロマは依然と経済的に不利である小規模な集落に住んでいる割合が高く、スラム街や設備の整っていないアパートに住んでいるロマが多くいるとされた。

EU 加盟申請を機に、ハンガリー政府はロマの地位改善政策を進めるも、実際にはロマの人々の生活まで改善されているわけではない。しかし、EU 加盟を機に、ハンガリー政府が法制度や行政を中心とした改革を従来以上に積極的に進め、なおかつロマに関する新たな取り組みを見せている。その動きは EU 加盟前後だけでなく、EU 加盟を果たした 2004 年以降も「ロマ包摂の 10 年」という活動を周辺諸国と共に取り組んでおり、EU 加盟がハンガリーに与えた影響は大きい。

参考資料

加賀美雅弘「ロマをみる視角—東ヨーロッパという土壌」加賀美雅弘編『「ジプシー」と呼ばれた人々—東ヨーロッパ・ロマ民族の過去と現在』学文社、2005。

ミロ斯拉フ＝ポルツァー「EU の東方への拡大とロマ民族」加賀美雅弘編『「ジプシー」と呼ばれた人々—東ヨーロッパ・ロマ民族の過去と現在』学文社、2005 年。

発表者氏名：神長倉理恵

所属ゼミ：今泉ゼミ

発表教室：S402

タイトル：南北分断による離散家族の存在とそれに伴う家族観の変化

—離散家族は南北統一の鍵となるのか—

発表概要：

本報告では、1950 年朝鮮戦争（韓国戦争）によって南北に分断されたことで発生した離散家族の存在に焦点を当て、分断がもたらした家族構成の変化やそれによる離散家族当事者たちの困難がどのようなものであったか考察する。また、今なお分断状態にある朝鮮半島の統一の難しさの原因を南北分断による韓国社会の変化と離散家族当事者たちの経験から読み取り、南北統一に対する離散家族の想いから統一の可能性について考察する。

朝鮮戦争は、日本の敗戦後、北緯 38 度線によって南北に分断された朝鮮半島で、1950 年 6 月 25 日に北朝鮮軍が 38 度線を突破して南下し、53 年 7 月 27 日の休戦協定調印まで続いた戦争である。もともと朝鮮戦争はあくまで休戦状態であって、どちらかが休戦協定を破棄すれば戦争ができる状態にあるという緊張感を忘れてはならない。以来戦闘は 38 度線沿いに続けられ、休戦協定によって 38 度線と斜めに交わる軍事境界線（休戦ライン）が設定された。これが今日の南北の事実上の国境線となり、南北の分断を固定化した。この分断は戦争の結果であると同時に、それに伴って始まった全ての悲劇の根源である。本報告で扱う離散家族もその一つである。南北分断による離散家族には様々なケースがあり、分断に至るまでの行動や職業から引き裂かれた家族もいれば、分断後イデオロギー的な葛藤から自ら南下した家族など様々である。しかし、そのどの家族にも共通して言えることは、離散後にも再び一緒に暮らすことを切望していたということだ。

以上のような背景と特徴をもつ南北離散家族に関して、本学会では以下の内容に焦点を当てて報告する。

離散家族再会事業が定期的に行われるきっかけとなった 2000 年の六・一五南北共同宣言以降、めまぐるしく変動する南北関係において離散家族再会の実施と中断が繰り返され、離散家族当事者たちの葛藤は相当なものであったことがうかがえる。離散家族再会事業は南北の友好に欠かせないと言われているが、一方で南北間の政策的な目的に利用されているとも言える。その意味で、南北離散家族再会が家族らによる単なる欲求ではなく、権利として存在するということを今一度再確認しなくてはならないと考える。

また、変動する南北関係のなかで離散家族当事者たちは南北統一に対してどのような考えを持っているのか考察する。離散家族再会事業の現場においては常に南北両側からの厳しい監視と規制が行われており、離散家族にとって理想的な環境が整っているとは言いがたい。そもそも離散家族再会事業において再会できる人数は限られたもので、家族に会えないまま生涯を終

える人が大半である。そのため、離散家族再会事業には膨大な数の申請がなされ、その選抜に選ばれなかった家族らの絶望は計り知れない。このような絶望により自殺してしまう離散家族もいることから、離散家族再会事業の問題点が浮かび上がる。また、家族と再会したものの高齢となった離散家族当事者にとって次いつ会えるのかも分からないために精神的に追いつめられてしまう「再会症候群」という症状など、離散家族らの再会後の心のケアも問題視されている。そのような数々の問題点の改善策を考えた時、たどり着く答えは南北統一であり、離散家族の多くが切望している。

以上のような内容を分析するうえで、報告者は新聞記事を参考にす。金貴玉は離散家族をテーマとした研究は社会的民主化と南北関係とに密接な関係があると指摘し、多くの文献資料が時代を反映するゆえに、反共の時代には反共の論理が支配的であり、その記録は反共のもとに歪められたか隠蔽された内容だという。なお金は離散家族研究の概要を扱う上で新聞記事を対象から外しているが、報告者はあくまで離散家族研究の概要及び変遷に焦点を当てたいのではなく、離散家族当事者たちの個人的な体験に即した研究を行いたいと考えたため新聞記事を対象とする。

発表者氏名：宋 漢娜

共同発表者：羽角綾乃 村上奈緒 村山晴香 森中颯太

所属ゼミ：松本ゼミ

発表教室：S301

タイトル：移転住民の生活再建とソーシャルキャピタル—ベトナム北部の少数民族とハノイの事例から—

発表概要：

本稿の目的は、ベトナムにおける開発が引き起こす住民移転の事例を通して、ソーシャルキャピタル（SC）のあり方を再考することである。SCについては様々な定義があるが、本稿では「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」という Putnam（1993）の定義を用いる。

ベトナムには、ノイバイ国際空港とハノイ市内を結ぶ「ニャッタン橋」という巨大な橋がある。この橋は JICA の円借款事業の一貫として建設され、416 世帯の住民移転を生じさせた。ベトナム政府は、移転の際、コミュニティの分散を防ぐため、すべての移転世帯を政府が用意した 2 棟の高層マンションに移転させた。住民のネットワークや信頼など SC に配慮した移転だったと言える。しかし、JICA の話によると移転住民の大半が

高層マンションを他人に貸して親戚の家や他の場所に移ったため、結果的にコミュニティは分散してしまい、人々のつながりは薄れてしまった。

SC を配慮したにもかかわらず、なぜ人々は分散してしまったのか。この問いに取り組むにあたり、人々のつながりが維持される要因を探求するため、筆者らは住民移転後も人々のつながりが維持されているランタン村に着目した。ランタン村はベトナム北部の少数民族村で、元々無人の森であったが、ベトナム戦争最中の 1960 年代にダム建設による住民移転によって誕生した。当時は移転政策や補償制度が確立されておらず、外部の援助に頼ることもできなかったため、村人は移転住民の力だけで移転後の生活を再建した。筆者らは今年の 8 月同村を訪問し、英語と現地語の通訳を介して、移転後村人がどのように生活を再建したのかについて聞き取り調査を実施した。

調査の結果、「人々のつながり」から生まれる助け合いによって長い年月をかけて元の生活レベルを取り戻したことが分かった。村人は皆で森を開拓し家を建て、不十分さを補いながら新たな生活手段を作り上げたのである。この「人々のつながり」は移転後 50 年が経った今でも維持されており、村に困難がある時や困った人がいるとさらに発揮される。このような助け合いから農業等の生産高増加のような「経済的利益」が生まれるのは確かであり、これは SC という概念で捉えられてきた。しかし、最初に移転した 8 世帯はその後新しく入植した他村からの村人を快く受け入れ、無条件に彼らの生活再建を助けたという聞き取り調査によると、この経済的利益は彼らが目的としたものではなく、付随するものであった。彼らの助け合いは、社会に有益な効果をもたらすこととは関係のないものであると考えられる。

これがハノイの事例との違いではないだろうか。ハノイの事例では、開発援助側が経済的利益や補償を目的に、人々のつながりを生活再建の道具としてのみ考慮し、生活さえ再建できれば、結果として SC が失われることは特に問題としていない。これがコミュニティの分散を招いたと筆者らは考える。移転後の生活が賃貸しによる収入増で改善したとしても、本来持つ人々のつながりが失われてしまったため、その後再び困難に直面した時に発揮されるはずの、かつての人々の助け合いはなくなっている。

SC を開発の議論に取り込むことが正しい方向性であったとしても、人々の助け合いを単に「キャピタル」として見るだけでなく、人々が本来持っている自然の力として評価し直すべきであり、これはまた長期的な「キャピタル」の維持にもつな

がる。近年整備されてきた移転・補償政策にこの概念が配慮項目に導入されたとしても、成果だけが優先されて人々のつながりが薄まってしまふことは、長い目で見ると必ずしも得策とは言えない。本稿が示唆しているのは、手段としてのSCの危うさであり、人々のありのままのつながりの重要性を改めて考えるきっかけになったと言える。

参考文献

Putnam, Robert. *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*. Princeton, New Jersey; Princeton University Press, 1993.

発表者氏名：金賢廷

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

発表教室：S301

タイトル：日韓のドラマコンテンツからみる比較文化論的考察

発表概要：

キーワード：コンテンツ産業、ドラマのガラパゴス化、コンテンツ政策、コンテンツ産業における比較優位

文化は長い歴史の中、多様なあり方で存在してきた。グローバル化が進む現代における文化で、昨今注目されているものに、産業と結合した「文化産業」としての「コンテンツ産業」がある。グローバル化によるコンテンツの移動は「韓流」、「クールジャパン」などの新しい動きを生み出した。日本で、グローバル化におけるコンテンツ産業への関心が高まったのは『冬のソナタ』が放送された2004年である。日本での『冬のソナタ』大成功は、「韓流」という言葉を生み出し、本格的な韓流始まりのきっかけとなった。そして同年の日本では、知的財産基本法2条の「コンテンツの創造、保護及び活用の促進に関する法律」において初めてコンテンツに関する明確な範囲が記載される。なお、日本と韓国における放送コンテンツの海外輸出額を見ても、『冬のソナタ』と韓流のブームがあった2004年を機に日本が韓国に逆転されていることは興味深い。

そこで本発表では、日韓の放送コンテンツの輸出シェアが逆転された現象に着目し、その背景を分析したうえで、コンテンツ産業の持つ比較優位性について考察していく。日韓における放送コンテンツの輸出シェアが変化した背景としては、①日本におけるドラマのガラパゴス化、そして②韓国におけるコンテンツ政策の積極的な取り組みについて論じていく。まずは日本の放送コンテンツの輸出シェアが低下した経緯として「日本ドラマのガラパゴス化」について論じる。1990年代の日本ドラマ

は、いわばトレンドードラマ・ブームの時代として「月9」という新語を生み出すなど、全盛期であった。日本ドラマが持つ独特なストーリーや演出、そして分岐別の放送システムは独特な「日本ドラマ」として、海外においても新鮮であった。しかし、放送コンテンツのグローバル化が進むと、日本のドラマはガラパゴス化し始める。日本の携帯電話ケースと同様に、独自の発展を遂げてきた日本のドラマ市場が、画一化傾向が進むグローバルスタンダードに適應できず孤立したことが海外シェア低下の背景として挙げられる。一方、韓国では1998年から政府主導の本格的なコンテンツ政策が行われる。1997年の韓国通貨危機をきっかけに、韓国政府は経済復興の政策としてコンテンツ産業に注力する。1998年からは徐々に日本大衆文化開放政策が行われ、日韓共同制作ドラマやリメイクドラマが制作されるなど、現代の韓流コンテンツ産業の土台となった。韓国におけるテレビ番組輸出入を比較してみると、輸入額は6億ドル(1997年)から翌年に2億ドル代に減少した以来、2～3億ドル代に留まっている。反面、輸出額は2001年までは2億ドル以下であったが、2003年には4億ドル、2005年には12億ドルと大幅に急増し、現在は20億ドル代にまで増え続けている。韓国の2016年度政府予算386.7兆ウォンの中で「文化」分野への予算は6.6兆ウォンで、「外交・(南北)統一」分野(4.7兆ウォン)よりも多い。一方、近年の日本では韓国のコンテンツ政策をモデルとした分析が多く見られる。平成25年、総務省で行われた『ICT産業のグローバル戦略等に関する調査研究』では、韓国のコンテンツ輸出額及び経済効果を分析したうえで、日本をケースにした分析が行われた。

本発表においては、日韓における放送コンテンツ輸出シェアの逆転現象について、日本と韓国それぞれの観点からみた二つの背景を結びつけて論じていく。なお、特定の商品をより効率的に生産できる時、比較優位にあるとする比較優位論を取り入れ、コンテンツ産業における新たな比較優位について考察していく。

【参考資料】

“第5章第8.1節(5)放送コンテンツの海外展開に関する日韓比較”. 情報通信白書, 平成26年版: ICTがもたらす世界規模でのパラダイムシフト. 総務省, 2014 <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/pdf/n5800000.pdf>, (参照2015-11-01)

李美智(2010)「韓国政府による対東南アジア「韓流」振興政策：タイ・ベトナムへのテレビ・ドラマ輸出を中心に」, 『東アジア研究』48(3)p. 268

韓国企画財政部. “韓国企画財政部ホームページ”. 韓国企画財政部. (参照2015-11-13)

“第2部第2章 放送グローバル展開による経済効果分析”, 平成25年度: ICT産業のグローバル戦略等に関する調査研究. 株式会社三菱総合研究所編, 総務省情報通信国際戦略局情報通信経済室, 2013

発表者氏名: 柏倉 妃香里

所属ゼミ: 佐々木一恵ゼミ

発表教室: S404

タイトル: 食品偽装事件からみる「食の安全」への意識と構造の変化

発表概要:

近年、新聞やテレビ等のマスメディアにおいて食品偽装の話題を目にすることが多い。それらは、産地表示の偽装から大手食品メーカー、飲食店での異物混入と多岐にわたる。誰にとっても食の問題は他人事ではなく無視できない事柄であるため世間の関心が高いことがうかがえる。「安全・安心」な食品を提供すべき企業が消費者を惑わせるようなことはあってはならないし、もしも起きてしまったのならそれにしかるべき対応を企業、国が対応することが当然求められる。

しかしながら、食品に関する報道が多いとはいえ近年の食品偽装事件では命を失うほどの身体面における重大な問題はほとんどないといえる。つまり食品に関する法律が以前に比べて整っていることや、技術の進歩により命を脅かす事件は実際に減少している。一方戦後の日本では「食品二大公害」と呼ばれる「森永ヒ素ミルク中毒事件」（1955年）、「カネミライスオイル中毒事件」（1968年）が起こっている。いずれも多数の死者を出し、また深刻な後遺症をもたらしたが、事件解決には至っていない。それにもかかわらず、当時の加害企業、国や医師までもが問題に向き合うことを避けたゆえに救済されるべき被害者に差し伸べられる手はわずかであった。そして当時の報道は連日被害者の症状や研究による原因物質の特定結果を報道したが、一時期が過ぎるとほとんど報道されなくなった。対して現代の食品偽装事件は消費者側から国や企業に対する問題提起し対策や解決を促すような視点で報道されている。このことから、食品偽装問題に対する捉え方は時代と共に変化し、同時に報道のされ方の構造が変化しているのではないかと考える。

そこで本論文では時代が異なる2つの食品偽装事件を研究対象として比較を行い、それぞれの時代背景を加味したうえで問題がどのような視点で注目される構造になっていくのかを明らかにすることを目的とする。対象とする実際に起きた事件は、まず高度経済成長がもたらした負の側面として1968年10月に西日本一帯で起きた「カネミライスオイル中毒事件」を取り上げる。健康美容に良いとされた米ぬか油に製造段階でPCB（ポリ塩化ビフェニール）が誤って混入され、これを食した人は主に重い皮膚疾患や生殖機能に異常をきたした。また現在においても、強い中毒性により後遺症に苦しむ被害者がいる。「病気のデパート」と皮肉な表現がされるほど様々な症状をもたらした。食品公害による油症の最も重大な事例として「カネミ油症」と呼ばれ、世界で研究されている。つぎに、現代における「食の安全」を揺るがした2007年6月北海道苫小牧市にあった精肉会社のミートホープ社の産地偽装や偽装工作が明らかになった「ミートホープ事件」を取り上げる。外国産の肉を国産表示に変更していたことから、期限切れや破棄予定の肉を混ぜることでかさ増しをする等の実態が明るみになり、またこうした肉が学校給食や冷凍食品として広範囲にわたり使用されていたことから日本中を混乱させた。これら2つの事件の間には、グローバル化に伴い、海外からの食品が輸入されるようになったことで食に関する問題が複雑化したという背景が存在する。特に対中国との問題は2000年に入ってから顕著であり影響が強いと考えられる。

それぞれの事件概要の比較に加え、高度経済成長やグローバル化といったように、取り巻く時代の変化を背景に、「食の安全」をめぐる語りが、どのような構造的な特徴をもち、またそれがいかに変化しているのかを論じる。

【参考文献】

明石昇二郎『黒い赤ちゃん カネミ油症 34年の空白』2002年、講談社。

赤羽喜六『告発は終わらない - ミートホープ事件の真相』2010年、長崎出版。

カネミ油症被害者支援センター『カネミ油症 過去・現在・未来』2006年、緑風出版。

川名英之『検証・カネミ油症事件』2005年、緑風出版。

キーワード【食品偽装、高度経済成長、食のグローバル化、食の安全、国民意識】

発表者氏名: 千葉かなな

所属ゼミ: 佐々木一恵ゼミ

発表教室：S404

タイトル：グローバリゼーションと先住民族

～ユカタン・マヤ先住民族のフェアトレードの事例から～

発表概要：

メキシコは、NAFTA や OECD に加盟したことにより経済的なグローバル化が急速に進展した。これまでメキシコには、エヒードという政府による土地配分の制度が存在し、農民たちは補助金や輸入農作物への関税賦課、輸入禁止などによって保護されていた（国中：2011）。しかし、経済的なグローバル化により、メキシコ国内の先住民農民たちの中には、農地を失う者も多く出るようになった。男性たちの中には太平洋岸の農園への移住、出稼ぎ、あるいは日雇い労働の職を探すことを余儀なくされた人が多く出た（桜井：2010）。また、NAFTA の猶予期間を過ぎてアメリカの農産物に対する関税が引き下がるにつれ、国内の農産物は競争力を失っていった（国本：2011）。こうしたなか、先住民族の生活はさらに困窮を極めていった。

マヤ先住民族に関する先行研究においては、グアテマラのマヤ先住民族の内戦時の迫害や虐殺の問題、貧困・差別の問題、またメキシコのチアパス州のマヤ先住民族の貧困や差別の問題、サパティスタ解放戦線を扱ったものが多くみられる。また、歴史を扱いながら、メキシコのグローバリゼーションを取り上げている文献などもある。しかしその一方で、現代におけるマヤの先住民族と経済のグローバル化との間に生じている新たな関係性に対して、多くの注目が向けられているとは言えない。そこで本発表では、ユカタン・マヤ先住民族の生活基盤にグローバリゼーションが与えた影響を、「フェアトレード」という要素により再検討していく。フェアトレードとは、＜開発＞＜ビジネス＞と、＜援助＞＜貿易＞の融合形態とされる。これまでの援助が、「持続可能性」に繋がりにくいとの観点から、一方向的な援助ではなく双方向的な貿易に結びつく関係がより望ましいとの認識から生まれたシステムである（佐藤：2011）。これまでの「フェアトレード」に関する研究は、コーヒーやチョコレートなどの嗜好品を事例に取り上げたものや、児童労働問題に結びつけたものなどはあるが、メキシコにおける経済のグローバル化と結び付けているものはない。本発表では、メキシコのユカタン・マヤ先住民族の生活基盤の中心である「農業」と、彼らのアイデンティティー表象を支える伝統衣装などの「手工芸品」という2点の「フェアトレード」に着目し分析する。

具体的な調査としては、2015年1月～6月にかけてメリダとその周辺の村の U Yits Ka' an（マヤ農民学校）において、ポ

ランティアとしてこの学校の行っている農産物のフェアトレードの活動に参加し、参与観察を行った。また2015年5月に、バジャドリッドとその周辺の村を中心に活動している団体 La Cooperativa de Mujeres Bordadoras de Dzitnup（Dzitnup 女性刺繍職人協同組合）の代表者を訪ね、インタビューを行った。さらに、参加している女性たちの家もいくつか訪問し、インタビューを行った。

これらのフィールド調査にもとづき、ユカタン・マヤ先住民族の人々がフェアトレードを通じてどのような活動を展開しているのか、進展するグローバル化に対してどのような対応を行っているのか、また、その問題点や課題、グローバリゼーションとの新たな関係性を検討する。

【参考文献】

国本伊代[2011]『現代メキシコを知るための60章』明石書店 p90-93

佐藤寛[2011]『フェアトレード学を学ぶ人のために』 p5-8, 10,

桜井三枝子[2010]『グローバル化時代を生きるマヤの人々——宗教・文化・社会——明石書店 p15, 265-266

初谷謙次[2009]『アメリカス世界を生きるマヤ人——向こう岸からのメキシコ史——』 p2

キーワード：グローバリゼーション、フェアトレード、ユカタン・マヤ先住民族、農業、伝統手工芸品、

発表者氏名：藤本理沙

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

発表教室：S404

タイトル：公民館からみるまちづくりとソシアビリテ——長野県飯田市の事例から——

発表概要：

近年、地域の自然や特産物・伝統文化を活用しまちづくりに繋げようとする運動が全国的に広がっている。戦後、日本のまちづくりは国の体系化された諸政策の下、「国土の均衡ある発展」を目指し行政主導で動き始めた。しかし、企業誘致や諸施設の整備といった中央を真似た都市化を目指す住民不在の画一的な政策が多かった為、地域の独自の文化・伝統は衰退していった。高度経済成長の終焉とバブル崩壊をきっかけに官主導の政策も行き詰まりをみせ、地域の地盤産業も衰退するといった負のスパイラルに陥ってしまった。

この状況を打破する為に、地域住民の間では今まで行って来

た地域振興を反省し、自分達独自の政策を実施しようと、中央のトップダウン政策とは異なる形で各地方公共団体による改革が始められた。政府も平成15年10月に地域再生本部を設置し、平成16年2月には行政サービスの民間開放、権限委譲といった地域再生に力を入れ始め、「国から地方へ」という構造改革がなされた。地方では均質化され一度は多様性が失われた自分達の地域をもう一度見直す取り組みが始まり、そして今度は地方自治体・住民の目線を取り入れた改革を目指し、住民が自主的に動くまちづくりへと現在は発展してきている。

本発表では、とりわけ独自のまちづくりを行ってきた長野県飯田市に着目し、まちづくりに深く関わる「公民館」を中心に、ソシアビリテの視点から検証する。ソシアビリテという概念を歴史学の分野で、分析概念として用い始めたのはモーリス・アギュロンであった。(二宮 1995年:7) この概念に様々な見方が存在するが、本発表ではソシアビリテを「社会においてのひととの繋がり」と定義づける。長野県飯田市は、信州で最も南にある市でもあり、人口は同県内にある長野市・松本市・上田市に次いで4位である。この地域では古くから市民主体のまちづくりに取り組んでおり、中でも「公民館」が果たす役割は大きい。公民館は、1946年に文部次官通達という形で生まれた。公民館を設置された理由は以下の3点である。(片野 2015年:53-4)

- ① 民主主義を我がものとし、平和主義を身につけた習性とする迄にわれわれ自身を訓練する
- ② 豊かな教養を身につけ、文化の香高い人格を作るように努力する
- ③ 身につけた教養と民主主義的な方法によって、郷土に産業を興し、郷土の政治を立て直し、郷土の生活を豊かにする

アメリカ占領下であった影響も受けつつ、公民館を中心に地域一体となって敗戦から立ち上がっていく道標を示していた。多くの公民館がその役割を失っていく中で、飯田市の「公民館」は、現在も社会教育機関として地域住民と寄り添いながらまちづくりに関わっている。その例として、本発表では毎年8月の4日間で行われている「いいだ人形劇フェスタ」を取り上げ、そこでの「公民館」の役割を明らかにしていくと共に、「公民館」と地域住民が作り出す独自の地域活性化について論じていく。

【参考文献】

二宮宏之 1995 『結びあうかたち ソシアビリテ論の射程』山川出版社

片野親義 2015 『公民館職員の仕事—地域の未来づくりと公民館の役割—』

発表者氏名：矢田 真俊

所属ゼミ：松本ゼミ

発表教室：S404

タイトル：「脱ホームレス」への要因を探る
～ The Big Issue の事例を通して～

発表概要：

本稿の目的は駅前で販売員をよく見かける雑誌 The Big Issue によるホームレス支援の研究を通して、日本において路上生活からの「脱却」を可能にする要因を考察することである。

ホームレスとは、「失業、家庭崩壊、社会からの逃走など様々な要因により、特定の住居を持たずに、道路、公園、河川敷、駅舎等で野宿生活を送っている人々」（ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法）である。日本のホームレス人口は2014年時点で6,541人であり（ホームレスの実態に関する全国調査2014）深刻な社会問題と言える。

The Big Issue とは1991年にホームレスの就労機会を作ることを目的としてイギリスで創刊された雑誌で、その仕組みはホームレスが雑誌の販売者となり、売り上げの50%を収入とするものである。

路上生活からの「脱却」を困難にする要因について先行研究では以下の3点を挙げている。第1に金銭管理の不得手や賃貸契約の問題といったリソースアクセスの課題（稲葉2009）。第2に生活保護制度における「水際作戦」や自立支援事業の「民間就労による自立への偏り」といった社会保障制度の不完全さ（岩田2007；渡辺2010）。第3に自己肯定間の喪失など、ホームレス当事者の精神的な課題（後藤2013）である。こうした課題が指摘されるなか、自立を目指すホームレスの支援をしているのが The Big Issue である。

The Big Issue 日本語版は2003年にスタートし、2013年までの10年間で1,492人が登録し、販売者に8億2812万円の収入を提供、162人が定職に就き、路上生活を脱した。ただ、路上生活を脱した販売者数は全体の11%に過ぎず、そこに至らないケースは前述した3つの要因が関係していると考えられる。本稿では、むしろ「どのようにこれらの課題を克服することができたのか」を問いにその要因を探究する。

先行研究によると、The Big Issue の販売者になることは行政や民間からの情報と支援、へのアクセス改善につながる、販売者が顧客や他の販売者と関わりを持つことで社会参加に

良い影響を与えているなどの効果がある（Harrold 2013）そこで販売による収入だけでなく行政や民間の支援へのアクセスの改善が自立につながる。他者と接することで自尊感情の回復を促し、就職活動、雇用先での生活に対応できるようになる、という2つの仮説を掲げ、その検証のため日本のビッグイシュー基金への聞き取り調査を実施した。

その結果、第1の仮説は支持された。ビッグイシュー基金は、職を探す上での行政の施策や依存症の人向けの自助グループ、賃貸契約時の保証人を請け負うNPOの紹介など、各販売者の状況に応じた情報提供を行い、販売者の抱える困難を軽減する支援をしていた。

第2の仮説は、一部棄却された。販売やビッグイシュー基金が運営するクラブ活動などを通して、当事者の精神的な回復と社会性の向上はみられている。しかし、就職活動など元ホームレスであることを伏せながら社会生活への復帰を進める過程を経て、販売を通して構築された人間関係を絶ってしまう人も多い。そのため定職に就いた後の社会生活における影響は確認できなかった。

今回の調査からホームレスにとって支援団体と関わることが情報を得る機会となり、賃貸契約などリソースアクセスの課題を克服していること、雑誌販売という経済活動の中で構築される人間関係が当事者の自尊心の回復にもつながることが確認された。しかし、当事者が「忘れたい過去」という思いから、ホームレスの期間に形成された人間関係を絶つことも多く、社会復帰後の新たな人間関係形成の不可が、路上生活からの「脱却」における鍵であると考えられる。

参考文献

稲葉剛 2009『ハウジングプア』山吹書店

岩田正美 2007『現代の貧困—ワーキングプア/ホームレス/生活保護—』ちくま新書

渡辺芳 2010『自立の呪縛』新泉社

後藤広史 2013『ホームレス状態からの「脱却」に向けた支援—人間感情・自尊感情・「場」の保障』明石書店

Vincent Harrold (2013), Evaluation the effectiveness of 'The Big Issue' in combatting the social exclusion of homeless people in central London: London School of Economics.

発表者氏名：西原 寛人

所属ゼミ：松本ゼミ

発表教室：S401

タイトル：国際協力と嫌われた技術 —ダム技術と炭鉱技術の事例から—

発表概要：

先進国で厄介者となった技術は開発途上国へ移転されることがある。福島第一原子力発電所事故後に加速した日本の原発輸出政策はその一例である。一般に、その妥当性は技術の受入国側に主眼が置かれ、「技術的ニーズのある国への技術協力」という文句によって説明される。

しかし、ある国で自然環境や社会環境への悪影響が原因で「嫌われた技術」も、市場原理に従って他国へ移転されて良いのか、筆者は疑問を抱いた。移転先にも同様な問題を引き起こしかねない技術の移転を果たして「協力」と呼べるのか疑わしいからである。そこで本研究では、「嫌われた技術はなぜ途上国へ移転されるのか」という問いを探究し、技術の供与側が移転事業に乗り出す際にどのような事情があるのかを明らかにする。

国際技術移転論に関する先行研究では、必要資源関係(N・R)仮説が代表的である。斎藤(1995)は経済学的にN・R関係において技術移転が成立する諸条件を整理し、合意条件(両国が技術移転に合意し、共に利益があること)などを挙げている。また、ある国で需要が無くなった技術やノウハウが海外の新興市場へ移転されることは合理的であるという前提に立っているが、「嫌われた技術」に着目した事例研究は行われていない。従ってそうした技術の移転が始まる経緯やそれが供与側にもたらす利益についての分析が不十分である。

本研究で扱う事例は、オーストラリア・タスマニアのダム技術と日本の炭鉱技術である。前者は、1980年代に環境保護団体から強い反発を受け州内での新設が不可能になった。後者は、過酷な労働条件や事故の危険性が一因で国内において活用の機会が激減した。どちらも「嫌われた技術」を持つ企業が公的資金を活用しながら政府と協働で途上国への技術移転を行った事例である。

研究方法は以下の通りである。ダム技術の事例は、海外移転を進めたタスマニア州立電力会社HECとその子会社HECECの年次報告書25年分(1990~2014年)を分析した。炭鉱技術の事例は、炭鉱技術研修事業を実施してきた釧路コールマイン社の成果報告書(2002~2014年)を分析した上で、研修事業の委託元である独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構へ聞き取り調査を行った。

その結果、以下2点の結論を導いた。第1に、供与側は技術

移転によって明らかに労働者の仕事を確保しようとしている。ダムの場合、国内での案件獲得が見込めないため、HEC は技術者の仕事を東南アジアでの事業展開によって補う戦略を進めた。炭鉱の場合も、国内炭の生産量が減る状況で技術者の活用を模索した結果、技術水準の劣るアジア産炭国（中国、インドネシア、ベトナム）の技術者向け研修事業に乗り出した。どちらも従来の国内事業だけでは経営が厳しくなるため、新たな戦略として移転が始まったと考えられる。

第2に、炭鉱技術に限れば、途上国の技術者向け研修事業を継続している動機として技術の維持と継承が挙げられる。釧路コールマイン社は現在日本で唯一の坑内掘り採炭を行う企業で、独自に開発した採炭技術の蓄積に意義を見出しており、その継承に研修事業が役立っていることが分かった。

技術の供与側は「協力」の側面を強調することで公的資金を費やすことが正当化され、途上国にも技術が受け入れられやすくなる。一方で2つの事例からは、「嫌われた技術」を抱える企業が技術者の仕事の確保や技術の維持という目的で技術移転に乗り出すことが明らかになった。

このことは、「嫌われた技術」の国際的な移転は経済学の理論だけでは捉えられないことを示している。結果的に、HECECによる途上国でのダム建設やアジア諸国の炭鉱開発に対し、現地での住民立ち退きや自然破壊等の問題が指摘されている（太田 1998）。こうした問題を繰り返さないためにも、日本が進める原発輸出も含め、先進国から仕掛けられる「嫌われた技術」の移転は今後も注目され、受入側の事情とは切り離して分析される必要がある。

参考文献

- 斎藤 優 (1995) 「国際開発論 開発・平和・環境」有斐閣
太田 和宏 (1998) 「途上国の環境問題への視点：より実態的な問題把握のために」神戸大学発達科学部研究紀要 (6)

発表者氏名：新村麻里恵

所属ゼミ：島田ゼミ

発表教室：S404

タイトル：ハイデルベルク、ナンタケット、パリから学ぶ魅力的な街づくり

—持続可能性に繋がるのは、活性化ではなく成熟—

発表概要：

昨今日本では「地方を元気に」という掛け声とともに、「地方活性化」が叫ばれているが、筆者はこの現象に違和感を覚える。

何故だろうか。

筆者は生まれてから現在までずっと、都市と田舎の両方の暮らしを間近に見て、体験してきた。神奈川県横浜市で生まれ21年間ずっとそこで暮らしてきたため、一般に「地方」と呼ばれる場所には長期間住んだことはない。しかし、その一方で隣に住む祖父母が趣味として営む畑の仕事にも従事してきており、農家ほど大規模ではないが長期的な畑仕事の経験がある。そのため、畑仕事が決してのんびりした自由な仕事ではなく、準備が結果につながらないこともある不安定な厳しい仕事であることも経験から分かっている。また、祖父母の家は私の住んでいる地域では珍しく昔ながらの日本家屋と日本庭園を残し、守っている。私はその住環境が与えてくれる癒しを心から愛しているが、不便な部分も熟知している。例えば、冬場は室内がとても寒くなることや、様々な虫が入り込んでくること、それに空気が悪く、肌の弱い人はアトピー性皮膚炎を発症してしまったりしやすいことなどである。このように、筆者は都市の暮らしと田舎の暮らし、それぞれのいい面と悪い面、両方を経験してきたため、地方にも都市にも幻想を抱いておらず、両方の生活ぶりを正しく想像していると考えられる。

そのためか、都市部の広告やテレビで目にする「地方を元気に」などという言葉が、都市部に住んでいる人間の上から目線な掛け声に聞こえるし、胡散臭く感じているのである。いくら「活性化しなければ」と言っても、具体的な案がなければ掛け声だけで終わってしまう、机上の空論である。実際にそこに住み、本気でそう考えている人間が言っているのであれば、地方を一方的には気がないと思いついて入っている人間のただの押し付けでしかない。

私は日本があまり好きでないこともあり、高校時代から「自分が住むならどの国のどの地域」がいいか考えてきた。その結果、ある条件を見出した。それは「成熟している」地域である。

大学は未来を作る役割を見なっている若い学生たちに「持続可能性」を求めたが、それは「活性化」とは対極とはいかないまでも、違う方向を示す言葉であるはずだ。なぜなら、活性化とは一時的な「変化」であって、時期を過ぎれば泡のように消えてしまうものだからだ。私が在学中にはカナダのデトロイトがゴーストタウンと化してしまった。デトロイトは車産業で栄えた都市だったが、一つの産業だけに頼っていると中心となるその産業が行き詰った時点で他の服飾店や飲食店も共倒れしてしまう。あるいは観光だけに頼ってしまうと、交通が途絶えた時に立ち行かなくなってしまう。「活性化は」一時的だが「成熟」は不変であり、一度成熟したものは、例外もあるが基本的

にはそう簡単には退化しない。

私は本論で、特に興味を持った三つの都市について調査し考察したことを述べたい。それはフランスのパリ、ドイツのハイデルベルク、そしてアメリカのナンタケット島についてである。パリとハイデルベルクは在学中に実際に行った場所であり、想像以上だったこともあれば想像以下だったこともあった。ナンタケット島は実際に入っていないが、独自に研究を進めた島である。これらの地域の比較によって、「持続可能な」そして「魅力的な」地域の条件とは何かについて発表したい。

発表者氏名：田中 直実

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

発表教室：S501

タイトル：アフリカサッカーから見る近代スポーツのグローバリゼーション

発表概要：

近年欧州のクラブチームで活躍し世界的に有名になったアフリカ出身のサッカー選手が、ワールドカップなどの世界的な大会において存在感を発揮している。ヨーロッパで生まれたサッカーはグローバル化し、今や世界中で行われ、「後進国」とされるアフリカでも有名な選手が輩出されている。アフリカにサッカーというスポーツが入ってきたのは19世紀、すなわちアフリカ大陸のほとんどが植民地化されていった時代である。この時代にイギリスを筆頭にヨーロッパ各国はアフリカという未開の地の人々を教育する道具としてサッカーを持ち込んだのである。こうした時代背景から、スポーツのグローバリゼーションと文化帝国主義を結びつけて考える研究は多い。[e. g., トムリンソン 1993] しかし、グローバル化が進む現代、スポーツのグローバリゼーションが旧宗主国—旧植民地国という二極的な関係においてのみ起きているとは考えにくい。

そこで本発表ではアフリカにおけるサッカーのグローバリゼーションから近代スポーツのグローバリゼーションについて考察していく。まず、アフリカ出身サッカー選手の海外移籍の歴史を振り返り、彼らの主な移籍先である欧州のクラブチームの経営形態に注目することで、サッカーのグローバリゼーションと経済のグローバリゼーションの密接な関係について明らかにする。中でもヨーロッパ5大リーグの1つであり、世界で最も利益を出すと言われるイギリスのパークレイズ・プレミアリーグの経営形態に焦点をあてる。オイルマネーの流入などにより資本が増大した欧州クラブチームは、高い身体能力を持つ

と言われるアフリカの黒人選手の獲得に向け、選手獲得網をアフリカに広げていく。こうしてアフリカは「労働力貯水池」となり、欧州のクラブチームによる獲得合戦とアフリカ出身サッカー選手の経済面や文化面における自己の向上という欲求から「スポーツ労働移民」を生んでいく。[石原 2011]

本発表においては、「スポーツ労働移民」として成功を収め、母国の内戦を止めたサッカー選手としても世界的に有名なディディエ・ドログバの自伝を基に言説分析を行い、さらに、「スポーツ労働移民」ともいえるフィリップ・トルシエの言説についても分析を行う。経済のグローバリゼーションの影響を受けながら近代スポーツのグローバリゼーションは起きており、アフリカが「労働力貯水池」として新たに搾取されている構造や問題を指摘しつつ、この2人の言説から「スポーツ労働移民」である彼らが搾取的な構造を利用し、アフリカ人の地位の向上を目指しているという双方向的な側面を明らかにすることを目的とする。

【参考文献】

イアン・ホーキー著 (伊藤真訳) 『アフリカサッカー 歓喜と苦悩の50年』実業之日本社、2010年。

アレン・グッドマン (訳) 『スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義』昭和堂、1997年。

ジョン・トムリンソン著 (片岡信訳) 『文化帝国主義』青土社、1993年。

石原豊一 「グローバルスポーツに包摂されるアフリカスポーツを通じた開発援助とスポーツ労働移民」『アフリカ研究』79巻、2011年: 1-11.

キーワード

スポーツ、グローバリゼーション、アフリカ、スポーツ労働移民

発表者氏名：海野里奈

所属ゼミ：今泉ゼミ

発表教室：S501

タイトル：日本の学校教育における「南京事件」—平和のための教育教材として—

発表概要：

本報告では、日中間の外交問題や日本人自身の歴史認識問題としてたびたび取り上げられてきた南京大虐殺事件(以下南京事件)を対象に、学校教育での扱われ方の現状と背景を分析し、歴史教育や平和教育で日本の戦争に関する加害を教材にする意味を考察する。そして、中国語、英語の教員免許を取得する自分自身が、南京事件を、平和のための教育教材としてどのように扱っていくべきか考える。

学部の SA プログラムで上海に留学した際に、南京に足を運び、侵华日军南京大屠殺遇难同胞纪念馆(中国の南京市にある南京事件の資料館)を訪れた際に、大きな衝撃を受けた。大学二年生になっていながらも、南京事件についての知識があまり無かったことに驚き、なぜ知らなかったのかを考えた際に、学校で殆ど習わなかったことに気が付いた。

南京事件は、1937年12月、日本軍が、中国の当時の首都・南京を攻撃、占領した際に、中国軍の兵士や、難民、一般市民に対しておこなった、集団的、個別的な虐殺、強姦、略奪、放火など、国際法に違反した、不法、残虐行為のことである。中国では、日本軍の加害性や残虐性の象徴として捉えられており、中国の学校教育の中でも、重点的に教えられている。1980年代に、日本で起こった教科書問題が、中国の歴史教育を大きく変えた。中国国民は、この教科書問題が日本政府による南京事件の“歪曲”、すなわち歴史事実を認めないだけでなく、中国の国民の記憶を否定することとして受け止めたからである。

一方、日本の学校教育の場では、南京事件の記述を削除しようとする傾向が年々強まっている。1990年代頃から台頭してきた自由主義史観では、日本の加害の歴史を、学校教育の場で教えることは、日本人としての誇りを失うこととして、批判している。2015年度の教科書検定では、「新しい歴史教科書をつくる会」によって、南京事件について一切記述しない教科書が初めて検定を通過した。本年、南京事件が世界記憶遺産に登録され日本政府は抗議の姿勢を示したが、当事国である日本では、南京事件自体の存在を否定する議論に政府内外を含めて肯定的な風潮があることも否定できず、南京事件の教育が定着していないという事実を無視することは出来ない。ボーダレス化が進む時代にあって、過去の侵略戦争において加害者であった国も、被害者であった国との間で、協調、共存をはかることが求められるようになった。ドイツの例に見るように、過去の克服のためには、和解が必要であり、そのためには、加害側である日本が真摯に南京事件と向き合うことが求められている。

世界記憶遺産への登録に対して抗議する声明が発せられている日本社会ではあるが、その中であって、南京事件を次世代

に伝えようとの取り組みもある。2006年に日中両政府が主導して行われた、「日中歴史共同研究」は、両国の学者が、共に歴史を検証し、『報告書』という形で、研究成果が出されたという点で、協調していくための第一歩とみなすことが出来る。また、日中韓3国共通歴史教材委員会によって、2006年、2012年に作成された歴史教材も、東アジアの和解において重要な役割を持つ。こうした動きの背景には、戦後、反戦・反核・軍縮を目指し、戦争を題材として取り上げてきた日本の平和教育における地道な取り組みも改めて検証される必要がある。

そこで、本報告では、「南京事件」を検討するにあたり、日本と同じくファシズムを経験した敗戦国であり、日本の歴史教育や歴史認識と対照的に取り上げられるドイツについて、「ホロコースト」の歴史をどのように教育の中で取り上げているのかについて考察する。次に、被爆国、敗戦国としての日本が、戦後の歴史教育と平和教育にどのように取り組んできたか、また課題は何かについて明らかにし、こうした取り組みを踏まえて、南京事件を扱う意義や方法を考察する。

発表者氏名: 大久保 秀斗

共同発表者: 加瀬ななみ 蒲谷智史 藤森結子 眞崎涼平

所属ゼミ: 興石ゼミ

発表教室: S401

タイトル: SA プログラム研究-今後の SA プログラムの発展のために-

発表概要:

本発表の目的は、スタディ・アブロード・プログラム(以下 SA)について文献調査を行い、それを通じて本学部の SA について異文化理解の重要性と事前学習の必要性を訴えるものである。本論はまず、SA の歴史、米国の SA、日本の SA の3つの項目のもとに文献調査を行い、その上で上記の2点を訴えたい。本学部の SA プログラムに資するものとなれば幸いである。なお、本発表で扱う SA は基本的に単位取得を目的にするものを意味し、一般的な留学の意味で用いるものとは一線を画する。

まず、SA の歴史を探求する。プログラムとしての SA は、1923年米国デラウェア大学のプログラムをもって嚆矢とされている。それは The Institution of International Education (IIE) によるアカデミックコースとしての導入であり、他にも政府によるフルブライト計画、CIEE(国際教育交換協議会)の努力が挙げられる。Lee(2012)によると、これらは国際問題を解決する要素としての国家戦

略だとある。異文化理解の重要性は明らかだが、当時はこのような政治的な背景があったことは注目に値する。

一方、日本では SA 自体はかなり新しい。特に盛んになるのは 1990 年代以降であるが留学について見てみると、日本の転換期である幕末・明治初期の留学の目的は西洋の技術を取り入れて国家を近代化するためであった(石附, 1972)。よって当時は国際社会人に必要な異文化理解の意識は非常に薄かった。米国に遅れながらも異文化理解は徐々に重要視され始め、留学制度が整えられていく中で SA につながっていく。SA も留学も一般的に異文化理解よりも語学に重きが置かれている形態が多いのは日本の特徴である。

一方、米国の SA では異文化理解は重要視されているが、その背景として Hammond (2009) は 9.11 のテロ以降異文化を理解する能力が重要なスキルとして考えられるようになったことを挙げ、政府が高等教育を通じて SA を促進させたことを指摘する。しかし SA 先で米国人学生で固まることから、異文化理解が実際にできていなかったのではないかと いう疑問が生じた。そのため SA プログラムをより体系的なものにし、異文化理解の育成を図った。現在は異文化理解度を測る DMIS や IDI という段階的な指標も導入されつつある (Hammer, 2003)。同指標には問題もあるが、米国では SA は異文化理解を深めることを留学の 1 つの目的としていると共に、常に進化を遂げていることが見て取れる。

一方で日本では体系的な研究がまだ緒についていない。本学部の SA の理念では語学力の向上と異文化理解を掲げていることから分かるように、日本では異文化理解に加えて語学力も培わなくてはならない。奥石ゼミでは SA に参加した者を対象に SA の実態調査を行った。語学面に関して向上したと回答する者が多い一方で、異文化理解に関しては理解することはできたものの順応できなかったと回答した者が半数を占める。そして SA 前に異文化を学ぶ機会が無かったために、SA 先の国についての事前知識を学ぶ機会を設けてほしいとの回答が複数寄せられた。SA を必修化している立教大学異文化コミュニケーション学部と早稲田大学国際教養学部を例に相互の SA を比較すると、どちらの大学でも SA 前に異文化を学ぶ授業が必修化されていて、実践に備えられていることが分かる。

以上の点から、本発表では SA プログラムのあり方を再確認すべきであると主張したい。そのために多くの事前学習を導入し、より体系的なプログラムにする必要があると考える。これから法政大学は「スーパーグローバル大学」としてより多くの国際社会人を輩出するために、今後の SA の研究が発展することにより本学部が理想とする国際社会人に近づくことを期待したい。

発表者氏名：松浦 未和

所属ゼミ：松本悟ゼミ

発表教室：S401

タイトル：政府との連携と NGO の役割

—ミャンマーの開発事業における異議申立の事例から—**発表概要：**

本論文の目的は、日本の非政府組織 (NGO) が政府の開発援助機関 (JICA) に対し、公式な手続きである異議申立を通していかに NGO の役割を果たしているのかを検証する事である。

本論文における NGO は、市民が自発的に主導し、開発、人権、環境、平和などの国際的課題に取り組む非営利・非政府団体を指す (山田 2000)。

近年日本の開発援助は政府と NGO の連携が重視され、政府による資金援助や政策の策定への参加などが推進されている。ところが、連携によって NGO の非政府性や独立性が侵されその存在意義が揺らいでいる (藤岡 2011)。越田 (2006) は、NGO が途上国の人々の苦しみやプロジェクトの成果を伝える事で、むしろ日本人々々に変化を起こすという視点が抜け落ちたと指摘する。さらに、運営面に課題を持つ日本の NGO にとって政府からの財政援助は魅力的で、そのため政府への批判や提言活動に積極的ではない (藤岡 2011)。そこで本論文では、NGO が政府と連携することで弱まるとされる非政府性や独立性の側面を、どのように乗り越えているのかを問いに掲げる。

問いを探求するために、政府の環境社会配慮ガイドライン策定のために連携した NGO である日本の環境 NGO メコン・ウォッチが支援した、ミャンマー住民から JICA への異議申立を事例に取り上げた。日本の開発援助事業が現地の生活や環境に悪影響を及ぼす可能性がある際に、NGO がデモやキャンペーンといった非公式に問題を訴えかける方法と公式に訴えかける方法がある。異議申立制度は公式手続きを踏んで途上国の人々が政府を訴えることができる制度である。

研究方法として、メコン・ウォッチがこの事業への提言活動に取り組み始めた 2013 年 3 月から 2014 年 11 月までに、援助

した日本政府との間で行った全 10 回の会合についてメコン・ウォッチが記録した議事録の分析を行った。異議申立前後の NGO の言動を辿り、どのように政府へ問題を伝え働きかけを行ってきたかを追跡した。さらに、メコン・ウォッチのホームページ上で公開されている 19 本のメールニュース、15 本の関連情報と 9 本の住民から JICA へのレターを補足資料として使用した。先行研究で指摘された非政府の独立した組織として NGO が何を達成したかを明らかにするため、議事録は①異議申立まで至った議論②異議申立後進捗した議論に分類して分析した。

NGO が問題提起をしていた点のうち、異議申立によって解決に向かった事と解決に向かわなかった事があり、前者について進展を認めながらも、批判的な姿勢を続けていることがわかった。農地などの生計手段、教育機会、清潔な水を喪失し、貧困となり、住宅やインフラが標準以下であると主張した。異議申立によって解決に向けて動き始めたのは、生活を送るために必要な住宅や生計手段の回復と、より住民の意見を反映するための苦情処理メカニズムの制定であった。

メコン・ウォッチはかつて異議申立という正式な問題解決の仕組みを JICA 内部に作る事に注力し、その点では連携している。しかし、その仕組みが全ての問題を解決できない事も認識しており、非公式な手続きで批判を続けている。公式・非公式な手段を用いて政府に対し批判的に協調することで非政府性、独立性を保っている。そのため先行研究が指摘するような NGO が政府と連携することで生じる脆弱性は必ずしも認められない。

メコン・ウォッチは異議申立という公式・非公式な手段を用いることで効果的な働きかけをしてきた。ただし、このような提言活動には専門性が求められるため、越田 (2006) の言う変化が日本政府に留まっているのかもしれない。

<参考文献>

越田清和 (2006) 「第 1 章 NGO と社会運動」藤岡美恵子、越田清和、中野憲司 (編) 『国家・社会変革・NGO—政治への視線/NGO 運動はどこへ向かうべきか』新評論、43-66 頁。

藤岡美恵子 (2011) 「第 4 章人道支援における「オール・ジャパン」と NGO の独立」藤岡美恵子、越田清和、中野憲史 (編) 『脱「国際協力」開発と平和構築を超えて』新評論、145-171 頁。

山田陽一 (2000) 『ODA と NGO 社会開発と労働組合』第一書林。

発表者氏名：郭 林艶

所属ゼミ：松本悟ゼミ

発表教室：S501

タイトル：移民 2 世の言語選択とアイデンティティ

—中国系移民 2 世 3 人のライフヒストリーインタビューから—

発表概要：

本研究の目的は、中国系移民 2 世のライフヒストリーインタビューを通じて、移民 2 世の母語・継承語問題への捉え方を考察することである。本論文では親とのコミュニケーションで使う言語を「母語・継承語」と呼ぶ。

1980 年に約 78 万人だった外国人登録者数は 2014 年には 212 万人余りと約 2.7 倍に増加した。そのうち約 6 割が移民、すなわち定住者や永住者のように海外での長期生活を目的に自発的に居住地域から移り住む人々である。そのような中、移民 2 世が母語・継承語を話せないことにより親との会話に支障をきたすという問題が起きている (高橋 2009)。

移民 2 世は学校などで移住先の言語に触れる機会が多いため、母語・継承語を喪失しやすい。しかし、周りの環境が変化したとはいえ、親子のコミュニケーションには母語・継承語が必要である。筆者は中国系移民 2 世であり、母語・継承語である中国語を話せず親と満足に会話ができなかったことで中国人の子どもとしてのアイデンティティを意識し中国語を学習した経験がある。アイデンティティは他者との対話によって自分と他者の中にある自分に対する認識のズレをなくそうと更新される (細川 2011)。他者との対話は言語を介して感情に影響を及ぼしアイデンティティの更新につながるため、言語とアイデンティティは相互的に関わっている。だとすれば、どのようにして移民 2 世は母語・継承語と向き合い、それが移民 2 世のアイデンティティといかに関係しているのだろうか。

母語・継承語問題についての先行研究は、「家族」「学校や地域社会」の 2 つの側面から整理できる。前者では、親は子どもに対する母語・継承語習得への期待がある一方で、そのための働きかけをあまりしていないと指摘されている。後者では、親の期待を受けて、母語・継承語教育の機会はあるが教室の場所の確保などの課題はあると述べられている。しかし、これらの先行研究には移民 2 世からの視点が欠けている。本研究では移民 2 世の視点から「家族」と「学校や地域社会」の双方との関係を捉えながら、移民 2 世の言語選択とアイデンティティとの関係を分析する。

調査方法は、中国系移民 2 世 3 人 (W さん、S さん、呉さん) のライフヒストリーインタビューである。対象者の母語・継承語は、W さんが中国語、S さんと呉さんはそれぞれ方言の上海語と四邑語である。

結論は2点ある。第1に子どもたちが「家族」と「学校や地域社会」のどちらとの関わりをより重視しているかが、母語・継承語能力の維持に影響している。親との関係を重視しているWさんは母語・継承語を話せ、「学校や地域社会」での関係を重視しているSさんと呉さんは母語・継承語を話せなかった。

第2に3人とも中国人としてのアイデンティティを潜在的に持っているが、それが母語・継承語学習の動機付けになっていない。Sさんや呉さんは就職を考える段階で中国人や中国語の強みに気づき、そのことが「中国人」としての自らのアイデンティティを自覚させ中国語の習得に向かわせた。

一般的に、子どもはある時期から親とのコミュニケーションを重要視しない人たちが出てくる。移民2世も同様に親とのコミュニケーションを重要視せず、母語・継承語問題に悩まない可能性がある。一方で、今回のインタビュー対象者は比較的年齢を経てから中国人としてのアイデンティティを意識した。それには、国際社会での中国や中国語のプレゼンスの変化が影響を与えている。しかし、「学校や地域社会」は子どもが幼い頃に母語・継承語として中国語を教えており、母語・継承語教育と子どもの母語・継承語や中国語に対する学習意欲が一致していない。「学校や地域社会」は親の母語・継承語教育への期待だけではなく、子どもの中国語や母語・継承語への意識、成長段階などを考慮した教育を行う必要がある。

参考文献

- 高橋朋子 『中国人帰国者三世四世の学校エスノグラフィー：母語教育から継承語教育へ』生活書院、2009年。
- 細川英雄編 『言語教育とアイデンティティ—ことばの教育実践とその可能性—』春風社、2011年、138-158頁、202-223頁。

発表者氏名：春名 林

所属ゼミ：松本悟ゼミ

発表教室：S501

タイトル：拡大する中国対外援助の言説

—日本語と中国語の研究論文比較から—

発表概要：

近年、中国経済が急成長する中、中国による国際援助の額も増加し、国際社会からの注目が集まっている。2014年に中国政府によって発表された「中国対外援助白書（以下『白書』）」によると、1950～2009年の59年間で2562億元（約4兆1800億円）であった累計援助額は、2010～12年の僅か3年の間でその

1/3である893億4000万元（約1兆4500億円）に達した（國務院新聞弁公室 2014）。

筆者は中国語文献と日本語文献をレビューし、中国の開発途上国への対外援助を中国ではどのように論じられているのか。また日本と中国の研究者はどのように分析しているかを比較することによって、中国の対外援助をめぐる二国間でどのような誤解や対立が生じるのかを考察する。

範囲対象とするのは『白書』が初めて発表された2011年から2014年に公表された文献で、日本語文献は、CiNiiで「中国の対外援助」をキーワードに抽出した、学術論文10本を研究対象とした。中国語文献は、中国の対経済協力を扱う代表的な学術誌である『国際経済合作』の71件の学術論文を主な研究対象とした。

両言語の文献の比較軸は、①歴史の描き方、②援助の基本原則・原則、③国際援助社会から見る中国の対外援助、④アフリカ経済協力、⑤援助する意義、⑥日本との関係、⑦中国対外援助への評価、⑧中国援助政策の8点である。

調査の結果、以下の3点が明らかになった。第1に、中国対外援助の歴史と意義の面において両言語とも共通の認識を示していた。具体的には、中国建国から改革開放までの間は、中国の対外援助は共産主義といったイデオロギーの観念が強く、政治的に利用され、改革開放以降は、中国企業の利益などの経済的に利用されるようになったという認識だ（近藤・小林・志賀・佐藤 2012）。

第2に、中国と国際援助社会との関係性を述べる際、日本語文献には中国が国際援助社会に対してどのような影響を与えているのかを研究しているものがほとんどである一方、中国語文献のほとんどはその逆の研究を行っていた。つまり、国際援助社会が中国にどのような影響を与えてきたのかという中国側の視点が欠如していた。

第3に、日中両方の文献において中国政府と中国企業との間に利益の相違が深刻化する「エージェンシー問題」が発展している点が挙げられている中、日本語の文献では未整備の中国の援助体制や法制度について踏み込んだ議論がないまま、現象として生じている問題ばかりを批判的に論じている一方で、中国語の文献では、具体的にどのような法律にし、行政制度をどのように改革すべきなのかというミクロな視点で論じられていた（渡辺 2013・黄梅波 韦晓慧 2013）。

結論として、中国対外援助の歴史と意義の面において両言語とも共通の認識を示していた。そして、国際援助社会との関係性を述べる際に、中国側の視点が欠如していた。さらに、中国

の対外援助問題において、日本は現状として生じている問題ばかりを批判し、中国の文献では具体的な解決策を中心にミクロな視点で論じられていたことが明らかになった。

以上のことから日本における研究は中国の対外援助の一方的な悪いイメージに繋がり、中国は自国の利益重視であり、かつ問題への対策や責任を取らないといった誤解を招く恐れがあるのではないかと。このような問題を避けるためにどちらか一方の視点に偏るのではなく、両方の視点から研究を行うことが必要であると考えた。さらに本論文の研究範囲対象が4年間と対象期間が短いため、長期間を対象とした両言語の文献を比較することが今後の研究に期待する。

参考文献

近藤久洋・小林誉明・志賀裕郎・佐藤仁、「新興ドナーの多様性と起源」、国際開発研究、第21巻第1・2号、2012

中国商務部「中国対外援助白書（2014）」國務院新聞弁公室、2014

渡辺紫乃「国際情勢ウォッチング 中国の対外援助外交：その実態と課題」、CISTEC journal:輸出管理の情報誌（148）、92-96、2013

宋微：中国对撒哈拉以南非洲的发展援助与合作，《国际经济合作》2014年第2期

黄梅波 韦晓慧：援外管理机构：主要类型和演化趋势，《国际经济合作》2013年第12期

発表者氏名：松原 早也花

所属ゼミ：松本悟ゼミ

発表教室：S501

タイトル：『国際協力で活かされる日本の経験—ラオス子どもの家を事例に一』

発表概要：

本研究の目的は、日本の児童館活動がラオスの児童支援に活かされた経緯と成果に着目し、「日本モデル」が開発途上国で活かされる条件について考察することである。

明治維新後や第二次世界大戦後の日本の経済社会発展の経験が開発途上国に「輸出」されることは珍しくなく、最近では高速鉄道や原発が取りざたされている。しかしそれらは日本の高度経済成長を支えた技術の移転が中心で、ミクロレベルでの社会開発の経験はあまり紹介されていない（佐藤 2001）。そうした中、筆者もボランティア経験を持つ日本の児童館活動が「ラ

オス子どもの家」という名のもとラオスで広まっている。

ラオス子どもの家は1996年、全日本自治労働組合（自治労）がインドシナ3国で開始したプロジェクトの一環として首都ヴィエンチャンに設立された。自治労の現地提携NGO シャンティ国際ボランティア会（SVA）が元々現地で行っていた読書推進事業とラオス政府の推奨する伝統文化継承事業を柱に、日本の児童館のような施設として子ども達に美術教室や伝統文化教室、地域の清掃活動など様々なプログラムを提供している。現在、ラオス子どもの家はヴィエンチャンの施設をモデルに全国に展開している。

当時SVAラオス事務所長だった小野豪大氏にインタビューしたところ、日本の児童館活動は事業開始時の計画にはなく、その後自治労が行ったラオス子どもの家の現地職員向け研修で取り入れられたことが分かった。そこで「なぜ日本の児童館活動の経験はラオス子どもの家で取り入れられたのか」として「なぜ全国展開するに至ったのか」という問いを立てた。

仮説は戦後日本のミクロレベルの社会開発である「生活改善運動」を活かした援助事業から導いた。生活改善の援助では、かまど改良などの技術だけではなく運動のプロセスも参考にしていた（太田 2004）。これを踏まえ児童館の歴史を文献調査したところ、戦前はセツルメント運動（特定の場所での支えあい）として子どもを親や地域と切り離さない拠点として発展し（鈴木 2011）、近年は地域交流の場として期待されるなど戦前・戦後に共通する機能を果たしていた（藤丸 2015）。そこで「児童館が子どもだけではなく親や地域とのつながりの場になり、それがラオス社会に馴染む要因があったからではないか」という仮説を立てた。

仮説の検証は自治労とラオス子どもの家の職員へのインタビューによって行う。本要旨提出時点では自治労側へのインタビューのみ実施した。対象者は元自治労でラオス子どもの家のいわば「仕掛け人」の白石孝氏である。

白石氏へのインタビューの結果、そもそも研修で日本の児童館活動を取り入れている意識はないことが分かった。白石氏が研修を始めたのは、カンボジアの小学校で子ども達と交流した際、紙人形劇の一種であるペーパーサーターや似顔絵描きを披露したところ大反響があり、子ども達に必要な活動は「これだ」と実感したことがきっかけだった。そして自治労の研修では日本の児童館職員や保育士の参加が多く、その人たちの得意とするパネルシアターやエプロンシアターなどの手法がラオス子どもの家に紹介されていったのである。

このインタビューから、始めから「日本モデル」を用意した

のではなく、現状に合った解決策を講じる際に自分の持っている知見を活かすことが、結果として日本の児童館経験を活かすことになっていたことが明らかになった。では、自治労の研修によって日本の児童館経験が取り入れられたラオス子どもの家は、なぜ全国に展開したのか。この問いに答えるために筆者は11月20日から5日間ラオスを訪問し、ラオス子どもの家所長・スパン氏らを対象にインタビューを行う予定である。学会ではこのインタビュー調査も踏まえて発表する。

参考文献

- 佐藤寛、第3章「戦後日本の生活改善運動」、菊地京子編、『開発学を学ぶ人のために』、2001年、世界思想社、pp144-163
- 太田美帆、『生活改良普及員に学ぶファシリテーターのあり方—戦後日本の経験からの教訓—』、2004年、JICA 国際協力総合研修所
- 鈴木みな子、『セツルメントの今日的意義—社会福祉施設運営のあり方をセツルメントの歴史から考察する—』、2011年、浦和大学・浦和短期大学部、浦和論集第45号
- 藤丸麻紀、『児童館の意義・役割に関する分析』、2015年、和洋女子大学紀要第55集

発表者氏名：三角 静那

共同発表者：柿沼里帆 佐藤菜々子 藤田優美 佐々木ひかり

所属ゼミ：曾ゼミ

発表教室：S402

タイトル：離島における持続可能な観光とは ～式根島の事例をもとに～

発表概要：

我が国では少子高齢化が進んだことによって、全人口に占める労働者人口の割合が減少している。これを受け、各地方自治体では、地域振興を図るために観光開発を進めてきたが、その結果新たな問題に苦しむ事態となった。例えば、沖縄県の石垣島や座間味島では、宿泊施設の充実により観光客が増えたが、水不足が問題となった（神谷・赤松・宮良 2013）。対馬では、観光客によるゴミのポイ捨てや不法投棄が行われている（東海大学紀要 観光学部 2011）。このような観光開発による環境への影響は、人口も少なくコミュニティの小さい離島で、より先鋭的に現れ、深刻な問題へと発展している。また、若者たちを繋ぎとめる主な産業が他にない離島では、地域振興は勢い観光業に頼らざるを得ない。本研究では、少子高齢化が進む中で、観光を地域振興の要とすべく取り組みを進めている式根島を

事例として取り上げ、どのように持続可能な観光を実現できるかについて探ってみた。

式根島とは、東京諸島を構成する島の一つで、人口の半数以上を60歳以上の方が占めており（新島村民政課平成27年7月1日調べ）、日本の離島の中でも少子高齢化が著しい島の一つである。観光中心の産業構造で、観光協会・商工会が連携し、観光による島の活性化を図っている。また式根島では、1963年から始まった民宿のスタイルが現在も主流で、島内の宿泊施設のほとんどを占めており、観光産業の大きな柱となっている。

式根島を訪れる観光客数は、1960年代の離島ブーム後、2000年には10,197人までに減少したが、2014年には25,619人と倍以上に伸びている（東京都産業労働局観光部 2014）。この増加の背景には数年前から始まった式根島観光協会の取り組みがある。SNSによる島外への情報発信やロケ地誘致活動にも取り組んだ。更には商工会と協力し観光従事者向けの講習会を開催した。しかし、民宿経営者の高齢化や後継者難などの問題が顕在化しており、従来の民宿中心の受け入れ体制が曲がり角にきている。

上記のような問題に直面する中で、持続可能な観光に繋げるためには、何が必要なのかを明らかにすべく、現地に出向きフィールドワークを行った。また、式根島観光協会の田村修一さんはじめ、式根島の観光に関わる様々な視点を持ち合わせた4名の方にインタビューを行い、それぞれの経験や想いを伺った。

人口減少が進むなか、観光や街づくりへの取り組みに対して、「このままではいけない」ということに気付いている人も少なくない。現にインタビューを受けてくださった皆さんは、一步を踏み出すため、試行錯誤を続けている。それでも、外の人に流されて地域が壊れるよりも、現状のままを保ちたいという気持ちの方が先行し、それ故に変わるための行動を起こせない人も多くいるという。田村さんは、「何もしなければそれだけの島になり、現状を保つことも出来ない」と指摘し、現状を保つためにも、外からの変化を受け入れ、島全体の意識を変えていくことが大切だと述べた。

調査を始めた当初、持続可能な観光のために宿泊施設などの受け入れ体制を整えることや、観光客数を増加させることが最善策だと考えていた。しかし、実際に必要なのは、島外の人も受け入れていける新たな体制だと感じた。例えば、式根島の自然や文化に配慮したカントリーコードの作成や、島民の観光やIターン者に対しての意識改革、彼らを受け入れるための居住地の確保などだ。式根島の豊かな観光資源を守り、持続可能な

観光を実現するには、島内外の人が相互理解を深めることが重要である。

参考文献

神谷大介・赤松良久・宮良工（2013）「沖縄県離島地域における渇水問題と観光の影響に関する分析」『土木学会論文集 G(環境)』69(5)

東海大学観光学部（2011）「対馬における「国境観光」の現状と課題」『東海大学紀要 観光学部』

平岡昭利（2009）『離島に吹くあたらしい風』海青社

山口広文（2009）「離島振興の現況と課題」『調査と情報－ISSUE BRIEF－ No. 635』 635 p.1- p.10

発表者氏名：望月 智美

所属ゼミ：松本ゼミ

発表教室：S402

タイトル：なぜ外国人労働者の人権侵害は解決しないのかーハーシュマン理論からの探求ー

発表概要：

本研究は「売り手市場」にもかかわらず外国人労働者の人権侵害が解決しない原因を経済学者 A. O. ハーシュマンの理論を援用して探求するものである。

外国人労働者に依存する経済構造を持つカタールでは、2022年ワールドカップカタール大会の施設建設に従事する外国人労働者が次々と命を落としている。虫の湧くような劣悪な衛生環境での生活、賃金未払いやパスポートの取り上げなど状況は深刻で、2022年までに4000人が亡くなるのではないかと言われている。しかし、実はこれは遠い国の話ではなく、先進国日本でも似たような状況が起きているのである。昨年2014年にはアジア諸国間における外国人労働者争奪戦の様子が報道番組で特集され、企業の人事担当者が現地に出向いて懸命なリクルート活動を行う様子が映し出されていた。日本で働きながら技術を学び、祖国に帰って活かしてもらうことを目的とした「外国人技能実習制度」は、労働力不足が懸念される建設や介護の現場を中心に拡張される予定である。だが、労働基準関係法令違反は減る気配を見せず、月200時間にも及ぶ残業や雇用主によるいじめ、パスポートの取り上げなど、過酷な状況がマ

スメディアを通しても伝えられている。

以上のように、外国人労働者は引手あまたの状況にいる。市場原理が働けば、必要とされている外国人労働者の待遇は改善されるはずである。なぜ人権侵害が続くのか。

ハーシュマンは、ナイジェリアの鉄道の非効率性が他の輸送手段との競争の中で改善しなかった要因を、顧客がトラックという他の輸送手段に離れ（離脱）、フィードバックメカニズム（発言）が働かなかったためとした。つまり、質やサービスを向上させるうえで「離脱」が重要視されてきたことに対して、「発言」も重要な回復メカニズムであると唱えた。この理論を援用し、外国人労働者はより好条件の国に「離脱」し、改善を求める「発言」がなされないからではないかという仮説を立てた。労働者の送り手側としてベトナム、受入国として韓国と日本を事例に、人権侵害が叫ばれる日本から国際的評価の高い受入政策を持つ韓国へ離脱することで回復メカニズムとしての発言が日本で機能しないのではないかと考え、EBSCO と CiNii による英語と日本語の関連文献をレビューした。

結果は以下の通りである。まず、日本から韓国への離脱は確認されなかった。日本は安全で収入の高い国として農村のベトナム人の中で最も人気の国に位置しているからである。この評価の背景には台湾やマレーシアという、より人権侵害の深刻な受入国の存在もある。ではなぜ発言がなされないのか。第一に、日本へ行くことのできた「幸運な」ベトナム人労働者は出稼ぎを紹介してくれた親類やリクルーターに気を遣って改善を求める発言を自粛してしまうからである。第二に、リクルーターから課される不当な高額手数料による借金を苦にして高賃金の雇用先へと逃亡し、不法労働者となったがために「発言」に耳を傾けてもらうことが難しいからである。なお、韓国においてはNGOという市民社会の力と外国人労働者が結びついて制度の改善を実現しており、発言が持つ有用性は確認された。以上から、日本で人権侵害が続く一つの原因として、送り手側からの受入国の過大評価によって離脱が起きず、且つリクルーターや親類との個人的な繋がり、不法労働者への転換によって発言も自粛されてしまうからということが考えられる。

ハーシュマンによれば、離脱も発言も免れている組織はおそらくないとされている。しかし本研究では、離脱も発言も制限された外国人労働者の存在が浮き彫りになった。対象国を絞った限られた事例研究ではあるが、人権侵害の要因の一側面を明らかにできたといえる。今後更なる研究をもとに、離脱、発言の機能に着目した議論が期待される。

参考文献・資料

A. O. ハーシュマン 『離脱・発言・忠誠—企業・組織・国家における衰退への反応—』 矢野修一訳、ミネルヴァ書房、2005年

The Guardian (2013), “Qatar: The migrant workers forced to work for no pay,” (<http://www.youtube.com/watch?v=e5R9Ur44XV8> 2015年1月30日閲覧)

NHK クローズアップ現代 『シリーズ 人手不足ショック②』 (2014年6月12日放映)

発表者氏名：藤村菜由

所属ゼミ：松本ゼミ

発表教室：S402

タイトル：パレエと敵性文化

—ロシアの文化はなぜ排斥されなかったのか—

発表概要：

本研究の目的は、「敵性文化」を歴史的に考察することで、関係が悪化した国の言語や文化を「敵性」と呼ぶことの妥当性を検証することである。

よく知られているように、第二次世界大戦の頃には英語が「敵性語」とされ、社交ダンスやジャズなど欧米の舞踏や音楽が「敵性文化」として排除された（永井 1991；大谷 1997；大石 2001）。しかし、20世紀の日本の対外関係を考えるとロシア・ソ連の方が「敵」と考えられてきたにもかかわらず、ロシア文化と見なされてきたパレエが「敵性文化」として排除されたという話を聞いたことがない。そこで本研究ではまずパレエが日本に紹介されてから第二次世界大戦終結までの期間に「敵性文化」と呼ばれたことがあったかどうかを「パレエ」で検索した新聞記事140件、文献11件から調査したところ、その期間にパレエが「敵性」のレッテルを貼られることがなかったことが明らかとなった。では、「敵」と考えられていたロシア・ソ連の文化として輸入されたパレエはなぜ排斥されなかったのか。この問いを探究するため、排斥されなかったパレエではなく、排斥された文化を調査した。

「敵性文化」で朝日新聞、毎日新聞、読売新聞のデータベースを検索したところ、三紙の創刊以来この語が初めて登場したのは読売新聞の1941年であり、「敵性語」は朝日新聞の1942年である。日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、更に日中戦争の時代には、敵の文化や言語に「敵性」という言葉を付けるこ

とはなかった。このことから、敵性文化や敵性語という言葉は第二次世界大戦期に誕生したと推測できる。敵性文化や敵性語を扱った9件の文献からは米英と開戦する数年前の1930年代後半から「仮想敵国」と見なした米英の文化を排斥する動きがあったことがわかった。同時期に、日本が傀儡政権を立てた満州国とソ連の間で激しい武力衝突があったが、「敵性」は米英のみに向けられた。

「敵性」とはもともと戦時国際法において、交戦国など敵とみなす国に係る人やモノの扱いを定めるための概念であり（高野 1986）、言語や文化について使われることはなかった。それが、1930年代後半になって英米両国の文化に対して突如使用されるようになった極めて特殊な表現であると考えられる。裏を返せば、パレエのように「敵」の外来文化でも排斥されないのが一般的なのである。

本研究では、パレエが排斥されなかった理由を、排斥された「敵性文化」の分析から類推する形で仮説的に導いた。しかし、なぜ米英の文化にのみ「敵性」のレッテルが張られたのかは分析対象としていない。本研究では「敵性文化」の特異性を明らかにしたもの、排斥される（されない）理由までを明らかにできなかった。

最後に本研究の合意について述べる。2011年8月韓流ブームを批判するインターネット上の投稿がきっかけとなり、フジテレビを取り囲む数千人のデモが継続的に行われた（朝日新聞 2011年9月1日）。理由は同局の韓流偏重の番組編成への批判だった。両国側の政治問題が文化的な批判につながりかけたといえる。本研究で明らかとなったように特定の外国と友好的とはいえない関係になったとしても、その国の文化や言語まで「敵性」というレッテルを貼ることは歴史的には非常に特殊な現象であり、決して一般化するものではない。日中、日韓の政治的な関係が必ずしも友好的とはいえない今日、互いの文化を退けあうことがないよう、歴史的に学ぶ必要があると考える。

【参考文献】

大石五雄『英語を禁止せよ—知られざる戦時下の日本とアメリカ』、ごま書房、2007年

大谷博「戦時下の敵性音楽の排除と音楽を享受する自由」『尚美学園短期大学研究紀要第11号』、1997年

高野雄一『全訂新版 国際法概論（下）』1986年5月30日全訂新版1版発行、株式会社弘文堂

永井良和『社交ダンスと日本人』、晶文社、1991年

【参考資料】

「[読者眼] 軽音楽は絶対必要▽日本的なもの」、『読売新聞』、朝刊、1941年6月1日
「卓球場の公」、『朝日新聞』、夕刊:2、1942年10月
「500人デモ、ネットから火」、『朝日新聞』、朝刊:37、2011年9月1日

発表者氏名：鈴木佳子

共同発表者：袁思澄 並木祐佳 脇萌実

有川博隆 伊藤恵理 岩田正則 高橋由希 武内美菜子 茂木しおり

所属ゼミ：曾ゼミ

発表教室：S502

タイトル：日本における観光ガイドの現状と課題—文化のインタプリターという視点からの考察

発表概要：

1. 研究目的

2015年9月現在、訪日外国人観光客は1400万人を突破し、2020年に向けて2000万人時代を目指す勢いにある。本稿では観光と結びつきの強い“ガイド”に焦点を当て、日本の観光大国実現に向けガイドの在り方を探る。

2. ガイドの種類と現状

2015年4月1日現在、通訳案内士は19,033名が都道府県知事の登録を受けている[日本政府観光局 online]。ボランティアガイド(以下VG)は日本観光振興協会が把握するだけで1748団体41,641名いる[日本観光振興協会 online]。VGは通訳案内士よりかなり多く存在するが、外国人観光客にガイドを行う組織は1~2割しかおらず、今後迎える2000万人時代への対応が困難になるのではないだろうか。日本が観光大国を目指すためには、このVGの外国人観光客に対応し得る質を高めていく必要がある。ガイドの役割を明らかにしながら、どのように質を高めるべきか考察していく。

3. 観光の定義とガイドの役割

“観光”とは一般的に地方や国の風物を見物することだが、法律で観光という言葉の定義はない。本稿では観光人類学の視点より「観光とはよく知られているものの確認」[橋本2011:150]と捉えることとする。観光者は既に自身の中で形成されている観光のイメージ(=よく知られているもの)を観光地において確認する作業をするのである。そして「観光」におけるガイドの役割とは、観光者が当初抱いていた観光のイメー

ジを少し彩るような「ささやかな発見」を提供することにある[橋本2011:249]。この「ささやかな発見を提供する」すなわち、思いがけない新たな事実の提示と言い換えるならば、ガイドにはインタプリテーションの要素があるのではないかといえる。

4. インタプリターとしてのガイド

日本におけるインタプリターは1980年ごろに誕生したといわれるが、今では自然公園だけでなく、エコツアーや博物館のガイドも含まれる。フリーマン・ティルデンが提唱する「インタプリテーションの6つの原則」はガイド一般にも広く適用できるのではないかと考える。6つの原則は次の通りだ[Freeman Tilden 1957:9]。

- (1) 紹介する対象を訪問者の個性や経験に関連づけなければ意味がない
- (2) 思いがけない新たな事実の提示である
- (3) さまざまな技術を駆使して語られる芸術である
- (4) 知識の提供ではなく、触発である
- (5) 全体の理解に心を配るべきであり、人に対して語られるべきである
- (6) 子供に対する解説は全く違った視点から行うべきである

こうした望ましいインタプリテーションの素質を備えたガイドなら、観光者に「ささやかな発見」をもたらし、より彩られた「観光」経験の構築を促すことができるのではないか。実際にガイドの案内に同行し、ガイド団体にインタビューを試み、分析を行った。

5. フィールドワークの概要と分析結果の骨子

外国人向けVG3団体、日本人向けVG1団体、通訳案内士1名、個人VG1名を調査した。京都で活動する通訳案内士の亀田さんは、外国人ゲストの出身国の歴史と合わせ日本の歴史を解説するため、思いがけない新たな事実を提示しながら知識への触発がされていると考えられた(原則2,4)。日本人向けVG団体の東京シティガイドクラブは口頭だけでなく図や写真を用いていた(原則3)。このようにティルデンの6原則に当てはまる要素を確認できた。しかし、日本人向けVGは相手の文化背景を捉える意識の低い部分があり、外国人向けVGと比較して、観光者の個性・経験を考慮する(原則1)要素が弱い印象を受けた。この弱さの改善こそが課題であり、ガイドの質向上を図るため

にこの課題をいかに克服していくのか、フィールドワークから見えてきたことを論じたい。

参考文献、参照サイト

青木義英(2011)『観光入門—観光の仕事・学習・研究をつなぐ』新曜社

橋本和也(2011)『観光経験の人類学—みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐって』世界思想社

Freeman Tilden(1957)『Interpreting Our Heritage』The University of North Carolina Press

日本政府観光局(2015)「通訳案内士試験概要」

http://www.jnto.go.jp/jpn/interpreter_guide_exams/

日本観光振興協会(2013)「全国観光ボランティアガイド」

<http://vg.nihon-kankou.or.jp/>

発表者氏名：小口夕香

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

発表教室：S502

タイトル：20世紀アメリカにおいて対比的に構築された移民への排斥のまなざし

発表概要：

移民の国といわれるアメリカでは、19世紀半ばから旧移民と呼ばれる北西ヨーロッパからの移民とは異なる、新移民と呼ばれる東南ヨーロッパからの移民や中国や日本からのアジア系移民が大量に流入した。こうした新移民ならびにアジア系移民は、いずれも1924年に施行された移民法により移民枠の削減や移民自体の禁止などの排斥を受けた。

本発表は、19世紀末から20世紀初頭のアメリカに移住した新移民とアジア系移民に対するステレオタイプのイメージが対比的に構築され、流動的に変化しながら、移民の排斥につながっていった過程について考察する。排斥を受けた原因としてアメリカ社会になじまない独特の文化や、優生学に基づく人種差別が挙げられる。本発表はそうした原因を念頭に置き、アメリカ社会に適応する文明国民であるかを図る「文明度」と、優生学により優劣が定められた「人種」に着目する。そこで本発表は中国人移民と日系移民、そして新移民それぞれが排斥を受ける流れを取り上げ、旧移民を含む4つの移民の流動的な対比構造を分析することで、アメリカ社会で排斥のまなざしがいかに変化し、構築されていくのかを考察する。

中国系移民に関しては「野蛮」な国民性のイメージや有色人

種が白人社会に悪影響をもたらすという議論が寸劇(ミンストレル・ショー)や大衆歌などを通じて広まり、中国人労働者が移住を禁止される排斥を受けた(ロバート 2007)。中国系移民に関しては、旧移民との対比において、文明度の低さや、黄色人種という人種差別が排斥の要因となっていた。

日系移民に関しては、「武士道」が称賛され文明国と評される一方、「写真花嫁」などが遅れた封建的文化であるとの批判を受けていった(飯倉 2010; 吉田 1990)。新移民に関しては、多くがカトリックであり、プロテスタントが多いアメリカ社会で反カトリック主義が再燃し、新移民がその矢面に立たされた(ローラ 1972)。また、祝日を奇異な行動で盛大に祝うなど独特の伝統文化風習が非難された(松尾 2000)。さらに、20世紀初頭から台頭してきた優生学においても、北西ヨーロッパ出身の旧移民に比べて東南ヨーロッパ出身の新移民は劣等とみなされた(ローラ 1972)。

このように日系移民と新移民は文明度の低さや人種的に劣等とされ、1924年に移民法で排斥を受けているが、その程度は日系移民が完全に移民を禁止されたのに対して新移民は移民枠の削減に踏みとどまっている。日本は文明国と評されたこともあり、また日系移民はアメリカ化運動を積極的に行ったにも関わらず、カトリックでありアメリカ化運動も行っていない新移民のほうが排斥の程度が低い結果となった。本発表では、この排斥程度の差異は排斥のまなざしが文明度ではなく、優生学をもとにした「人種」のものさしにより白人と黄色人種という優劣から構築されているものと捉える。つまり、移民に対する排斥のまなざしが、移民の出身国の文明度を中心に据えたものから、人種を中心に据えたまなざしへと変化したのではないかと論じる。

キーワード：アメリカ、移民、排斥、文明度、人種、新移民、アジア系移民

【参考文献】

ローラ・フェルミ 1972『亡命の現代史—20世紀の民族移動—』(広重徹訳) みすず書房

加藤洋子 2014 『「人の移動」のアメリカ史』彩流社

マイケル・クラウス 1990『アメリカ建国の民—モザイク国家の市民—』(山岸勝榮訳) こびあん書房

飯倉章 2010『日露戦争諷刺画大全 上・下』芙蓉書房出版

ロバート・G. リー 2007 『オリエンタルズ—大衆文化のなかのアジア系アメリカ人—』(貴動嘉之訳)

松尾弉之 2000『民族から読み解く「アメリカ」』講談社
島田法子 2009『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道 女性移民史の発明』石書店
吉田忠雄 1990『排日移民法の軌跡』経済往来社

発表者氏名：桑本 佳奈枝

共同発表者：宮崎裕加 若林沙羅 西川結子 金 ナレ 櫻井一樹

所属ゼミ： 曾ゼミ

発表教室： S502

タイトル：新大久保における日本人と外国人が共生していくための取り組み

発表概要：

2015年度6月現在、254万人、192の国・地域の外国人が日本で暮らしている。1990年の出入国管理及び難民認定法（入管法）の施行から外国人登録者および定住者は年々増加しており、昨年6月には成長戦略の一環として、優れた能力を持つ外国人を呼び込むため、経営者や技術者を対象にした新しい永住権の創設を検討する出入国管理法の改正案が可決された。

今後も外国人の増加が予想されるなかで、エスニックタウンも増加するであろう。エスニックタウンを形成することで日本人が他国の文化を尊重し、外国人と対等な関係を築くことに繋がる。エスニックタウンに着目することは日本人と外国人が共生していく中で重要であると考えます。

そこで、今年度はヘイトスピーチにより客足が離れてしまったコリアン・タウンである新大久保の現状と今後について考え、さらに、新たに形成されるエスニックタウンの将来について学会発表を行う。この研究は新大久保のエスニックタウンが形成されてきた歴史、またそこに住む人々がどのような経緯で日本に暮らすようになったのかについて着目し、外国人が積極的に異国の地で自国の文化を繁栄させることについて考えていきたい。

今回私たちは、日本で一番在留外国人が多い、東京都新宿区に焦点を当てた。現在新宿区には38674人の在留外国人がいる。その中で17906人が新大久保周辺に暮らしている。1954年頃から始まった高度経済成長期の際、大久保地区に住宅やアパートが増加しはじめ、歌舞伎町で働く水商売関係者が主に居住するようになった。このころから、外国人売春婦が増加し、彼女たちは安いアパートに住み、そこに同国人が集まった。1986年には新宿区の外国人登録者数が東京23区内で第一位になり、その中でも百人町、大久保地区に特に多くの外国人が居住して

いた。1990年代には、大久保地区が東南アジアの人たちが多く住む町となった。このようにして1990年代末には大久保地区＝エスニックタウンというイメージが定着し、数多くの外国人向けレストランや食材店などが立ち並び、外国人が十分に生活できる環境となった。2000年代から韓流ブームが起り、大久保地区の中でも新大久保駅周辺が「日本一のコリアン・タウン」というイメージが定着するようになった。また、これにより、韓国料理のお店や韓流グッズなどを販売するお店が増え続け、沢山の日本人の人々が新大久保を訪れるようになった。しかし、最近になり、韓流ブームが落ち着いたことや、先にも挙げたヘイトスピーチの影響で全盛期は約300店舗あった韓国料理店が2014年には、約4分の1まで減少してしまった。現在では、韓国料理のお店だけでなく、中国系、東南アジア系、イスラム系のお店が増え、「コリアン・タウン」ではなく「エスニックタウン」となった。

曾ゼミ移民チームはこのような国家間に問題がある国どうしのエスニックタウンでの日本人と外国人との共生の実現に向けて新宿区の行政、住民から話を聞くことで今後どうすべきか考えた。

学会発表では、日本人と一部の韓国人経営者で組織される新大久保商店街振興組合の組員と韓国人経営者で組織される韓国人商人連合会の会員の生の声に耳を傾け、新大久保での日本人と外国人との共生を共に考える。

参考文献

稲葉佳子(2008)『オオクボ都市のカー多文化空間のダイナミズム』学芸出版社

金命貞(2011)「地域社会における多文化共生の生成と展開、そして、課題」『自治総研(392)』pp59-82

山下清海・秋田大学地理研究所学生共著(1997年)「横浜中華街と大久保エスニックタウンー日本における新旧2つのエスニックタウンー」『秋大地理』pp57-68

発表者氏名：牛津七海

所属ゼミ： 今泉ゼミ

発表教室： S503

タイトル：イラク帰還兵からみるアメリカ格差社会-Iraq Veterans Against the War(反戦イラク帰還兵の会)の活動から考察する-

発表概要：

本報告は、アフガニスタン・イラク戦争を経験した現役および退役軍人により結成された「Iraq Veterans Against the War (反戦イラク帰還兵の会 以下、IVAW)」の主張と活動に焦点を当て、アメリカで、ジョージ・W・ブッシュ政権時(2001-2009)に起こった、イラク戦争における兵士リクルートの実情と従軍経験、そして、帰還兵士が抱える問題を明らかにし、アメリカ格差社会の実態と、帰還兵自身による問題への取り組みを分析する。

2003年、ブッシュ政権は、国連の大量破壊兵器査察を拒否したイラクに対して、大量破壊兵器を排除することを理由に、国際世論の反対を押しきり、3月、イギリスと共同でイラクを攻撃した(イラク戦争)。名目上はアメリカ・イギリス両軍の勝利とされているイラク戦争であるが、一方的な攻撃と専制攻撃は、中東の不安定な状況の中で、占領国や、占領国が名目上の支配を移譲した現地当局の手に負えない事態へと発展した。アメリカに対するイラクの対抗勢力は、占領の違法性と、侵攻軍が引き続き自国の領土にとどまっていることに対する怒りを露にし、より強固な対抗姿勢をとることとなった。

以上の経過を経て発展するイラク戦争において、長期化に伴う米軍兵士の精神的苦痛が、深刻な問題となった。米軍のデータによると、帰還した若者の24.5%がPost Traumatic Stress Disorder(外傷後ストレス障害、以下、PTSD)に陥っており、2006年の陸軍の調査では、自殺未遂が946件にまで昇っている。国防総省の予想では、精神的治療が必要になる兵士はいずれ10万人を越えるといわれている。

一方、イラク戦争開始後、アメリカ国内では兵力不足を補うため、「貧困」が米軍リクルートに利用された。貧困層の若者の多くは、大学進学費用や医療保障など、人間が社会生活を送る上で極めて重要な「教育」や「医療」と引き換えにリクルートされている。しかし、戦争の激化に伴う軍事費用の拡大により、社会福祉が大幅に削減され、兵士の帰還後の管轄となるVeterans Administration(退役軍人省、以下、VA)の予算は年間1億ドルずつ削減された。国中の帰還兵専用病院も次々と閉鎖され、経済的理由で入隊した帰還兵たちの多くは、ホームレス化を余儀なくされることとなった。また、精神的不安定さから、アルコール中毒者、薬物依存者が増加し、これらは、アメリカ社会において深刻な問題となっている。

ジャーナリストの堤未果は、イラク戦争開始後のアメリカ社会で、「戦争経済と市場経済の結びつきが強められ、現在のアメリカ社会における新自由主義が、帝国主義、拝金主義、物質主義を生み出している」と指摘している。堤は、こうした社会

を引き起こす要因が、①アメリカの掲げる絶対的な自由と民主主義への自信が、テロにより揺さぶられ、「恐怖」に覆われてしまったことと、②戦争経済を支えてしまう国民の「無知」であると分析している。

そして、イラク帰還兵の立場から医療賠償や、イラク戦争の不当性について訴える活動組織に、反戦を全面に掲げる「IVAW」の存在が挙げられる。2004年7月、ボストンで行われた「Veterans For Peace(平和を求める退役軍人の会)」の年次総会において、イラク戦争に反対していながら、様々な圧力のために声をあげられずにいる現役および退役軍人に、意思表明の場を与えるために創設された。IVAWは、イラク戦争が、大量破壊兵器が存在するという虚構の事実のもと、米国法および国際法に違反して開始され、占領軍がもたらした破壊と殺戮と無辜の死の不必要な流血に対し、道義的責任があると主張している。退役軍人のなかでも少数派である以上の主張を、帰還兵の従軍経験と帰還後の実態から検証し、アメリカが掲げる「正義の戦争」が国内の格差社会によって支えられ、さらに格差社会を生み出していること、また、アメリカ軍によるイラク破壊と殺戮がアメリカへの憎悪を生み、軍事力によりさらなる鎮圧に向かうこと、この悪循環を断ち切る可能性をIVAWの「反戦」の主張と活動から考察したい。

発表者氏名：岩田加奈子

所属ゼミ：熊田泰章ゼミ

発表教室：S503

タイトル：法政大学の国際化改革の内と外—国際文化学部生として—

発表概要：

1. はじめに

「スーパーグローバル(SGU)大学創成支援」は、連続する大学改革支援事業の集大成とされ、2014年に文部科学省が37校を認定し、採択大学は10年間の補助金を受けて大学全体の国際化に向けて改革を進めなければならない。法政大学は2012年の「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成推進支援」と併せての改革実施となる。本論文では、これら2つの支援事業を分析し、それによって何が求められているのかを明らかにした上で、国際文化学部としてどう取り組むべきかを考える。また、大学全体の国際化が進む一方で、私たち学生が本当にその恩恵を受けているのかについて検討し、大学が体裁として制度を整えるのではなく、学生一人一人が国際化の内にいること

を実感し学びを進めるには何が必要なのか考察する。

2. 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成推進支援

この支援事業の目的は、「若い世代の『内向き志向』を克服し、国際的な産業競争力の向上や国と国の絆の強化の基盤として、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる『人財』の育成を図ること」である。法政大学の取組概要には、対象学部が国際文化学部とグローバル教養学部と明記され、学部教育強化によって大学全体の国際化を図る狙いだ。具体的な取組として、G-ラウンジ・英語強化プログラム（ERP）を通じて学生の英語運用能力のさらなるレベルアップ、日本人としてのアイデンティティを高め、自ら異文化社会に踏み出す積極性を育成するための実践的プログラムの設置を掲げている。そしてグローバル人材たる資質と能力育成のためのカリキュラムを整えるものである。

3. スーパーグローバル大学創成支援

この支援事業の目的は、「我が国の高等教育の国際競争力の向上を目的に、海外の卓越した大学との連携や大学改革により徹底した国際化を進める、世界レベルの教育研究を行うトップ大学や国際化を牽引するグローバル大学に対し、制度改革と組み合わせ重点支援を行うこと」を目的としている。法政大学の取組概要では、「課題解決先進国日本からサステナブル社会を構想するグローバル大学の創成」が基本構想とされ、国際社会を生き抜く人材の育成を目指している。主に学生教育・教員・大学運営の3つの側面から改革を進めるとし、外国人留学生や留学経験者数の増加、大学間協定による交流数増加、中期計画等の策定と国際化戦略、グローバル教育センター設置、アクティブ・ラーニング施設整備、入試制度改革、アカデミック・サポート・サービス実施、グローバル社会の基礎作りに向けた中等教育支援、卒業生ネットワークの組織化など、具体的な実施項目を挙げている。

4. 結論

上記の事業による大学全体の国際化の中で、国際文化学部が取り組むべき課題は、「改革の周知」と「学生との一体化」である。

国際文化学部生は1年次から英語および第二外国語の習得や、2年次のSAに向けて継続的な語学授業の受講によって語学力を伸ばし、SA期間中には各言語による授業を受け現地で生活することで、異文化を受け入れる力を身に付けてきた。しかし、留学することの意義や、「法政大学国際文化学部」で何を求められるのかについて自覚している学生は少ない。SGU創成支援におけるG-ラウンジやERP、ESOP等を実際に活用している学

生は一部である。これらの制度を知らない学生、一部の積極的な学生向けであり自分には無縁と感ずる学生、また自分へのメリットが大きくないと判断する学生もいる。このような問題点を解決するために、私はここで3つの提案をする。

1. 「国際文化学部への招待」新設
2. 制度活用による単位認定幅の拡大
3. SA後の継続的な語学科目・文化研究科目の充実

この3つを実現することで、大学教育の国際化の現状を把握し、法政大学がこれに対してどのように対応しようとしているのかを理解した上で、法政大学国際文化学部生としてこの改革に一人一人向き合うことが出来るだろう。

発表者氏名：福田 明音

所属ゼミ：前川裕ゼミ

発表教室：S503

タイトル：社会変化の在り方—マルキ・ド・サド『野心の罪』と北川千代三『H 大佐夫人』についての社会哲学による比較考察—

発表概要：

マルキ・ド・サドの短編『ファクスランジュあるいは野心の罪』彼の代表作と言われる作品とは大きな差異を抱えている。それは美德だけではなく、悪徳も共に罰せられるという点においてである。悪徳の賛美というサドの基本思想ともいえるものが何故この作品では、ある種の「ねじれ」を起こしているのであり、その点においてこの『野心の罪』はサド作品の中でも一線を画す作品であると言える。

一方、第二次世界大戦後の日本で発行されたカストリと呼ばれる大衆向けの娯楽雑誌に掲載された北川千代三の『H 大佐夫人』は、いまだ戦前の価値観が残っていた時代に発行されたにも関わらず、軍人の妻の不貞を描いたという点において、同様に異色の作品である。姦通といういわゆる「不道德」な行為を賛美し、戦前の価値観を否定することで、北川は既存の体制や権力を強く否定したのである。

これら二つの作品は共に美德や道徳を否定する意思を持っているにも関わらず、このように差異が生まれてしまっている。その理由については、まず当時のフランス・日本の社会状況を考察する必要がある。

『野心の罪』の発行は1800年、旧体制からの脱却、恐怖政治、統一政府の樹立と、まさにフランス社会が大きく変化した時代であると言える。また、言い換えれば旧体制の破壊によっ

て成立した新時代が失敗に終わってしまった時代である。その中でサドは政治的な執筆活動などを通し、旧体制の批判、そして共和政の賛美を続けていくのであるが 1973 年にその対象であった共和国から裏切られ、投獄されることとなる。これにより生じた政治的落胆が『野心の罪』の思想のねじれに繋がって行くのである。

カストリ雑誌が隆盛を誇ったのは主に第二次世界大戦後の三年間であり、戦後の性文化解放の一端を担っていた。しかしその解放が可能だったのは、日本社会自体が変化したためである。

岩井忠熊によれば、国は自らを国家の道義性(例えば現人神である天皇が統治する日本、という思想)などの「普遍的秩序」によって律しながらでないとなら成り立つことが出来ないという。しかしこれを例に挙げると、天皇の人間宣言によって国家の道義性、つまり普遍的秩序ひいては国自体が崩壊したことを指してしまう。けれどもそのような結果にならなかったのは、日本という国が天皇の存在はそのままに、その意義のみを「象徴天皇」へと変化させ、「普遍的秩序」を「民主主義」に置き換えて国としての存続を図ったためである。このような社会を根本から変えるような変化こそが、戦前とは真逆の文化であるカストリ雑誌が生まれ得る社会を生み出したのだ。

さて、ベルグソンが提唱した社会哲学に閉じた・開いた社会というものがある。閉じた社会は成員が相互に本能的に闘争し合う抑圧された社会で、恐怖政治などの閉じたモラルを蔓延させる。つまりフランス革命後の社会そのものである。開いた社会は全人類を包括する愛・道徳の世界であり、閉じた社会からは「社会を根底から覆す」ほどの飛躍によって移行できる社会である。前述のように象徴天皇と民主政という変化が起きた戦後日本は、その飛躍が起り得る社会になっていたと考えられる。この観点から、二つの異なった時代の作品は次のように考察できる。

サドの目指していた共和政は彼自身書き残しているように、全人類が心と魂を一つにすることを目的とした、いわば「開いた社会」を目指すものであった。しかし現実には共和政というものは、サドにとって「開いた社会」になれなかった失敗作なのである。そのため彼は革命前でも許されなかったもの(悪徳)を否定することで社会は革命前と何も変わっていないのだという暗に示し、旧体制でも共和政でも賛美されているもの(美德)を否定するという、旧体制と新政府に対する強烈な批判をこの作品に込めたのである。

一方非常に強く不道徳を肯定した『H 大佐夫人』では、途中で主人公が不道徳について葛藤しつつも不道徳を受け入れる場面が存在するが、その瞬間こそが閉じた戦前の魂から、開いた戦後の魂への飛躍が起きた瞬間なのであり、それが可能だったのは戦後社会の性質の変化が故なのである。

発表者氏名：大塚弘貴

共同発表者：平岩このみ

所属ゼミ：松本悟ゼミ

発表教室：S503

タイトル：再考 NGO 論—「NGO らしさ」の検証—

発表概要：

貧困、環境問題をはじめとする世界の様々な問題の解決を目指す非政府組織 (NGO) は開発の担い手として大きな役割を担っており、「OECD 開発協力レポート 2014」によると年間 3 兆 6 千億円以上の開発資金を提供している。

一方で、これまで NGO が得意としていた社会開発分野や参加型開発に国連機関や政府援助機関が取り組むようになり差別化しにくくなってきた(定松 2002)。また、NGO が大規模化し、小回りが利かず、「NGO らしさ」を発揮しにくくなっていると指摘されている(山田 2000)。換言すると「政府の NGO 化」と「NGO の官僚化」が要因だといえる。そこで本研究は、日本の政府援助機関と NGO、さらに現地の政府系金融機関のプロジェクトをフィールド調査で比較することを通して、国際協力の分野で NGO がどのように「NGO らしさ」を発揮しようとしているのか、あるいは発揮できずにいるのかを明らかにする。

NGO の活動の特色である「NGO らしさ」については先行研究から以下の 4 項目に分類し、事例研究に基づく検証を行った。

- (1) 住民との距離が近い(安藤 1998)
- (2) 専門家が見落としそうな社会的文化的側面も重視する(山田 2000)
- (3) 政府や国際機関ではできないところに手の届くきめ細かな援助ができる(山田 2000)
- (4) 政府と緊張関係を持ちつつ政策提言ができる(鈴木 2007)

調査対象国はベトナムである。政治体制ゆえに先に挙げた「政府の NGO 化」が進まざるをえないからである。調査対象は日本の政府援助機関の JICA、ベトナム政府系金融機関の VBSP、それに大規模 NGO のセーブ・ザ・チルドレン・ジャパン (SCJ)

である。JICA は少数民族に対して農村開発プロジェクトを実施している点、VBSP は貧困層に小規模金融事業を行っている点で SCJ の事業内容と一致しており、比較する妥当性がある。調査はゼミ活動の一環として教員同行のもと今年8月に5日間実施し、現地語と英語の通訳を介してプロジェクトの受益者ら 27 名にインタビューを行った。その結果、以下のことが明らかになった。

(1)については SCJ の大規模化による事務仕事の増加が現地訪問の減少につながっている一方で、フィールド調査の観察では NGO 職員の方が JICA 職員に比べ現地の人びとと密接に関わろうとする姿勢が明らかに強かった。

(2)については住民の聞き取りから異なる民族間で灌漑や農業技術の受け入れに関して差異があるとわかったにも拘らず、そのような文化的差異に関して JICA は認識していなかった。一方、SCJ は民族ごとの計算能力の違いを認識し、それに応じた融資期間や貸出額を設定していた。

(3)については VBSP より SCJ が高い利子で小規模金融を実施していたが、住民は利子よりも借りやすい条件を必要としており、返済が困難にならないように融資期間の設定や、貸出額の調整、こまめなフォローアップをするなどの対応をしていた。

ただし、(4)については SCJ のベトナム人スタッフが持つ政府の意向に従いがちな意識が一因となり、政策提言できていないとわかった。

結論として、社会開発、参加型開発、小規模金融など形の上では政府援助機関や政府系金融機関も NGO と変わらない事業を行っているが、具体的なやり方やアプローチに目を向けると「NGO らしさ」は今も維持されていた。

そもそも本研究で「NGO らしさ」が議論の対象になったのは政府や国連機関による社会開発分野への参入が発端であるが、JICA 職員はそのようなきめ細かい支援をする難しさを指摘していた。政府や国連機関は NGO の役割を再認識し、資金面の援助を含め、互いの良さを十分活かせる協体制を構築することが重要である。

参考文献

- 安藤和雄 「NGO の発展性を支える在地性」 『NGO が変える南アジア』 斎藤千紘編、第 5 章、コモンズ、1998 年。
定松栄一 『開発援助か社会運動か』 コモンズ、2002 年。
鈴木直喜 「現場からの発信」 『国際協力 NGO のボランティア一次世代の人びとの研究と実践のために』 金敬黙他編著、第 2 部、明石書店、2007 年。

秦辰也編 『アジアの市民社会と NGO』 晃洋書房、2014 年。

山田陽一 『ODA と NGO—社会開発と労働組合』 第一書林、2000 年。

発表者氏名：油井 花穂

所属ゼミ：松本悟ゼミ

発表教室：S503

タイトル：分離壁の潜在的機能 —「テロ防止」の陰で何が起きているのか—

発表概要：

本論文の目的は、イスラエルとパレスチナの間に建設されている分離壁の事例研究を通して、国家を隔てる壁の潜在的機能を明らかにすることである。なお、本論文では「機能」を「目的とは関係なく生じる諸結果」、「潜在的機能」を「意図されず、一般にも認知されていない社会的・心理的諸結果」と定義する（マートン 1961）。

ベルリンの壁崩壊の映像は「冷戦終結の象徴」としてテレビで放送され、壁による分断の時代の終わりを示してきた。しかし、イスラエルは 2002 年からパレスチナ自治区ヨルダン川西岸地区との暫定国境上に、パレスチナ過激派によるテロ行為防止を目的とした高さ約 8 メートル、長さ 700 キロの「分離壁」を建設している。近年壁の建設はこの分離壁だけに留まらず、大量の難民・移民の流入を防ぐためにハンガリーがセルビア国境にフェンスを建設し国際社会から非難された。Carter and Poast (2015) によれば、1800 年から 2014 年までに 62 の壁が世界各地に建設され、そのうち約 4 割に相当する 27 もの壁やフェンスが今世紀のわずか 14 年の間に建設されている。

国家を隔てる壁に関する先行研究は、Rosière and Jones (2012) や Carter and Poast (2015) など国際政治や外交といったマクロな視点で論じたものが多いのに対し、本論文では「壁によって分断された人々」というミクロな視点から研究する。ベルリンの壁では、東ベルリンからの労働人口の流出防止という目的とは別に、東西ベルリン市民の間に心理的な隔たりを生んだことが指摘されている（ヒルトン 2007）。分離壁もそれと同様の機能を果たしているのではないかと。

分離壁に関する日本語の研究論文がほとんどないため、主要全国紙 4 紙をレビューした。分離壁が建設開始された 2002 年から 2014 年までの記事のうち、「イスラエル 分離壁」で検索した 572 本を分析したところ、分離壁がテロ防止という目的以外に「高い失業率の維持」「居住環境の悪化」「イスラエルとパ

レスチナの人々の交流の減少」という3つの機能を果たしていることが明らかになった。このうち、本論文では先述したベルリンの壁の心理的影響に着目し、分離壁の第3の機能の実態を検証した。

具体的にはイスラエルとパレスチナそれぞれに長期滞在経験を持つ2人の日本人へのインタビュー調査を実施した。日本在住者を対象にした理由は、現地の治安情勢が緊迫しており現地調査は困難だと判断したためである。また日本のイスラエル大使館にもインタビューを申し込んだが、回答が得られなかった。

調査結果の分析から、2つのことが確認された。第1に、新聞記事にもあったように分離壁の建設によってイスラエルとパレスチナの人々の行き来がなくなり交流も激減している点である。第2に、分離壁はパレスチナ人をも分断し、壁の「外側（自治区側）」となったパレスチナ人が、壁の「内側（イスラエル側）」のパレスチナ人に対して劣等感を抱いている点である。この地の情勢に詳しいとは言え、2人だけのインタビューから一般論を導くことはできないが、分離壁がイスラエルとパレスチナの人々の交流を減少させただけでなく、パレスチナ人同士の間にも心理的影響を与えている可能性を示唆しているといえる。

イスラエルとパレスチナは長年対立しているものの、分離壁が建設されるまでは市民レベルでの交流があった。しかし、分離壁は土地を地理的に分断しただけでなく人々の往来の遮断を通じて心理的な分断を生んでいる。それが人々の偏見や憎しみを緩和する道を失わせ、今夏以来のエルサレムでのイスラエル人とパレスチナ人の激しい衝突を回避できない一因になっているのではないかと。

グローバル化の進展は難民・移民といった「好ましくない人々」を選別するために壁を増加させている。政治的・経済的な目先の目的ばかりを考えると、壁は徐々に人々の心の中にも作られていく。それを防ぐためにも、政治や外交だけでなくミクロな視点から壁の潜在的機能に向き合う必要がある。

参考文献

ロバート・K・マートン、森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎大訳（1961）「第一章 頭

在的機能と潜在的機能」『社会理論と社会構造』みすず書房、16-77頁

Carter, B. D. and Poast, P., (2015), Why Do States Build Walls? Political Economy,

Security, and Border Stability, *The Journal of Conflict Resolution*.

<http://jcr.sagepub.com/content/early/2015/08/31/0022002715596776.abstract> (accessed November 15, 2015).

Rosière, S. and Jones, R., (2012), Teichopolitics:

Re-considering Globalisation Through

the Role of Walls and Fences, *Geopolitics*. 17:217-234.

<http://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/14650045.2011.574653>

(accessed November 15, 2015).

クリストファー・ヒルトン、鈴木主税訳（2007）『ベルリンの壁の物語 下』原書房

発表者氏名：大石純平

所属ゼミ：松本悟ゼミ

発表教室：S401

タイトル：日本社会における「税金の使途の監視」という考え方の定着 — 二律背反ともいえる態度はいつ、どのように生まれたのか —

発表概要：

本論文の目的は文献研究とインタビュー調査を通じて、「税金の使途の監視」という考え方が日本社会にどのように浸透したのかを明らかにすることである。

長年、日本人は税金を納めているという意識が低いとされてきた（三木 2015）。その原因の1つに挙げられるのが、源泉徴収制度と年末調整である。給料から天引きされ直接所得税を税務署に納税する必要がないため、税金を納めているという意識が芽生えないと指摘されてきた（前掲書）。

一方で、日本人は「税金の使途」についての監視の目は厳しい。例えば、1988年に政府開発援助（ODA）が会計検査院の検査の対象となると、「国内に貧しい人がいて福祉も十分でないのに、税金を使ってこれ以上外国に援助する必要があるのか」（朝日新聞 1989. 10. 8）と非難の声が上がり、1990年には湾岸戦争時の政府の多国籍軍への資金援助は違憲な軍事費支出だったとして、3000人以上の納税者が原告となり政府を訴えた（三木 2003）。

このように1990年前後には、日本人は税金を納めているという意識は低いにもかかわらず、「税金の使途」については納税者として監視していた。このような二律背反ともいえる態度はいつ、どのようにして生まれたのだろうか。

この問いに取り組むため、筆者は創刊年から 1989 年の範囲における新聞記事（読売・朝日・毎日・日経）と帝国議会と国会の決算委員会議事録をレビューし、その結果以下の 3 点が明らかになった。第 1 に、決算委員会では 1947 年から始まった会計検査院の決算報告の「不当事項」をもとに、「税金のムダ」に関する発言が当初からあった。第 2 に、新聞記事では 1980 年に至るまで、国の「税金のムダ」は「不当事項」の範囲でしか報道されていなかった。第 3 に、1980 年代に入ると「税金の使途の監視」を求める声が国会と新聞の双方で顕著になった。決算委員会では会計検査院の検査・権限強化が活発に議論されるようになり、新聞記事では税金の使途を監視することを求める市民団体の結成が報道された。

以上の 3 点から、筆者は「税金の使途の監視」という考え方は 1980 年代から広まったものであると考え、その契機として朝日新聞が 1979 年に中央官庁の税金のムダを暴露した一連の報道、所謂「公費天国キャンペーン」に注目した。なぜなら、これは会計検査院の決算報告を発表する報道ではない「税金の使途の監視」記事であり、しかもそれは市民社会の動きを報じたものではなく記者自身の調査報道によるものであったからである。このキャンペーンが日本社会における「税金の使途の監視」という考え方の浸透にどのような影響を与えたかを明らかにするため、当時朝日新聞の社会部デスクでこのキャンペーンを指揮した谷久光氏にインタビュー調査を行った。

その結果以下の 3 点が指摘された。第 1 に、「公費天国キャンペーン」は内部告発をもとにした日本で初めての調査報道であったという。それまで日本では組織への裏切り行為と考えられていた内部告発は、このキャンペーン後社会正義とみなされ一般化したと谷氏は語った。第 2 に、「公費天国キャンペーン」中に実施された第 35 回衆議院議員総選挙は「公費天国選挙」とも呼ばれ、新たな税金（一般消費税）の是非を争点としたが自民党が過半数を獲得出来なかったため導入を断念したという。第 3 に、「公費天国キャンペーン」以後内部告発が一般化し世間の税金・政府に対する監視の目が厳しくなったことで、政府は綱紀粛正を行い税金の使途をより厳しく監視するようになったと谷氏はキャンペーンの成果を語っている。

このような内部告発の一般化と選挙における国民の「税金の使途」に対する高い関心、政府の税金の使途に対する意識の変化を契機として、「税金の使途の監視」という考え方が日本社会に浸透したと考えられる。限られた研究による仮説的な結論ではあるが、税金の使途を監視するべきだという世論は比較的最近形成されたことは新たな発見であった。

「税金の使途の監視」は社会に定着したが、現在も会計検査院は毎年多くの「不当事項」を報告し、2014 年度は 450 件と 1979 年の約 3 倍に達した。この数字だけを見ると「税金の使途の監視」が十分でない」と批判することも出来るが、見方を換えれば監視が強化されたことの表れでもあり、「税金の使途の監視」という考え方が日本社会に定着していることの裏付けと捉えることが出来る。

参考文献

- ・三木義一 『日本の納税者』 岩波書店、2015 年
- ・三木義一 『日本の税金』 岩波書店、2003 年

B. ポスター部門

発表者氏名：木下颯将

共同発表者：木崎琴子 栗田美里 久保田美乃里 山口莉奈 緒方渚

所属ゼミ：中島ゼミ

発表教室：4Fギャラリー

タイトル：もののけ姫から読み解く屋久島の環境民俗学と諸問題

発表概要：

私たち中島ゼミはこれまで多国籍企業のアグリビジネスを中心に研究してきた。一見すると上記の研究テーマと私たちがこれまでやってきたゼミのテーマは全く関係がないように思えるかもしれないが、それら二つは深く関係している。また、舞台を屋久島に選んだのは、中島先生が屋久島出身であり、そして今年の夏休みには、ゼミ合宿として実際に私たちも現地の自然を体験したからである。

私たちは屋久島の自然・環境をその身に感じ、その歴史や関連文化に興味を持った。中でも世界遺産である縄文杉のある屋久杉の森は、樹齢千年を超える木々が何百本と生えそろうている。普通の杉とは異なり、山のふもとから山頂付近にまで群生していることができるのは、その特殊性によるものであり、またそれが樹齢を引き上げている。江戸時代の日本人もその価値には気づいており、多くの木こりが良質の材木を求め屋久島を訪ねた。しかし、当時の彼らには山岳信仰や巨木信仰というものがあり、それらによって切っても良い木と切ってはならない木を分けていたという。それらの民俗学的事情が、縄文杉を

筆頭とする巨大な屋久杉たちとどうかかわっていたのか今回の発表では考察する。また、近年森林伐採の問題が大きく取り上げられているが、屋久島も例外ではなく、世界遺産に認定されるまでに多くの木が伐採されてきた。その再生事業として植林活動がさかんに行われている。そうして人の手で植えられた杉は地杉と呼び、天然のそれとは少し異なる。天然の杉と地杉を比較しながら、かつて行われた伐採が現代の自然にどのような影響を及ぼしているのか考えていきたいと思う。

そして、先ほど述べたように、江戸時代の先人達は、山そのものに対する畏敬の念を持っており、誰もが気軽に入ることのできる場所ではなかった。遭難や地崩れなどは山の神によるものであり、女性が入山すると女の神の嫉妬を買うため、女人禁制が原則であった。山で死傷者が出ると山の神の祟りだ、などと現代の私たちからすると非論理的な考えのもと、供物を捧げたりしていた。そうした民俗は、どのような形で現代に適合していったのであろうか。屋久島の縄文杉は、我々にとって神聖な存在であり、現在もある種の崇拜の対象として多くの観光客が訪れる。過去の自然に対する認識と現在のそれを比較し、環境民俗の何が残り、何が淘汰されていったかを明らかにする。

屋久島にまつわる環境民俗学を考察する際、わたしたちは映画「もののけ姫」を材料とする。「もののけ姫」は、豊かな森での自然を守る神々と人間の闘争を描いたものであるが、その森は屋久島を舞台背景としており、映画の中にたくさんの屋久島らしさを見出すことができる。しかし、「もののけ姫」を制作した宮崎駿監督は、本当に屋久島のロケーションのみを採用しただけだったのだろうか。作品のテーマと屋久島の自然は、古来の伝承と照らし合わせてみると、関連する部分がある。特に、作中に出てくる「神々」は、現実の世界では何を象徴しているのかを考察する。そして、それを「殺す」ということはどのような意味を持つのか、屋久島の民俗と映画を参照し考えていきたい。

発表者氏名：出川瑛美子

共同発表者：小椋美佳 佐々木綾

所属ゼミ：甲ゼミ

発表教室：4Fギャラリー

タイトル：「知」のコミュニケーションを生み出す場としての空間デザイン

発表概要：

1. はじめに

現在、我々学生の学びのスタイルは多様化している。教師か

ら学生へ、また本やインターネットなどの学びの媒体から学生へとといった単なる知識の一方的な伝達による受動的な学びではなく、知識はそれぞれの立場に関係なく共に構築するものであり、学生は能動的に学び自分の知識を積極的に構成・発見・生成することが求められている。個人学習よりはむしろ、協同学習の場が必要とされ、2000年代に入り、ラーニングコモンズが法政大学をはじめ多くの大学の図書館に取り入れられるようになった。事実、新しい図書館づくりの可能性を広げる存在としての先駆けであるラーニングコモンズはゼミや学部など共通の決まったグループでの協同学習の場として機能していて、多くの学生はその際、インターネットに依存する傾向にある。しかし今回、私たちが求めるのは、学部、学年、所属を超えた人どうしの「知」のコミュニケーションの場であり、学びにおける本の重要性の再確認である。本研究では、様々な学びのスタイルに適応した、新たな図書館像を具体的に提案する。

2. 研究目的

①生徒が能動的に、進んで本を読み学びたいような図書館の空間デザイン

②得た知識を他者と共有し、新たな「知」を生み出すコミュニケーションのデザイン

③多様化する学びのスタイルに適応する図書館のデザイン
→学生が自ずと足を運び、本を読み能動的に学びたいような、また、学生間の学部学科学年を超えた「知」のコミュニケーションを円滑化することで、本を介して人が繋がり合えるような空間デザイン。「学びの姿勢」に着目し、従来の図書館のあり方を疑い、新たな学びの場としての空間デザインを提案する

3. 調査および考察

本研究を始めるにあたり、予備調査として、26人の法政大学の学生に学びの実態についてのアンケート調査を行った。その結果、以下のことが分かった。

個人学習の場合、約7割の学生が自習室を学習場所として選び、静かな空間を求めている。個人学習で行うことは、読書をはじめ、暗記、レポート作成などの個人で行う学習であった。また、周りに学習している人がいる環境を求める声もあり、このことは学習意欲の向上につながるのではないかと考えた。以上のことより、個人学習の空間に求められる要素は、①静かな環境、②意欲の向上を促進する環境であると考えた。

集団学習の場合、約4割の学生が外堀校舎のテーブルを、約3割の学生がラーニングコモンズ・空き教室・食堂を学習場所

として選び、主に会話のできる空間を求めていた。集団学習において、主に行われるのはディスカッションである。その際前提として求められるのは話し合いができる場所、そしてパソコン等の電子機器のコンセントやそれを接続できるスクリーン等の常設された IT ユビキタスな環境である。以上のことより、集団学習の空間に求められる要素は、①話し合いのできる環境、②話し合いを円滑にするためのツールを備えた環境であると考えた。

4. 結論

図書館の機能は多様化している。様々なニーズや学習スタイルの調査をもとに、学びの姿を捉え、“今”そして“これから”求められる新たな学びの場の中心としての図書館の設計案を考えた。情報技術の発達により、今やインターネットが学びの中心となりつつあり、電子書籍なども登場する中、このような技術とアナログな書籍とがどのような関係を保っていくことが望ましいのかを考えていくのが今後の課題である。

発表者氏名：飯島大地

共同発表者：大西みのり 黒川秦 藤田佐季子 船木賢一郎
山本拓海

所属ゼミ：島野ゼミ

発表教室：4Fギャラリー

タイトル：南三陸町における津波の経験を活用した自然との共存と地域開発の可能性

発表概要：

南三陸町は2011年3月11日の東日本大震災後の大津波により、死者620人、行方不明者212人の被害を出した。東北地方、宮城県北部に位置する南三陸町は、リアス式海岸の地形的特性から津波の被害は特に甚大となった。死者・行方不明者を合わせると、当時の人口（約1万7千人）の5%に匹敵する。住宅は58%が全壊した。

このような大きな被災状況は、復興を待たずに南三陸町から出ていく人を増加させた。震災から2年後の2013年3月の人口を、震災前の2010年3月と比較すると、沿岸部の被災地域の人口減少がなかでも大きく、全体では15.4%（約2600人）の減少がみられた。

島野ゼミは、2015年8月22日～24日に南三陸を訪れ、震災や津波の被災状況や震災後どれくらい復興したのか、さらに現地の人たちへのインタビューをもとに、津波が人だけでなく生態系へ与えた影響を調査した。さらに、津波によってもたらされたポジティブな影響や新しい可能性についても調査した。

ポジティブな影響や新しい可能性について、我々は大きく2つの発見をした。一つ目は、人々と生態系のバランスを調整した開発の模索である。津波によって人々の生活と自然・生態系は様々なダメージを受けた。例えば、地盤沈下・塩害・海の中の養殖場の流失・沿岸生態系を構成する生物種の変化などというように、津波によって失われた環境は人々と自然の両者にとって多種多様である。しかし、海岸生態系を見直してみると、海岸生態系には津波が起きる前からすでに、防潮堤の設置など、人の社会を津波から守るための開発と破壊が行われ、回復力の乏しい生物（特に絶滅危惧種や地域特有の生物）にとってかなり致命的な影響を受けていた。確かに、人間にとってその地域の生活があり、歴史的また地理学的には地震と津波は切り離せない関係性にあるのだから、それに対する防御手段を持つことは重要である。

だが、今回の津波から学ぶことが出来たように、自然の力もはや自然科学で予測できる範囲を大きく上回り、過去の自然と共生した開発を大きく見直すきっかけになってしまった。だからこそ、人々の社会と生態系のバランスを調整した開発を模索しなければならない。

二つ目は新しい形の漁業を中心とした地域の再活性化の手法である。例えば、今回の南三陸のフィールドワークで漁業体験を経験した。漁業体験のツアーを運営し、ガイドしていただいた村岡賢一さんの名刺の肩書に注目すると、漁業をだけをしているのではなく、観光業にも漁業の面からアプローチしていることが分かった。漁業を活かした観光業は、震災以前から南三陸で行われていたが、震災により知名度が上がったことや、学びの場としての南三陸と注目されることで、多くの若者が南三陸を訪れ、このような漁業体験を通して震災を知ることに機会を得た。この新しい形の漁業中心の観光産業やグリーン・ブルーツーリズムを提供していくことによって、人口問題の最先端と言われる南三陸の人口問題や地域活性化の改善につながるのではないかと考えたのである。

実際にフィールドワークを通して発見した現状は、地震とりわけ津波をポジティブに捉える努力を行うことで自然との共生を捉え直し様々なビジョンで復興を目指す人々の姿であった。

東北の復興に対して人々の注目は日々希薄化していると被災地の人々は感じている。正直に言うならば、私たちが今回のフィールドワークによって初めて被災地が抱える復興の現状を直視したのである。復興はようやく土台が完成してきた段階であり、完全復興まではまだ長い目で見なければいけない。だ

からこそ、私たちができる東北復興への取り組みは、私たちの関心を常に向け続けることがその基本であり、また、被災地での経験を伝えることにより、被災地以外に住む人々の関心のベクトルを被災地に向け続けることだと強く感じた。

発表者氏名：柴翔太郎

共同発表者：遠藤里菜 笹野真衣 齊藤結衣 武田有志 濱地大志 久保田直悠 久保井あかり 井口小雪 佐藤亜紀 大藤朝香 峯村彩花 河村慎也 秋谷穂奈美 遠藤謙 華原叡美子

所属ゼミ：佐々木直美ゼミ

発表教室：4Fギャラリー

タイトル：見つめなおす世界遺産

～地味だけど地味じゃなかった富岡製糸場～

発表概要：

皆さんに「何か世界遺産を思い浮かべてください」と聞くと、恐らくマチュピチュなどの広大な遺跡や、ヴェルサイユ宮殿などの豪華絢爛な建造物を思い浮かべるであろう。確かに、これらは視覚的なインパクトがあり世界遺産の代表例と言える。しかし、豪華な外観やぱっと見の迫力だけが世界遺産の価値と言えるのであろうか。

私たちはこの1年間「世界遺産とは何か」をテーマに議論してきた。その議論の中で世界遺産の在り方に多くの疑問を抱いた。例えば、世界遺産の登録に際して政治的なロビー活動が行われるなど外交的になってしまっていることや、世界遺産がビジネスとして利用されるようになり、本来の世界遺産の在り方から逸脱してしまっていることなどが挙げられる。そんな時代になってきているからこそ、私たちは今世界遺産の在り方を見つめ直したい。

先日、「明治日本の産業革命遺産 製鉄、製鋼、造船、石炭産業」が世界遺産に登録されたが、この一見地味な世界遺産を見て「これが本当に世界遺産なのか」と疑問を抱いた人も多いのではないだろうか。しかし、世界遺産を学んでいくと、視覚的なインパクトだけではなく、その世界遺産が持つ背景やストーリー性などが世界遺産としての価値を位置付けていると気づかされた。そして、それを顕著に表している遺産が日本にある。「富岡製糸場と絹産業遺産群」だ。

今回私たちはこの富岡製糸場を通して世界遺産の価値を見つめ直す。富岡製糸場は2014年に「富岡製糸場と絹産業遺産群」として世界遺産に登録された。富岡製糸場を世界遺産に登録されて初めて目にする人も多かったのではないか。

そんな富岡製糸場であるが、実は世界遺産としての価値がパースペクティブに認められた数少ない遺産である。その大きな理由として、高品質生糸の大量生産をめぐる日本と世界の相互交流と世界の絹産業の発展に重要な役割を果たした技術革新の主要舞台が富岡製糸場であったからである。その中で私たちは4つの観点から富岡製糸場を捉え、世界遺産の価値を見つめ直すことにした。

1. 『産業遺産としての富岡製糸場』

桑を栽培し蚕を飼い、繭を生産する第一次産業、その繭から生糸を作る第二次産業、その生糸を海外に輸出する第三次産業という養蚕、製糸、輸出その全てを富岡製糸場が担う総合絹産業の中心であった。

2. 『富岡製糸場の経営体制』

官営時代には模範伝習工場として利益よりも技術伝達に力を入れ、民営時代には日本でも指折りの財閥であった三井家、日本有数の生糸貿易商であった原合名会社、世界最大規模の繊維企業であった片倉工業の3つの企業によって経営が引き継がれてきた。片倉工業時代には修復工事を当時の復元工法にこだわり、現在の姿が保ち、再び民から官の手に戻った。

3. 『フランスとの関わり』

富岡製糸場はフランスとの交流が根強い。中でも富岡製糸場の主要建造物である東繭倉庫の建築と1人のフランス人指導者ポール・ブリュナとの関わりが深い。東繭倉庫は木骨煉瓦造という和洋折中の唯一無二な建築様式に、フランス積みの煉瓦が使われている。ブリュナは富岡製糸場の土台作りとその後の発展に力を注いだ。

4. 『富岡製糸場と工女』

技術革新の主要舞台として富岡製糸場があり続けた背景には工女の存在が欠かせない。機械製糸から自動製糸技術の発達を伝え、革新的な養蚕技術の開発とその普及に大きく貢献した。

以上のことから、私たちは富岡製糸場を通して今まで気づかれることの少なかった世界遺産の価値の重要な側面を皆さんに伝えたい。そして、これから世界遺産を見る際には見た目的な凄さだけではなく、その遺産が持つストーリーや背景を理解した上で、今までとは違った新しい世界遺産に対する考え方を持つべきである。

発表者氏名：田中直美

共同発表者：藤本理沙 小口夕香 柏倉妃香里 金賢延 服部大 田所莉歩 杉寄皓 矢部彩香 北野初季 谷井みづき 喜舎場洋平 下江航平 千葉かんな 平塚咲希 江部綾

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

発表教室：4Fギャラリー

タイトル：観光の文脈の中で消費される秩父札所巡礼

発表概要：

昨今エコツーリズムやグリーンツーリズムなど新たなツーリズムが推進され、宗教ツーリズムもそのひとつとして世界的に注目を集めている。中でも聖地巡礼は人気の高い宗教ツーリズムであり、1993年には「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」が世界遺産に登録された。日本においても、三重県、奈良県、和歌山県の三県が一体となって運動を展開し、2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界文化遺産に登録されている。また、「四国八十八箇所霊場と遍路道」についても世界遺産登録推進協議会が発足し、世界文化遺産指定を目指す運動が行われている。世界遺産登録への動きから熊野古道や四国遍路は、メディアに「観光地」として取り上げられ、世界各地から多くの観光客が訪れるようになった。さらに日本ではアニメの聖地巡礼がブームになっていることも注目すべき事象である。

本発表では、聖地巡礼を消費される観光資源と捉え検討していく。その事例として、埼玉県秩父地方にある秩父三十四観音霊場を巡る秩父札所巡礼を取り上げる。その変遷を追うことで秩父札所巡礼が観光という文脈の中で消費されているという現象を明らかにすることを目的とする。秩父三十四観音霊場は、西国霊場、坂東霊場と合わせて日本百観音と言われている。12年に1度午年の年に、三十四か所で一斉に御開帳が行われることも特徴の一つである。その始まりは諸説あるが、最も古い記録は室町時代中期の番付であり、盛んになるのは江戸時代に入ってからであった。当時の中心地であった江戸から近く、関所を通る必要がなかったという手軽さから、家庭から出る事がほとんどなかった女性が非日常を求めて秩父札所巡礼に訪れることが多かった。つまり秩父札所巡礼に対しての人々の動機は成立当初より信仰心だけではなく、観光と結びつけられる要素があったと考える。その後明治時代に政府により神仏判然令が出され神社と寺院が完全に分離されることとなる。このことが「寺を廃し、仏像を破壊せよ」という過大解釈に繋がり、お寺の衰退と共に秩父札所巡礼も衰退していく。しかし戦後には高度経済成長やメディアの発達、交通網の発達により再び繁栄していく。このようにその時代の政治的経済的要素、社会状況に影響を受けながら、秩父札所巡礼は観光という文脈の中で現代まで衰退と繁栄を繰り返しており、その変遷を、①1500年代～江戸時代②江戸時代～昭和③現代の3つの時代区分に分け

て考察していく。またこの中で、秩父札所巡礼の特殊性についても明らかにしていく。

③の現代における秩父札所巡礼は、ゲスト=観光客、ホスト=観光地住民という2つのアクターの相互作用により成り立っていると考え、この2つのアクターに対してのインタビュー調査を研究方法として用いる。発表方法としては、上記の研究を通して明らかになったことを、6枚のポスターにわかりやすくまとめ掲示する。見学者の方々へのポスター内容の説明や、質問対応のために発表場所には常に6名以上の学生を配備する。

発表者氏名：山田真之

共同発表者：三浦峻 鈴木唯

所属ゼミ：重定ゼミ

発表教室：4Fギャラリー

タイトル：英語学習における語彙力強化アプリケーションの紹介(Scrabble)

発表概要：

・制作動機

英語学習における重要な要素の一つに語彙力(単語力)がある。英語力の計測に頻繁に用いられる TOEIC において高得点(860点以上)を獲得するために必要な英単語の数は約10000語といわれている。これらの単語の中には私たち日本人にとって身近に感じづらい言葉や、日本語の概念では捉えることが難しい言葉もある。

そんな中、英単語を使って遊ぶ「Scrabble(スクラブル)」というゲームがアメリカで普及している。私たちは今回このゲームが日本の英語教育において特に語彙力の強化という観点でとても有効なものになるのではないかと考え、今回制作した。(ゲームの詳しい紹介は後述する。)

さらに、語彙力増強効果を高めるために、通常のゲームよりもさらにいくつかの機能を加えて制作した。

・作品紹介

Scrabble はアメリカ発祥のボードゲームである。ゲーム内では全27種類のコマが登場し、それぞれにアルファベットと点数が載っている(点数はアルファベットによって異なる)。最大7枚の手札の文字を組み合わせて単語を作り、ボードに配置する(その際に使用コマの合計点数が自身の得点として加算される)。なお、新たに配置する単語以外にも配置することで接続する文字列も単語として成り立たない配置できない。だが完成した場合はその新たな文字列も得点として加算される。また、ボード内に、文字の点数や文字列の合計得点が倍増されるなど

のボーナスマスも存在する。その後順番に1人ずつ文字を重ねながら単語を作っていく、全てのコマを使い切った時点で得点の高い方が勝利となる。

・アプリの構造

今回は、Visual Basic を用いて制作した。このアプリでは、一人で気軽に遊びながら学習することに重きを置いた。したがって、コンピューターに人工知能(AI)の仕組みを導入している。

・AI の仕組み…15×15 のマスに構成されたボードの一番左上のマス(座標 x=0, y=0)から最後となる一番右下のマス(15, 15)までに「単語があるかどうか」のチェックを行う。(具体的には、「その右隣に文字があるか」のチェックを行い、なければさらに右隣をチェック、という処理を最大7回(=手札の最大枚数分)繰り返す)

(例)「その右隣に文字があるか」を7回繰り返し、7回目に「文字があった」場合、運が良ければCP(コンピューター)は7枚の手札を全て使って8文字の単語を作ることができる。もし見つけた文字が「E」なら、CPは今ある手札を全て使用し単語を作る(OVERCOM「E」など)。このとき、「形成される文字数(8)」と「マスにもともと配置されていた文字(E)」が記録され、この情報をもとに SQLite というデータベースエンジンと辞書データを利用することで、「特定の位置にマスに配置されている文字(E)を含む(8)文字の単語」をすべて検索することができる。CPの手札にある文字を並べ替えることで検索結果の単語を作ることができたら CP 内で試験的に文字を配置してみる。文字を配置した際に上下に隣接した文字があるかもチェックし、文字があった際にはそれらと接続しても単語として成立したとき初めて、CPの処理結果の選択肢の一つとして記録される。その処理の終了後は同様に上から下の「単語があるかどうか」のチェックを行い、以上のすべての処理が終了した後、挙げられた選択肢の中からランダムで選択する。

・追加機能紹介…文字を配置して単語を作ることができた際に、単語の意味や発音が表示されるだけでなく、WEBブラウザと連動し、完成した単語の画像検索結果も表示できるようにする。こうすることで、初見の単語であっても視覚的情報と併せて理解でき、さらに遊びとしての好奇心をより刺激できると考える。

所属ゼミ：衣笠ゼミ

発表教室：4Fギャラリー

タイトル：若者の教育課程における集団意識形成

発表概要：

人は皆、何かしらの集団の中で生きている。家や学校、友人グループ、職場など、その規模は2、3人のとても小さなものから、何十人何百人の大きなものまで様々である。集団の中で行動していると、時に自分の意見を抑圧して周囲に合わせた考えや行動に至っていることはないだろうか。また、日本人は意見を言わない、周りの目を意識し過ぎ、といった指摘を外国人から耳にしたことはないだろうか。そこで今回、私たちは日本人の集団意識を学会での発表テーマとして取り上げることにした。

集団意識とは生まれた時にすでに身につけているものではなく、様々な集団の環境の中で影響を受け、成長するにつれて徐々に生じてくる意識である。そこで私たちは、子どもが成長して大人になり、社会に出るまでの期間が集団意識形成の大部分を占めると考え、小学校から大学までの教育機関に属している年代に焦点を当てて研究することにした。

集団意識というものを考えてみると、文化や国民性の違いでその定義も様々である。また、集団内での思考と行動はいくつかの性質に分けることができる。そこで私たちは、日本人の集団意識の主な性質として、「協調性」「帰属意識」「相互作用」の3つを考えた。「協調性」とは、異なる環境や立場の複数の人が、互いに助け合い、譲り合うことで同じ目標の達成に向けて、任務を遂行しようとする性質であり、「帰属意識」とは、あるグループ、人の集まりに自らが属し、その構成員のうちの一人であるという意識、それに伴って属する集団の中での役割を内面化し達成しようとする性質である。そして「相互作用」とは、2人以上の人が集まることで、状況に意味を持たせ、他者が意味しているものを解釈し、それに応じた対応をするという性質を指す。

上記の3つの視点から、人が集団の中にいる時の行動や考え方がどのようなものになるかということ、またそこに至るまでの心理的な要因や学校での教育による影響を、文献やすでに行

われたアンケート調査の結果を元に研究した。まず、日本人の性質や、日本という国が外部にどのように映っているのかということ、文献を通して認識した。次に、個と集団の関係、また集団を構成する人間の行動を、社会学・心理学的側面から記述した文献を参考に研究を進めた。これらの他に、参考資料と

発表者氏名：斎藤翔大

共同発表者：杉田梨香子 井上琴代 島さえの 山本敬喜 時崎剛生 堀川貴生 新海彩夏 李章圭 川辺拓未 岩本陽菜 飯塚麻里子 大隈颯人 山本絵里加 山田桜 司馬賢一 大谷彩夏 伊藤茉優 並木彩乃 江澤大貴

して文部科学省の学習指導要領等を用いて、教育する側の決まりや教育方法の中から、集団意識形成の手がかりとなるものを取り上げた。

今回の発表では、ある1人の大学生を想定し、この人物がこれまでの人生の中で体験してきた集団内での行動と思考の軌跡を、物語風にたどってゆく。小学生時代には、道徳などの学校教育を通して自分が集団のうちの1人であることを知るとともに、遊びの時には自分が興味をもったことに関して周囲を見て行動し始める。中高生になると、制服の着用など学校で決められた規則に従い、社会的な役割を受け入れ始め、自らがその一員であることを意識する。そして大学生になると教育機関による縛りがやや緩くなり、学校に加えアルバイト先、サークル等、それぞれの環境下で他者やその集団からの影響を受けて考え行動するようになる。この人物の体験は、実際にはすべての人に当てはまるものではないかもしれないが、現代の日本の教育・家庭環境に共通する条件や問題を考えるために設定したものである。この発表を見るなかで多感(だった)皆さんの学生時代を思い出し、あるいは重ね合わせて、集団意識の影響と問題に目を向けていただきたいと願っている。

発表者氏名：酒井奈穂

共同発表者：大塚菜央子 上村真琴 金原里沙子 川上怜奈 道川理恵 千葉由依 松本晶 望月優里 森山奈都 鈴木優里恵 中田柚香

所属ゼミ：竹内ゼミ

発表教室：4Fギャラリー

タイトル：新作能「タイタニック」

発表概要：

私たち竹内ゼミでは「演劇と越境」がテーマです。文化や国籍、性別などが演劇を通してどのように表されているのか、たくさん作品を分析し比較してきました。そして今回ポスター発表で、今まで学んできたことを生かし新しい作品を私たちに考案しました。

目的

原作ではあまり重要視されていなかったローズ母の気持ちの変化(怒り→後悔)を表す。流れとしては、時が経ち怒りのみが残ってしまったシテの心であったが、当時を改めて思い出すことで、自身の後悔の気持ちにも気づき、その気持ちを晴らすとともに去っていく。

あらすじ

作品の構成は、大きく前場と後場に分かれる。

○前場

現代のある港にてタイタニック号調査団の女性が、初老の女性(実はルースの亡霊)に出会う場面から始まる。初老の女性は停泊中の船をじっと見ており、不思議に思った調査団の女性が話しかけてみると、つらつらとタイタニック号について話し出した。とても詳しく語るため、何故そんなにもタイタニック号について知っているのかと調査団の女性が尋ねると、初老の女性は自分もかつて乗っていたからだと告げてゆっくりと消え去る。

○後場

ルースの亡霊が当時を思い出しながら再現する場面が中心となる。同日の夜、再び調査団の女性が港に訪れると、ルースの亡霊が姿を現し、「私の怒りをわかってほしい」と告げ、怒りを強く感じた出来事を語りと舞によって再現する。

それを見た調査団の女性が、「しかし本当に怒りしか感じなかったのか。娘に対して何か思うことはなかったのか」と問うと、ルースの亡霊は再び当時を思い出して後悔している出来事を再現し、舞う。

これらを通してルースの亡霊は、やはり怒りだけではなく、娘のローズへの愛情があったために後悔もしていることに気づく。

調査団の女性のおかげで自身の後悔にも気づくことができ、更に怒りや後悔を含めた胸の内を聞いてもらえたルースの亡霊は、ゆっくりと消え去っていく。

変更点 (+理由)

①本来の能とは異なる表現方法を使用する。まず地謡の行うコーラスは映画作品で使われているものと同じものにし、さらに背景音楽にも映画作品と同じ音楽を使うことにした。

②衣装については能装束ではなく、西洋風のドレスや洋服を使用する。所作は能の型ではなく、バレエを基にした上昇志向のある動きにした。作品の中でルースとローズが相舞する場面があるが、その点もバレエを基にした舞とする。上昇志向の動きが亡霊であることをさらに強調できる。

①と②は映画の世界観を伝えるため、本来の能とは異なる表現方法を使用した。

③使用言語は文語のような堅い現代の日本語を使用する。

残した点 (+理由)

①まず配役はシテ、ワキ、ツレなどで構成し、シテ中心で物語を展開させる。また、構成も夢幻能と同様の形式をとる。こうすることで、シテに焦点が当たり、観客の感情移入が容易になる。その為、物語の再構築に効果的であると考えた。

②舞台は能と同様にシンプルに。舞台上に何も無い為、観客は、説明に頼って状況を想像する。これにより、観客は自由な解釈をすることができる。また、演者が橋掛りからゆっくり登場することで、この世の者とは異なる様子や非現実感を表現したい。

③演者の一部は面を着ける。これにより、非現実の世界観の表現を目指す。また、表情が変わらないからこそ、観客が自由に演者の心情を解釈できると考えた。

④地謡を採用することで、状況を分かりやすく観客に伝えることができる。また、シンプルな舞台は、説明次第でどのような空間にもなり得ると考えた。

ポスターには映画『タイタニック』の詳しいあらすじや、上記で取り上げた新作能を実際に私たちが演じた様子の写真を展示しています。ぜひポスターを見に来てください。

発表者氏名：水谷遊菜

共同発表者：井上さつき 佐々木実花 市橋翔 池田直弘 前島涼雅 藤沼佳奈

所属ゼミ：岡村ゼミ

発表教室：4Fギャラリー

タイトル：神楽坂と文化人（神楽坂、文化人に愛される場所）

発表概要：

法政大学を語る上で神楽坂の存在は無視できないだろう。法政大学の最寄り駅である飯田橋駅からほど近い場所に位置する神楽坂は学生のみならず教員も歓迎会や送迎会などで利用するとよく聞く。

神楽坂はさまざまな顔を持った場所である。昼は法政大学をはじめとして、東京理科大学や日本医科歯科大学などの学生で賑わい、夜になれば食事やお酒を楽しむ人々で賑わう。

また同じ「神楽坂」といっても坂下と坂上では全く違う表情を見せる。歴史的観点から見れば坂下は江戸城の外濠が広がる場所であり現代にもその面影を残している。反対に坂上は江戸時代には寺町であり、神楽のお囃子が鳴り響いていたという。「神楽坂」という地名もここからついているらしい。大通りから小路に入れば石畳の路地が広がり、芸者の町として栄えた当時の面影を今も残す。

そして忘れてはならないのが神楽坂が文化人や文豪に愛され続けるまちということである。神楽坂には文豪たちが原稿用紙を買いに訪れたという文具店「相馬屋」や、編集担当者にカンヅメにされながら作品を書いたという旅館「和可菜」など文豪にゆかりのある場所がたくさんある。

この発表では『神楽坂、文化人に愛される場所』と題し、3人

の文豪（文化人）を挙げ、彼らの作品を通し、神楽坂を外から眺めていく。それに伴いフィールドワークも行い、作品に描写された場所を実際に訪れ、考察を行う。

実際に扱う3人と主に扱う作品は以下である。

①夏目漱石『それから』

②泉鏡花『婦系図』

③三浦しをん『舟を編む』

夏目漱石が神楽坂にゆかりのある人物というのは有名な話である。神楽坂をずっと上っていき早稲田駅の近くには漱石誕生地の地があり、近くには漱石公園と呼ばれる漱石が晩年を過ごした住居跡もある。中にある「道草庵」では漱石に関連する資料を読むこともできる。またこの界隈の名手であった漱石の父がつけた「夏目坂」もあり、夏目漱石は今でも神楽坂に根付いた人物と言える。

二人目の泉鏡花と神楽坂の関係は、師匠である尾崎紅葉との関係から語られることが多い。尾崎紅葉邸宅は牛込区横寺町に位置し、そこで泉は玄関番として住み込みで作家修行をすることになる。31歳になった泉は神楽坂芸者の桃太郎と恋仲になるが同年に師匠である尾崎に叱責され、尾崎死後に結婚するのであった。この神楽坂芸者、桃太郎は婦系図の登場人物であるお蔦のモデルとなった人物である。

ここまでは歴史に名のある文豪としてあげたが、現代と歴史が交錯するまちと言われる神楽坂を現代的な面からも見つけたいと思い、三人目の三浦しをんを挙げた。彼女の有名な作品である『舟を編む』には神楽坂にある店を扱った描写が出てくる。この店は恐らく実在するものではないが、その描写はわりと詳細で神楽坂に本当にある気さえする。

以上の神楽坂にゆかりのある3名、また3作品を主に扱い文豪に愛された町、神楽坂を研究する。

発表者氏名：田村隼人

所属ゼミ：松村・大嶋ゼミ

発表教室：4Fギャラリー

タイトル：サウンドデバイス開発に於ける Raspberry Pi 及び Pure Data の活用に関する検討

発表概要：

1. 研究の概要

新たなサウンドデバイスの制作環境として Raspberry Pi を用いた Pure Data プログラミングの活用方法をシンセサイザの制作から検討した。本研究ではその結果を報告する。

2. 研究の背景と現状の検討

我々の研究室ではメディアアート作品とその制作環境について関心をもって取り組んでいる。なかでもオープンソースのソフトウェアでありながら高い表現能力を備えたグラフィカルなプログラミング環境 Pure Data とその拡張版である Pd-Extended(以下総称的にPdと略す)を主要な開発ツールとしてインストール作品やライブデモシステムの構築を目指している。Pdはオーディオ、MIDI、ビデオ、グラフィックスなどを総合的に扱う実験的なメディアシステムの構築とそのプロトタイピングに適している。

本年度は東京工科大学の准教授でありメディアアーティストとしても活動している松村誠一郎先生を招き、ライブデモやインストールなどでの使用を想定した携行性と汎用性を重視したデバイスの制作に着手した。

3. 研究内容とまとめ

上記の設計思想を満たすために、まず Pd を動かすプラットフォーム及びデバイスについて検討し Raspberry Pi を採用した。Raspberry Pi は名刺大の超小型の LINUX PC であり 5V の電圧供給を必要とする。この値は一般的なスマートフォンの充電器が供給するものと等しい。つまりは大きさ、電源供給の側面から携行性に優れたデバイスであるといえる。

しかし Raspberry Pi は ADC(Analog Digital Converter)を搭載していないため、連続量を読み取ることができない。このままだとセンサーを接続することができず、スイッチのようにオン・オフしか読み取れないためボリュームやミキシングなどの機能を持った汎用性の高いデバイスを作ることが難しい。そこで Arduino を使うことで解決を図った。Arduino はマイクロコントローラーと汎用入出力をもつ基盤、独自の Arduino 言語とその統合開発環境から構成されるオープンソースハードウェアである。Arduino を選んだ理由としては、センサーからの入力を読み取るプログラムが予め用意されていることと、Pd 側から Arduino からの入力を読み取るプログラムが公開されているため、こちらから新しく入出力に関するプログラムを組む必要がなく平易かつ汎用的に Pd のプログラムを作ることができるからである。また、給電、シリアル通信ともに USB を通して行うため Raspberry Pi とつなぐだけで使用することができるためハードウェアの制作も容易である。これにより Raspberry Pi の抱えていた連続量の読み取りに関する課題は解決できた。

最後に、一つの独立したデバイスとして動作させるために Raspberry Pi を起動した時点で Pd が起動、シンセサイザのプログラムが動くようにした。こうすることでモニターやキーボードを接続し、プログラムを立ち上げる必要がなくなったため、

より携行性に優れた物となった。

今回の研究からサウンドデバイスの制作に於いて Raspberry Pi 及び Pd の活用法を提示できた。今後は様々なセンサーを活用し、既存のサウンドデバイスの再現ではない新たな演奏体験を生み出せるデバイスの開発に着手したい。

発表者氏名：橋本あゆみ

共同発表者：加藤航

所属ゼミ：甲ゼミ

発表教室：4Fギャラリー

タイトル：これからの家族（ファミリー）向けの道具の在り方を考える

発表概要：

「家族」という言葉を聞いて、どのような印象を受けるだろうか。また、「家族向け」という道具やシステムを目の前にした際に、「家族」をどのようなものとしてとらえるべきなのか。時代とともに変化を遂げた「家族」のカタチは、個人が重視されそれぞれのライフスタイルや生き方がある程度自由に選択できるようになりつつある今日において、「個人の生き方」として多様化してきている。そして、その多様化は「近代における家族」のカタチに収まりきることができないものであるはずだが…。現在、我々の身の周りにあふれる「家族（ファミリー）向け」とされる道具やシステムは本当に「現代における家族」のカタチ向けに設計されているものなのだろうか。その疑問を元に、私たちは、今ある「家族（ファミリー）向け」とされる道具やシステムの現状を分析し、我々の目前にある「現代における家族」のカタチを考察してうえで、今後の「家族（ファミリー）向け」の道具やシステムの在り方や様子について、ポスターと模型の発表により視覚的に指摘・考案をする。そして、この機会を経て様々な人が今後の「家族」について目を向け、興味を抱いていただけることを目指す。

発表者氏名：木嶋諄

共同発表者：石川紗衣花 石渡けやき 及川園加 鶴巻百門 宮崎奈々 広瀬絢菜

所属ゼミ：今泉裕美子ゼミ

発表教室：4Fギャラリー

タイトル：聞こえていますか？沖縄の声
～基地問題から考える政治的無関心～

発表概要：

沖縄ではこれまでも、そしてまさしく今「基本的人権が脅かさ

れている」との声があがっている。そこで私たちは本報告を通して、声が発せられている沖縄の現状を知り、なぜ自分たちにこの沖縄の声が聞こえない／聞こうとしないのか、を考えることで、一人ひとりが政治や社会に関心を持ち、自分の意見を持って行動していくきっかけとしたい。

沖縄では基地問題によって基本的人権などが奪われ、民衆による抵抗運動が続けられてきた。たとえば、米軍に居住地や家を強制的に奪われてしまった人々、海を埋め立てられたことで生活の糧がなくなってしまった人々、米兵士による犯罪が横行したことで安心して生活できなくなった人々。私たち本土の人間には当然保障されているものが、これらの例にみるような沖縄の人々には保障されていない。沖縄の人々の中には、「非暴力」に徹し、自らの生活を守るため声を上げ続けてきた人たちがいる。一方で、基地に依存した生活をせざるを得ないため、諦めて反対しない人々もいる。沖縄の人々にとって基地問題は政治だけではなく、自然や文化、生活など様々な面を含む問題である。このように、沖縄が抱える問題は本土の我々の立場からは見えづらい複雑な要素も含んでいる。ところが本土に住む私たちから見える沖縄は海やリゾートなどのごく一部分で、基地問題の複雑さや生活との関係などの実情は見えにくい。沖縄の人々が政府の政策が強引だ、この現状を知ってほしいと声をあげても、私たちには他人事だ。つまり、沖縄の基地問題をめぐる状況が改善しないのは、私たちの政治的無関心に起因するのではないかと考えた。したがって、私たちは、辺野古の基地問題を通じて無関心に関心に変えることが必要だと痛感した。

私たちが、今年九月に沖縄でエコキャンプ、辺野古、沖縄市史の人たちと出会い、様々な沖縄を学び、見え／聞こえてきたのは「権利が保障されていない」ことの具体的な現実であり、これまで聞こえなかった沖縄の声であった。たとえば、新基地建設予定地である辺野古を訪れた時である。そこで私たちは建設予定地付近を船で案内して頂き、移設反対運動に参加する方から直接お話を聞いた。船から目にしたのは、サンゴ礁やジュゴンなど豊かな自然を育み、その恩恵を受けながら生活する漁場としての今まで見たことの無い青い海が、建設予定地として囲い込まれ、近づくだけでも警備会社に警告を受ける緊迫した状況である。「ここに基地が出来たら豊かな自然も沖縄の人々の生活も破壊されてしまう。そんなことを許してはならない。」という思いが、ようやく自分たちの中に込み上げてきた。衝撃だった。嘉手納基地では、離発着する軍用機の爆音を浴びせられ、基地が身体、実生活に与える影響を初めて体感し、その深刻さを痛感させられた。こういった沖縄の現状を見て、私たち

は沖縄の人びとの「人権」や「生活権」が脅かされていると実感した。

私たちが大学生を対象に実施したアンケートでは、「沖縄の基地問題に関心はあるか」との問いに対し、約7割の人が「ない」と回答した。また同アンケートでは、多くの大学生は政治や社会に無関心であるということもわかった。政治や社会への「無関心」はどのように「関心」に変わるのか、変わることで私たちはどのように行動し、何が変えられるのか。「沖縄」が見えてきた／聞こえてきた私たちの体験を、同世代の学生と共有しながら考えたい。

C1・映像部門 一般映像作品

発表者氏名：面川梨夏

共同発表者：小山祐季 瀬戸光 佐和田伊吹 浅野太心 原寛之 若菜郁 桐山紗緒梨 市川明希 松浦茜

所属ゼミ：鈴木晶ゼミ

発表教室：S406

タイトル：KAGUYA

発表概要：初恋を覚えていますか？ある偶然の出会いが、平凡な大学一年生、蒼大の日常を彩る。しかし、蒼大の初恋の相手は別の世界のお姫様であった…。出会うはずもなかったふたりが、偶然のめぐり合わせによって一緒に過ごす時間の中で、互いにかけてえのない存在となっていく。

私たちの日常は様々な出会いで溢れています。時には辛い別れも訪れることでしょう。それらの出会いや別れのなかには、私たちの人生に影響を与えているものがたくさんあるのではないのでしょうか？恋人に限らず、今まわりにいる仲間や家族、そしてこれから訪れる新たな出会い一つ一つを大切にしていきたい、そんな思いが込められた作品です。

<撮影技法・工夫点>

・全編生音（ナレーション除く）

役者の演技や周囲の雑音にも臨場感を持たせるため、アフレコを使わずマイクで音を拾うことにこだわりました。

・グリーンバック

かぐやと母の交信シーン

架空の世界を表現するため、ソフトで幻想的な空間の創造を試みました。グリーンバックを使用して部屋から交信場面への背景の切り替えをスムーズにしました。

・魚眼レンズ

画面中心の被写体が大きく映る魚眼レンズを使い、プリクラ機のカメラからの視線をイメージしました。実際のプリクラ撮影のように見せるために、編集ソフトで指向性のライトを一瞬当てフラッシュを演出しました。

・手持ちカメラによるロングショット

手持ちカメラによるロングショットを多用することで、ドキュメンタリー要素を加えキャラクターの日常に寄り添った映像を演出しました。

・日没後の屋外撮影

被写体を照らす十分な明るさのライトがなかったため、iPhoneの懐中電灯機能を利用し、約10台のiPhoneで多方向から光を当てました。

発表者氏名：青山里奈

共同発表者：馬場あゆみ 松本栞 中田蒼 堀内美鈴 藤尾愛美 渡邊美友 信江亜由美 山崎聡子

所属ゼミ：鈴木晶ゼミ

発表教室：S406

タイトル：「723」

発表概要：一人の女の子が過去の恋愛に縛られている中、仕事を通じて大切なことに気づき、一人の女性へと成長する姿を描いた恋物語。

この作品に込められたメッセージはまさに『向き合えば、何かが始まる』です。自分と向き合い、相手と向き合い、ちゃんと過去を受け入れた時にきっと新しい何かが始まる、という、前向きなメッセージを作品を通じて受け取ってもらえたら嬉しいです。

今回の制作は役割分担を昨年よりもより明確にし、各自が責任と情熱を持って取り組みました。

それぞれの観点から、作品制作において工夫した点について紹介します。

【監督】

私たちがこの映像を作る上で重視したことは「全員で取り組む」ことです。

なぜなら、学生である私たちがより質の高い作品を作るためにはチームワークが必要だと考えたためです。全員の意見を持ち寄るため衝突することも多くありましたが、私たち一人ひとりが今までゼミを通じて得た知識を持ち寄ることで「十人寄れば文殊の知恵」を実現することができたと考えます。この映画を制作するにあたり、私たち自身も真剣に取り組み、妥協をせず

本気で意見をぶつけ合っていくことで、主人公だけでなく自分たち自身も成長することができたと考えます。

【演者】

▼主人公 なつみ

私たちは、あと4ヶ月でそれぞれの未来を歩みだします。この主人公のように「失敗しても大切な事に気づき、成長し続けられるように！」そのような思いを込めてワンシーンワンシーン一生懸命演じました。喜怒哀楽以外の微妙な感情を表現することが一番難しかったのですが、観た人の心に響き、少しでもなつみに共感してもらえれば嬉しいです。

▼元彼 ゆうた

優太を演じる上で声にはかなり気を遣いました。控えめで気弱な印象を出すため、やや声は高めにして役を演じました。その一方でなつみに対し自分の意見を述べる際は、少し声を低くしてシーンに重みができるようにしました。

▼親友 とも

昨年の作品と同様、今年の作品も、登場人物どうしの関係性が話のキーとなるような作品となっています。主人公の親友役として、台詞の言い回しや雰囲気づくりを工夫しました。主人公との関係性を細かく描けるよう努力したので、主人公を取り巻く微妙な感情の動きに注目して観ていただきたいです。

【カメラ担当】

前回の学会作品の反省をした際に、作品の魅力が増すにはストーリーもさることながら映像の美しさも必要であることが分かりました。今回は、場面と場面を繋ぐトランジションでわざとピンボケを生じさせたり、夜景のシーンでは、玉ボケを使用してみたりといった様々な挑戦をしました。暗い場所での撮影ではノイズが発生してしまうことも多くありましたが、被写体にライトを多く当て、感度を出来る限り下げることによってノイズの問題を解消に努めました。

【音声担当】

音声係はただ音声を撮るだけではなく、台詞の言い方やスピードを注意深く確認し、アドバイスすることが重要でした。この作品のセリフは全てアフレコで構成されています。役者は映像に合わせて声を合わせるだけでなく、違和感のないよう感情をいれなくてはなりません。役者と一緒に、納得するまで何

度も撮り直しました。音声担当として、役者をサポートすることに重きを置いて活動しました。

【編集担当】

まずシーンとシーンのつなぎ目にこだわりました。本作品は過去と現代のエピソードが交互に出てくるため、エピソード同士をティルトアップした空や同じ動作(落としたり拾うなど)でつなげて居ます。また、セリフでカットを変えるのではなく、そのシーンの雰囲気や重要とされるものをフォーカスするようにしたことで、カットの切り替えが自然になるように心がけました。そして、映像を撮る際の雑音がぶつ切りにならないように、作品全体に雑音をいれて自然に仕上げることにこだわりました。

発表者氏名：青山里奈

共同発表者：馬場あゆみ 松本栞 中田蒼 堀内美鈴 藤尾愛美 渡邊美友 信江亜由美 山崎聡子

所属ゼミ：鈴木晶ゼミ

発表教室：S406

タイトル：「厳選！映像研究ゼミが本気で作った映像作品8作！2015」

発表概要：

・ AndroidのCM

本作品はスマートフォンのCMをパロディとして制作したものです。それぞれ個人の特技や個性を生かした携帯電話の楽しみ方を表現しています。音楽と映像の切り替えを合わせることで、楽しくテンポの良い作品に仕上げました。

・ ファンタ「昼メロ先生」のCM

皆さんお馴染みの炭酸飲料、ファンタのCM『○○先生シリーズ』パロディです。コミカルかつシュールな役者の演技はもちろんのこと、見事な編集によるテンポの良さ、また絶妙なカメラワークにも注目して頂きたいです。またphotoshopを使用し、ファンタのロゴを映像に上手くはめ込んだところもこだわったポイントです。

▼お茶のCM

本来のCMはビールですが、法政大学はお酒の持ち込みが禁止されているためお茶に変更してパロディCMをつくりました。注目すべき点はセリフです。本来のCMのセリフを生かしながら、初

摘み新茶特有のセリフを考えました。撮影でこだわった点は光で、映像が綺麗にはえるようにカメラの設定を工夫しました。

・ キシリッシュガムのCM

明治キシリッシュの松田翔太が出演しているCMをご存知でしょうか。本作品はそのCMのパロディとして制作しました。実際に羽田空港に撮影しに行き、夕日の綺麗なシーンを撮ろうと挑戦しました。また空港の環境音とBGMを動画にはめて、セリフはアフレコで制作しました。本作品は夕日の光の加減を特に意識して作った作品です。

・ シーブリーズのCM

川島海荷の青春を感じさせるシーブリーズのCMパロディです。撮影の際に一番こだわったのは、青空をいかに透き通るように綺麗に写すかということです。またこのCMの先輩のイメージに合ったゼミ生がおらず、ボーイッシュな女性が男性役を努めているところも、注目して見返してほしいポイントでもあります。このCMを観た人に甘酸っぱく、そしてきゅんとする青春を感じ取ってもらえたら嬉しいです。

▼なんか筑波いいな。

ゼミ合宿で行った筑波を題材とした筑波PRのCMです。撮影日が雨で、筑波山神社が幻想的であったため、とにかく綺麗な映像を取ろうと努力しました。その綺麗な映像を引き立たせるよう、あえて出演者は出さず、ナレーションと音楽のみで勝負しました。ナレーションもプロの作品を研究し、話し方にもこだわりました。見終わった後、「なんか筑波いいな。」と思っていたのであれば本望です。

▼spending all my time

perfumeのspending all my time のPVを製作しました。元のPVのコンセプトがサイキックで、perfumeは超能力養成所で学ぶサイキックガールを演じています。このPVでは元のPVを意識しながら『和』な感じを取り入れてみました。演者は服装を白に統一し、同じようなシーンを繰り返し撮ったり、編集でカットとカットの間に黒と白の画面を交互に入れてチカチカさせたり、逆再生や早送りを多用して不思議な雰囲気を作り出しました。

・ アレルとワクティン。

この作品は全て晶ゼミオリジナルです。一番大きな特徴はCGに挑戦したことです。グリーンバックのサイズが小さめだったこともあり、撮影には注意と工夫が必要でした。編集も専用のソフトを購入するなど、今までの映像制作とはまた違った、新しいことへの挑戦が盛りだくさんの作品となりました。プロットに関しては、制作班皆の意見が反映出来た作品になっていると思います。撮影と編集は和気あいあいと進み、作品からもそれが伝われば幸いです。今年度のゼミ作品の中でも一番好評の作品でした。

発表者氏名：高田茉友子

共同発表者：福島由依 伊井愛理沙 高岡誠之 高橋優子 中村梓 新村麻里恵 春田拓真

所属ゼミ：島田ゼミ

発表教室：S406

タイトル：登録削除

発表概要：私たちは今回、島田ゼミで学んだ2年間の集大成として「友達付き合い」にスポットを当てた作品を制作しました。何故なら、「今までの短い人生で私たちが学んできたことは、勉強よりも何よりも“人との付き合い方”だった」と考えたからです。そして、これからの人生においても“人との付き合い”から学ぶことは枚挙に暇のないことでしょう。いくつ歳をとっても幾度も壁にぶち当たる問題。そんな“答えのない問題”をテーマとした当作品では、人付き合いが未熟な6人のキャラクターが舞台に立ちます。

見栄っ張り友達付き合いが苦手な主人公の愛（あい）は、大学生活4年間を通して友達と呼べる存在を作ることができませんでした。そのため、母親からの電話にも具体的な近況報告は出来ずにいました。そこへ、“学生相談室から派遣された調査員”と名乗る謎の女性から電話がかかってきます。「友達登録機能を使って友達を作ってみない？」そんな甘美な言葉に誘惑された愛は、ためらいもなく友達登録を行ってしまうのでした。それから、愛は5人の“個性あふれる友達”と会うこととなります。自分の話ばかりをする韓流ヲタクや自分勝手な原宿系男子。政治の話になると目を輝かせる根暗系女子に初めて会うにしては重すぎる友人Tなど…。彼らと接することで愛は自身の欠点を見つめ直し、彼らと本当の友達になることが出来るのでしょうか。

当作品では極端なキャラクターばかりが出演します。そのため、「こんなやつは滅多にいないだろう」と思うこともあるかもしれ

れません。しかし、本当にそうでしょうか。ここまで極端ではないにしても、「もしかしたら私も同じようなことを身の回りの人に行っているかもしれない」と思い当たる節はありませんか。この作品が、今一度皆様の“人との付き合い方”を見つめ直すきっかけになれば幸いです。

発表者氏名：小泉堯史

共同発表者：飯野麟太郎 上霜圭央 大場郁美 澤邊司 田村莉沙 土屋菜穂 中村優太 百瀬聡亮 山本陸

所属ゼミ：島田ゼミ

発表教室：S406

タイトル：「Following」

発表概要：マイは、自撮りをツイッターに載せることを日課としていた。朝、身支度が整った後、家を出る前に自撮り。友人アズサとカフェでスイーツを楽しんでいるときは二人で自撮り。二人で居酒屋に行った際も自撮り。そしてツイートをする。この極めて一般的な行為が、ある時は危険性を孕んでいるかも知れない。

発表者氏名：東井勇樹

所属ゼミ：島田ゼミ

発表教室：S407

タイトル：チャーリーの夢十夜「#今日の夢」

発表概要：夏目漱石の短編小説集、「夢十夜」が現代で姿を変える！

10の夢の話からなる短編小説で、夢の書き出しは「こんな夢を見た」から始まる。エピソードは夢であるために現実離れたストーリーが多い。そして、現在音楽制作、プロデュース活動で活躍中のチャーリーがTwitterに残している夢日記、「#今日の夢」をコラボレーションさせ、実写化！夢であるため、実写化が不可能とされるが、Twitterでの140字以内で表される文から想像力を膨らませ、意味がわからないものから、ストーリー仕立てのものまで、短編の映像作品を集約し、再現をする。

チャーリーという人物は、音楽レーベルの首領であり、音楽制作やプロデュース業務をこなす傍ら、学生としての業務もこなす人物である。彼の言動は多数の人の興味を興させ、Twitterのフォロワー数は12000人を超える。その中でも特に「#今日の夢」のタグは人気で、彼自身の予想も超える意味不明な夢はク

リエイティビティにあふれる。夢を日記につけるということは、現実も夢も記憶として残るので、ある時から夢と現実の境目がわからなくなってしまうことがあるが、それでもなお、彼は夢日記をつけ、夢からも新たなインスピレーションを得ることで音楽活動やプロデュース活動にも役立てるのである。

10の夢で構成される映像作品では夢の実写によって、元来のストーリー仕立ての作品では叶わなかった、「どういうことなんだろう」と疑問に思わせる哲学的な作品を実現、それぞれの夢でどういう意味があるのかを考えて楽しんでもらえればと思います。

発表者氏名：山口卓也

共同発表者：宮川陸 齊藤美佳

所属ゼミ：山根ゼミ

発表教室：S407

タイトル：『あの夏を求めて』

発表概要：制作に至った契機：

「おもてなし」をテーマにゼミ生4人で制作した映画。制作のテーマを決める際に、最近の「おもてなし」は本来の「おもてなし」ではないという話になり、グループ毎に「おもてなし」をテーマにした映像を作ることになったため、それにあたって私たちが考える「おもてなし」を映画で表現した。日本経済新聞に興味深いコラムが載っていたので下記に引用する。

こどもの頃、父宛の郵便物の中に時折、宛名の左下に「平信」と書かれた封書があった。意味を尋ねると父は、「それは特別のお知らせではない普通の便りで……」、と丁寧に教えてくれた。まだ子どもだった私は、何だ、たいしたことではないと思った。その意味の深さに気づいたのは、大人になって自分のところに「平信」と記された手紙が来るようになってからであった。

疎遠になっている人から突然手紙が舞い込む。これは嬉しいことではあるが、同時に不安も感じる。なぜあの人は今頃手紙を送って寄越すのだろう、何か悪い知らせではないか、受け取った人は心穏やかでない。それは相手への配慮に欠けるから「平信」と記す。すると相手は安心して封を開けることができる。この二文字が「この手紙は決してあなたを驚かせたり、不快にするようなものではありません。季節の便り、身の報告、そういった平らかな内容の手紙でございます」と言っているのだから。

何も書いてなくとも封を切って読めば自（おの）ずと趣旨はわかる。僅か二十秒か三十秒の違いである。しかしその間の相手の気持ちを察して書かれる二文字、こうした心遣いは今時の押しつけがましい「おもてなし」と違って目立たない。けれどこれが日本の文化、日本の心なのだ。そして昭和一ケタ以前の人にとって当たり前のことだった。

日々狂言を演じながら、日本人の情緒が変わってきてはいないかと気掛かりになる。速度を増して激変する環境に心がついて行けず、苦しい思いをしている人も多だろう。だからこそ古典を大切にしたい。長く受け継がれてきた心の財産で生き方について考えるヒントが詰まっている。（あすへの話題 平信 能楽師狂言方 山本 東次郎 2015/5/16付日本経済新聞 夕刊）

滝川クリステルの東京オリンピックのプレゼン「お・も・て・な・し」以降の「おもてなし」はどこか押しつけがましい。マニュアル化され、こうもてなせと強制され、外国人向けのもの、日本の素晴らしい文化は何でもかんでも「おもてなし」とされてしまう。「おもてなし」とはそういった押しつけがましいものではなく、その地を訪れた人に対してその地やこの国のことを好きになってほしいという自発的に生まれる気持ちであつたはずである。

また、日本中でスマホ依存が進み、せつかく皆で集まっているのに皆スマホに夢中で会話がないという態を幾度と無く目にする。ほとんどの時間をスマホの中で過ごしている現状に私自身辟易していた。スマホ依存への警鐘を鳴らし、素晴らしい景色はスマホの中にはなく、スマホがなかった頃のアナログな人間同士の付き合いの大切さや、本来のおもてなしを再確認できればと思いこの映画を制作した。

あらすじ：

休憩時間、いつもように友人と集まる静香。しかし話しかけてもスマホに夢中でそっけない返事の友人達。

そんな友人関係に嫌気がさしていた静香は帰り際に1枚のポスターを目にする。

「変わる日本の、変わらない景色。」

そんなキャッチコピーに惹かれ、変わる日本の、変わらない景色を探しに一人旅に行くことを決心する。

そこで静香が見た「変わる日本の、変わらない景色」とは・・・。

監督：山口 卓也

脚本：山口 卓也

撮影：木村 優香、山口 卓也

撮影協力：百 佐保里

編集：山口 卓也

戸田 静香 役：沼澤 亜由

押田 夏希 役：木村 優香

栗野 由佳 役：出口 由梨奈

森 千晶 役：斎藤 美佳

観光客 役：山口 卓也

発表者氏名：風巻純佑

共同発表者：石井健輔 櫻井愛 宮川陸

所属ゼミ：山根ゼミ

発表教室：S407

タイトル：『RIMMA DOI』

発表概要：

1. 動機

法政大学国際文化学部卒業生、ファッションブランドAC/DC RAGチーフデザイナーRIMMA DOI（土井麟馬）に密着し、彼の「人を惹きつける力」はどこからやってくるのかを探る為。私はRIMMA氏と同じ、法政大学国際文化学部の学生であり、学部のカリキュラムである2年次の留学先も同じく中国である。ここでは詳しく述べることはできないが、RIMMA氏が中国に留学している時から、日本にいる私は彼の武勇伝を聞いていた。また、彼は高校時代はアメリカンフットボール部のキャプテンを務めていた。そんな彼だけに、周囲からの人望は厚い。RIMMA氏の同期だけでなく、彼の先輩、後輩からも慕われている。彼が一度、彼がデザインしたアート作品の展示会を開けば沢山の人が訪れる。そんなRIMMA氏のことを私は密かに尊敬している。憧れの大先輩に一步でも近付き、彼から沢山勉強させてもらおうと考えた。

2. 狙い

RIMMA氏の存在をより多くの人に知ってもらい、彼のファンを一人でも多く増やしたいと考えた。大学内でRIMMA氏のことを認知していても、彼の具体的な活動を知らない者も多くいると感じていた。そこで、AC/DC RAGのチーフデザイナーとして実際にどのような活動を行っているか舞台裏に密着し、学内はもちろんのこと対外的に発表したいと考えた。

3. 概要

「原宿と秋葉原のコラボアイドルイベント」

の舞台裏を密着ドキュメンタリー。RIMMA氏がデザインした衣装を着る秋葉原の地下アイドルのライブをRIMMA自身が企画する。RIMMA氏の朝の通勤から夜の自炊、深夜0時近くにまで及んだアイドル達の衣装選び、職場の仲間から見たRIMMA氏等、三日間に渡って密着取材した。RIMMA氏の人を惹きつける力の根源は一体どこにあるのだろうか。

4. 撮影場所

AC/DC RAG原宿竹下通り店

土井麟馬宅

moe farre-akihabara

発表者氏名：木村優香

共同発表者：星可菜枝 出口由梨奈

所属ゼミ：山根ゼミ

発表教室：S407

タイトル：『本音と建前』+CM集

発表概要：CM集

《作品を制作した動機》

全てにおいて、モノにはテーマがある。テーマとはすなわち「一番伝えたいこと」であり、創る側にとって、それを伝えることが最も重要なことであることは明白である。CMは、短い映像の中で、製品ないしその主題になるものの「一番伝えたいこと」が凝縮された、全ての映像のジャンルの中でも最も根源的で、最も難しいものである。そこで今回山根ゼミでも、短い尺の中でいかにテーマを伝え、見た人にとって印象に残るものになるかという点を重要視し、多くの人々に長年に渡り愛され続けるチロルチョコを使って四つのCMを制作した。

本音と建前

《作品を制作した動機》

20年と数年というまだまだ短い人生しか生きていないがその中で強く感じたこと。思ったことをすべて真っ直ぐに表現し過ぎて上手くいかないこともあれば、相手に気を使い建前を使い真意が見えずに信用されないこともある。この世の中、本音と建前の二面をうまく使い分けなければ上手に生きていけないと感じた。

例えば、アルバイトの接客中は特にそうであった。接客業において、お客様が発するクレームに対して申し訳なさそうな表情を作り、あいづちをしながら相手の言い分に耳を傾ける。アルバイトとして自分があるべき姿としてはそれが正しい姿なのかもしれない。だが、誰もがそんなことを自ら買って出る役ではないだろう。そうすると、サービスの利用側と提供側の二者がいたならばどちらかが本音（要望）を通そうとして、またもう一方は建前によってうまくその場をやり過ごす。ここで建前を使わず本音と本音がぶつかると話がこじれるだけである。また、建前で交わしていた側も反対に自分自身が別の場所でクレームを試みたりする。

この本音と建前の構図はいたってどこにでもある構図でアルバイトに限った話ではないだろう。きっとこの作品を見てくださる方も経験したことがあるのではないか。自分の中でのこの『本音と建前』の葛藤を、映像作品を通して表現し、より多くの方を巻き込み本音と建前について議論する場を作りたいと考えている。また、多くの人と議論を盛り上げるために、以下の質問に自分自身の回答を持って作品を見てほしい。

- ①日常生活において本音と建前を使い分けているか
- ② 本音と建前を使い分けることに賛成か
- ③ 本音と建前を使い分け対応されることをどう思うか
- ④ どんな場面で建前を使うか
- ⑤ 鑑賞後、建田前男と本音出子どちらに好感が持てたか

《あらすじ》

話すことはいつも建前な建田前男と、本音でしか物事を語れない女の子、本音出子の二人が主人公。二人は大学の百人一首サークルの先輩と後輩。ある日、大会に向け練習をしていると他のサークルメンバーは用事で帰ってしまい、急に前男、出子、もう一人の部員三人で練習することとなる。そこで、前男と出子がプレイヤーとして初対戦することになるのだが、お互いに妙なフィット感を感じこの日をきっかけに恋愛関係へと発展する。しかし、ある時いつも建前しか言わない性格である前男はゼミにおいてその性格故ゼミのメンバーに迷惑をかけてしまう。また、いつも本音しか言わない出子はその性格故他人を傷つけてしまう。二人とも深く落ち込みそれぞれの性格を反省し、その後二人はどうしていくのか。本音と建前、二つの関係は対極にある。主人公二人の恋愛物語を通じて、視聴者に「本音と建前の使い分け」について考える機会を提供する。

《撮影場所》

- ・法政大学 富士見6階和室、また和室前
- ・法政大学 外堀校舎 S403
- ・法政大学 ボアソナーDタワー0504
- ・外堀公園

《あとがき》

この作品が完成することが出来たのは、かるたサークルの方々に始めとし、法政大学の曾士才教授、多くの友人の方々、また多くのご指摘をいただきました山根恵子教授、山根ゼミ同期の皆様のご協力があったからです。協力して下さった皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

発表者氏名：仲島友理

共同発表者：宮寺真衣子 古山美月 宮本理代 小倉加奈 吉田桜子 門田聖矢 荒井葉亮 曲可欣 何采玲 禹尚秀 篠崎美佳 杉之下彩花 林夢凡

所属ゼミ：鈴木靖

発表教室：S407

タイトル：「市民にとっての戦争とは」

発表概要：今年9月、国会で集団的自衛権による武力行使を限定的に可能にする安全保障関連法が可決された。戦後、平和憲法の下、専守防衛に徹してきた日本の安全保障政策が、大きな転機を迎えたのである。同法は「我が国の存立を全うし、国民の命と平和な暮らしを守る」（内閣官房「安全保障法制の整備について」）ことを目的したものだが、一方でこれによる他国との同盟関係の強化は、国民を新たな戦争の被害者あるいは加害者にするとの懸念もある。

同盟国の軍隊が自国に入ったとき、あるいは自国の若者が海外に出兵したとき、何が起こるのか。こうした問題を考える上で、多くの示唆を与えてくれる事件がある。1950年、朝鮮戦争の中で起こった老斤里事件である。

1950年6月25日の朝鮮戦争の勃発から3日目、北朝鮮の侵攻を受け韓国の首都が大田に移された。その大田も7月20日に陥落すると、韓国市民たちは米軍の命令により後方の安全地帯へ避難を始めた。韓国側の戦況が日増しに悪化する中、避難途中の避難民たちは、突然現れた米兵に京釜線の線路上で所持品検査を受ける。結果、釜と包丁以外の危険物は見つからず、彼らが北朝鮮の兵士ではなく、ただの避難民であることが確認されたはずだった。ところが、しばらくすると米軍の戦闘機二機が飛来して、避難民を攻撃した。その後、米兵が再び現れ攻撃を加え、

避難民を線路下のトンネルの中へ追いやり、7月26日の午後から29日の早朝まで約60時間、トンネルの両側から銃撃を加えた。これによって150名の市民が殺され、13名が行方不明となった。そのうちの83%は子ども、女性、老人であった。

当時の様子を知るため、私たちは今年9月、事件の現場となった忠清北道永同郡にある老斤里を訪ね、事件の生存者の一人である梁海燦さんからお話を聞いた。当時まだ10歳だった梁さんは、死体の下に身を隠してなんとか生きのびることができたが、この事件で13人の親戚を亡くしたという。事件当時を思い出しながら梁さんはこう語った。「事件の記憶を忘れようとしても忘れられませんし、生々しく記憶に残っています。だからこの場所でその話をするたびに胸が苦しくなり…胸がいっぱいでものが言えなくなるのです。」

一方、罪もない避難民を殺害した米軍の兵士たちは、その後この事件とどのように向き合ってきたのだろうか。私たちはBBCが2002年2月1日に放送したドキュメンタリー番組 Kill 'em All を翻訳し、その中で紹介されている元兵士たちの言葉を探った。そこに語られている事実は衝撃的なものだった。「戦闘地域を移動する民間人はすべて敵とみなし、射撃するよう命じられた。」

「いまでも（私が殺した）女の子の夢をみます。どれだけ忘れようとしても どれだけ治療を受けても それは消えないのです。そして歳を重ねるごとに その苦しみは激しくなるばかりです。」

朝鮮戦争が終わって約60年、兵士から市民に戻った今も彼らは自分の犯した罪の重さに苦しめられながら生きている。事件現場の双子トンネルに残るいくつもの弾痕は、老斤里事件の惨劇と、今なお残る、生存者と元兵士の苦しみを物語っている。

日本の安全保障政策が、大きな転機を迎えたいま、市民にとっての戦争とは何なのか。本作品では、老斤里事件を通じて、この問題について考えてみたい。

C2. 映像作品部門 学部紹介ビデオ

発表者氏名：福田涼

共同発表者：内山一文

所属ゼミ：和泉ゼミ

発表教室：S406

タイトル：EXOPHONY ～国境を越える国際文化～

発表概要：国際文化学部とはどのような学部であろうか。英語を学ぶ学であろうか。結論から先に述べてしまうと英語や諸外国後を用いて国際問題から表象まで幅広く学ぶ事の出来る学部であろう。そこで、私たち、和泉ゼミはそうした国際文化学部の多様性を知ってもらえるように学生の目線からムービーを作成した。本学部の良さは国際人としての様々な異文化のつぼの中で、多くの事を経験できるという事実を生かして、ゼミや学年に関係なくインタビューを行い、画像や情報の提供を依頼した。とりわけ今回のムービー作成は、リービゼミの内山と合作で作上げたものである。

コース紹介では、各コースの希望ゼミから一言の紹介をいただき、そのままの形で掲載した。それぞれのゼミの個性が表れるものとなったと感じている。4つのコースの背景にある菱形は、国際文化学部は各コースで分かれているものの、根底ではつながっている事、またコースに関係なく普遍的に学ぶ事が出来る事を表している。ゼミ紹介のインタビューでは各コースから1つのゼミに連携をとり、そのゼミが所属するコースのイメージ、ゼミの内容に加え、それぞれ異なる質問を行い、それぞれの特徴を出す内容とした。

SA紹介の部分では、各SA先の人からSA体験写真及び動画を収集し、スライド、ストップアニメーションと動画を組み合わせることで10カ国に及ぶSA先紹介を冗長になることなく演出した。尚、制作者の代2014年度SAだけでなく、現在SAに行っている人や4年生からも写真を頂くことでより沢山の体験を紹介することができた。そして、大林宣彦監督が茂木健一郎に言われ実践した、「膨大な情報量を短い間に入れるとカタルシスが生まれる」テクニックを使い、15分の間に100名近くの協力者の写真を入れることで、いかに国際文化学部で充実したSA及び学習体験が出来るかを伝えている。近年、ITの発達によりスマートフォンで動画を撮影する人が多くなった。故に提供動画の多くが、縦長である。縦長の動画をそのまま利用すると観客に違和感を与えてしまうので、3つ動画を並べることで違和感を回避させようと試みた。映像を並べる手法は、ブライアン・デ・パルマやアンディ・ウォーホル等の著名監督も実践していることであり、今回は上記の「充実した学部での学習体験」を演出する上で、出来るだけ情報量を多くする点で効果的に使われた手法である。

・ストップモーションアニメ

残念ながら和泉ゼミのゼミ生は1人である。確かに、リービゼミの内山と共同制作しているが、少人数であることに変わりない。少人数のゼミで如何に国際文化学部の多様性を演出出来る

かと考えたときに、出来るだけ多くの人から写真や動画を提供して頂く結論に至った。しかしながら、冗長な動画をただ流したり、写真をスライドショーとして流したりするだけでは、冗長で退屈な映像になることが危惧された為、今回ストップモーションアニメを採用した。これは、国際文化学部の人から写真を頂くだけで動きのある映像を作ることが出来、また写真をバックグラウンドに置くことで、短時間で鑑賞者にSAの魅力が動的に分かるシステムとなっている。ストップモーションアニメとして参考にした作品はヤン・シュヴァンクマイエルの「サヴァイヴィング・ライフ」である。

エンドロールでは、「国際文化学部とは?」という質問に対し、学生からスケッチブック等様々な媒体を用いて回答してもらい、スライドショー形式で演出した。日本人だけでなく、外国人留学生からも回答を頂くことで、国際文化学部が持つ「グローバルな側面」をにじみ出している。

発表者氏名：松田美里（代理：柿沼里帆）

共同発表者：法政大学オープンキャンパス国際文化学部スタッフ一同

所属ゼミ：無所属（代理：曾ゼミ）

発表教室：S407

タイトル：Discover

発表概要：《前置》

これは、法政大学国際文化学部のオープンキャンパススタッフが制作した学部紹介ビデオである。最初にオープンキャンパスとは、毎年8月にキャンパスを開放し、大学の魅力や特徴を来場者に知って頂くイベントである。

法政大学では、学生スタッフが主体となって企画や運営を行っており、来場者にホームページやパンフレットには載っていないリアルな声を伝えること、そして来場者一人ひとりの悩みや不安を解決することを主な目的とし、熱心に活動している。毎年3日間で約3万人の来場者を動員しており、近年の来場者の傾向としては、受験生はもちろん高校1・2年生、浪人生、保護者などと幅広く、来場者のニーズは更に多様化している。

国際文化学部では、オープンキャンパスに多数の学生が参加しており、様々な部署があるなかで、私たちは国際文化学部をPRする国際文化学部企画に所属している。国際文化学部企画では、教員・職員・学生の共同企画によるガイダンスや、学生に

よる独自の企画の実施により、国際文化学部に関する情報を来場者に多角的に伝える取り組みを行っている。

私たちスタッフは、「文化情報の発信」をコンセプトの一つに掲げている。国際文化学部という一つの学部に関する情報を収集・整理し、情報技術やメディアを活用して来場者に発信することもまた、国際文化学部の目指す情報発信の実践の一つといえると私たちは考え、今回の学会に本作品を提出する。

《内容》

2015年 8月2日（日）・23日（日）・24日（月）、法政大学市ヶ谷キャンパスで開催されたオープンキャンパス当日に、来場者に向け上映したビデオである。

多くの来場者にとって国際文化学部といえば、必修留学制度である“Study Abroad Program（以下SAと略す）”のイメージが強いが、オープンキャンパスに足を運び、そこで初めてSAについて知る来場者もいる。実際に入学した私たち学生からすると、国際文化学部の魅力はSAだけに留まらず、大学生活4年間を通して異文化理解を深め、成長できるということである。1・2年次は留学をひとつの目標に大学生活を過ごし、3・4年次では留学を通して得た自分の興味や発見を自ら行動に移して、自分の専門を明確に勉強していく。学生一人ひとりが、自分の関心を出発点に、SAなどで得た学内外の人と人との関わり合いを大切にしながら考えを深め、総合的な視野で自分の専門を追究する。このような学部の特色を、国際文化学部でオープンキャンパススタッフを務めた1～4年生、9名の学生へのインタビューを通じて紹介することが、国際文化学部の魅力や特徴をPRすることに適していると、私たちは考えた。

学生への質問事項は以下の通りである。

- ・国際文化学部はどんな学部か
- ・国際文化学部に決めた理由
- ・どんな授業があるか
- ・SA先の言語はいつ勉強し始めたか
- ・SAに不安はあったか
- ・SAを通して得たものは何か
- ・来場者へメッセージ

《工夫点》

国際文化学部の歴史・コース制度やSA先の紹介など、パンフレットを読めば分かるコンテンツではなく、来場者の漠然とした大学の印象や憧れでも、更に膨らませられるように、学生の本音をビデオに収めた。

“DISCOVER”という検索画面は、一言では表しきれない国際文化学部の引き出しを“発見する”というコンセプトを表現している。また、インタビューに登場する学生の後ろに国旗マークが映っているが、その学生が行った（1年生においてはこれから行く）SA先を示している。

D. インスタレーション部門

発表者氏名：菅野亜美

共同発表者：田中環奈 中野拓人 上ノ内郷 中目彩子 佐藤純綾 川島祐貴

所属ゼミ：田澤ゼミ

発表教室：S504

タイトル：La cultura islámica en España
スペインのイスラム文化

発表概要：

田澤ゼミではスペインのイスラム文化をテーマに、歴史、言語、建築、食事の4項目で研究発表を行う。

800年間に及んだ国土回復運動に焦点を当てた歴史項目では、イスラム軍側とスペイン側双方の歴史をまとめるだけでなく、日本人にはあまり馴染みのないレコンキスタ時代の英雄エル・シッドに特化した発表を作成した。

スペイン語には、アラビア語起源の単語が多く存在することから、その変遷を辿るだけでなく、スペインを介して広まったであろうフランスを始めとした近隣諸国へのイスラムがもたらした言語についても、地図を用いて分かりやすく展示している。

スペインの中でもとりわけ南部、アンダルシア地方にはイスラムの影響を強く受けた料理が数多く残っている。それらについて模造紙による展示はもちろんのことだが、スペイン料理の中でも特に有名なパエージャにも影響が見られることから実際に紙粘土等で製作した模型を展示し、より身近に感じてもらえるように紹介する予定である。

イスラム建築をモチーフとした教室内は、数多くのイスラム建築が採用していたモザイクで埋め尽くし、イスラム世界にいるようなイメージで展示を見てもらえるようにした。また天井から星のモビールをつるすことで、数学や天文学の知識で当時最先端であったイスラム世界を表現した。

教室の中心にはスペインが誇るイスラム建築の最高傑作、アルハンブラ宮殿の、噴水を模した展示台を設置する予定である。バルセロナ留学で培った経験だけでなく、ゼミで学んできたカ

タルーニャ地方の知識、アンダルシア地方、イスラム世界について学んだ結果を今回の展示で発表したいと考えている。

発表者氏名：柏瀬将吾

共同発表者：佐藤里保 遠藤昂志 小泉晴香 岩田加奈子 宮本みゆき 三浦桃 本橋香那 御子柴亮介 田中遥香 布上果歩 小島シティマイ百那 水上柊矢 塩田優香 藤本卓也

所属ゼミ：熊田ゼミ

発表教室：S504

タイトル：Are we living in the same world?

発表概要：

「日常」と聞いて皆さんはどのような場面を連想するでしょうか。家族と過ごしている場面、大学で勉強している場面、お友達とおしゃべりしている場面。中には、他者から見れば「非日常」と呼ばれてしまうような場面を想起する人もいるかもしれません。この世の中には、人の数だけの様々な「日常」があります。国を跨げば、日本人の私たちが考えもしなかったことを「日常」として過ごしている人々も多くいることでしょう。

では、国、社会、共同体によって、それぞれに「日常」と呼ばれるものが異なるのであれば、一体何を持って、「日常」は「日常」と呼ばれるのでしょうか。この疑問に付随して湧き上がってきたのは、「果たして私たちは『同じ世界』に住んでいるのか？」という問いです。今回、私たち熊田ゼミ生は、〈Are we living in the same world?〉というテーマで、「世界」という概念に対しての疑問を、インスタレーションを通して投げかけています。

「多文化共生社会」という言葉があります。これはそれぞれの文化の独自性を肯定し、多様性に富んだ「一つの大きな社会」としてこの世界を捉えようとする考え方です。「日常」に対する連想から見える様々な思想や文化の違いからも、この世の中が多様性に富んでいることは紛れもない事実であり、当然それぞれの文化は尊重されるべきものです。国際文化学部の学生として、この言葉に触れ、深く思索した人も多くいるのではないでしょうか。

しかし、互いの文化の独自性を認める・尊重するということが、世界を一つの社会と捉えるということは、矛盾をはらんでいると私たちは考えました。例えば、統計的に乳幼児死亡率の高い国と低い国があるとしみましょう。乳幼児死亡率の高い国に生まれてしまうことは、人間としての生活をする以前に、すでに大きなリスクを背負っていることとなります。このように、生まれによって大きな違いが生まれてしまうこの世の中を、果

たして「一つの世界」として捉えて良いのでしょうか。「多文化共生社会」という言葉を用いて、そのような状況を見ごして良いのでしょうか。それは結局、「多文化共生」と体の良い言葉を言っておきながら、「よそはよそ、うちのうち」として他者や他の文化を隔絶していることになるのではないのでしょうか。

私たちは今回のインスタレーションで、<<日本>>にまつわる様々なデータを「しりとり状」に展示し、そのデータに対応する<<日本ではない他者>>のデータを合わせて展示しました。日本と他者、私たちの「日常」と他者における「日常」はどれほど異なり、どれほど同じなのでしょう。 「世界しりとり」の私たちのインスタレーションによって、この世界の様々な差異性と同一性を示すことで、私たちは皆さんに問いかけることにしました：「世界は本当に一つなののでしょうか？」 私たちのこの問いかけを念頭に置きながら、どうぞご覧ください。

発表者氏名：新村麻里恵

所属ゼミ：島田ゼミ

発表教室：S602

タイトル：Imagining!展

発表概要：

複数の作品の展示を行う。

作品リスト

1 Imagining ラジオ

材料：ラジオ、油性ペン

2 Imagining ポスター

材料：画用紙、コピック、油性ペン、額縁

3 Imagining 3年後の世界地図

材料：画用紙、ペン

説明「これは3年後の地球です。あなたは3年後、誰とどこで何をしていますか？世界のどこにいても構いません。自由に書き込んでください！」

観に来て下さった人が参加することで出来上がる作品の企画。しかし、一度にやってもらうのではなく、徐々に出来上がる。

発表者氏名：磯野志保

共同発表者：玉井瑛里 和泉亜里紗 西山梨菜 青木優里香 小林采未 坂井桜 竹村佑哉 福原知佳 武田花梨 井口志乃 石井陽子 松橋さやか 齋藤瑞季 田中琴子 山本詩帆

最上拓郎 船越由羽子 山田茉奈 青木謙祐

所属ゼミ：稲垣ゼミ

発表教室：S504

タイトル：TODAY (仮)

発表概要：

“今日”はあなたにとってどんな日だろうか。誕生日、記念日、何かの締切日、バイトの日、デートの日、いろいろあるだろう。しかし世の中の大多数の人にとって、“今日”は数ある日々の中の一日に過ぎない。この何でもない“今日”が、稲垣ゼミのインスタレーションのテーマである。

稲垣ゼミは、今回の学会展示のテーマを決めるにあたって、なかなか話し合いが進まず非常に苦労した。毎週各自がアイデアを持ち寄り発表したけど、全員が納得するアイデアは出なかった。

そんな中で、今年話題になったニュースからテーマを探ってみるようになった。2020年のオリンピックに関わって、ザハ・ハディドについて、エンブレムのパクリ問題、TPPが合意に達したこと、安保法制、SEALDsによるデモ、痛ましい殺人事件の数々、野球選手の記録やラグビー日本代表の活躍、毎週のように耳にする有名芸能人の結婚など、様々なニュースが思い出された。あと1ヶ月程で終わってしまう2015年も大変な一年であった。毎日、何かはどこかで必ず起きている。“何も無い日”など無いのである。誰かが生まれて亡くなっている。誰かが誰かを助けたり殺したりしている。婚姻届を出した人もいれば離婚届を出した人もいる。ある個人がどんなに普通に平凡に、つまらない一日を過ごしていたとしても、別の個人にとっては特別で、大変な一日なのである。

そこでわたしたち稲垣ゼミは、“今日”をテーマに選んだ。“今日”、つまり国際文化情報学会が行われる2015年11月28日を、インスタレーションで表現する。毎日がその日しかない特別なものであることを表現し、一日一日を見つめ直してみたいというメッセージを伝えたい。それと同時に、何気無い一つの切り口から、たくさんの物事や視点が見えてくることにも着目してほしい。

発表者氏名：松坂絵里奈

共同発表者：柏木瞳 達可早紀 山田祥世 小谷野望 森田香子 井口弓夏

所属ゼミ：甲ゼミ

発表教室：S603

タイトル：Do Experience

発表概要：

あなたは一日にどれくらいスマートフォンや PC を使っているだろうか？情報化が進んだ現代において、私たちはメディアによって様々な恩恵を受けている。例えば、テレビのニュースは数分前に世界で起こった事件を知らせてくれるし、インターネットを通じてボタン一つで買い物ができる。また、SNS のタイムラインからは異国にいる友人の近況が流れ、スマートフォンの画面越しに彼らと会話だってできる。このように、メディアの進化は私たちに時と場所を超えた便利さを提供してくれる。しかし、ものごとが便利になるにつれて、人間が主立ってしてきた身体的な活動は、失われつつあるのではないだろうか。こうした状況は、ネット依存、ネットいじめ、自己決断の欠如、他者理解能力の低下などの諸問題の要因の一つではないだろうか。身体的な活動は感覚を養い、感情を豊かにする上で必要なものであり、それらが失われ、そういった機会が減少していくことが諸問題を引き起こしていると考えられる。

ここで述べている身体的な活動について、哲学者エドワード・リード(1954-1997)は、著書『経験のための戦い』(新曜社)の中で、自分の身をもって経験することを「直接経験」、情報処理されたものを経験することを「間接経験」と表した。また、リードは著書の中で、「直接経験を享受しなくなればなるほど、周囲の環境から利益を得る方法をますます学ばなくなってゆくだろうし、独力で考え、感じ、自分自身の見解に従って行動することもなくなるだろう」と述べている。これは、リードが生きていた 20 世紀だけでなく、より情報化が加速した 21 世紀に対しても言えるのではないだろうか。今日の問題は、情報化が加速したことによってリードの述べた「直接経験」をすることがより困難になっていることだ。

私たちはこれらの問題から「直接経験」が失われつつある現代社会に危機を感じ、このインスタレーションを通して「直接経験」の必要性を提示し、情報化された社会と私たちとの新たな関係を模索することを目的とする。基礎研究として、ジェームズ・ギブソン(1904-1979)の『生態学的視覚論』(サイエンス社)、リードの『経験のための戦い』を参考に、人間と環境との関係、「直接経験」と「間接経験」について扱う。調査として、参考文献が書かれた 20 世紀と情報化が進んだ 21 世紀での「直接経験」を比較するために、現代社会に生きる私たちにとって身体的な活動はどのようなものなのか、具体的な事象を通して質問を行う。インスタレーションでは、私たちに身近な大学生活を題材とした映像と展示をし、「直接経験」を考えるきっかけとしたい。

最近、五感マーケティングや体験型の美術展などが見られるが、それらは第三者を介して編集され、提供されたものではないだろうか。さらに、住宅環境や移動手段は飛躍的な発展を遂げ、私たちが囲む環境は大きく変化し、かつて意識せずともしていた経験ができなくなってきたと考えられる。こうした状況から、「直接経験」が失われつつあるのではないか。

本研究は、意識的な経験の必要性を提示する。これは、現代社会の特徴である情報化を完全に否定するものではない。私たちは情報化する社会と共存していくことを前提とし、そうした前提のもと「間接経験」だけでなく、意識的な「直接経験」が必要であると考えられる。結果として、日常生活における様々な事柄に対して、多種多様な視点をもつことができるようになり、自己の価値観や世界観を拡張し、情報を取捨選択することで、自律的に行動することができるのではないだろうか。私たちはこのインスタレーションが、参加者にとって「直接経験」の必要性を考えるきっかけとなることを目的とする。

発表者氏名：上田瑞希

共同発表者：丸谷拓人 横山亮太郎 奥山友香 高橋千尋 福田光希 奥川のぞみ 北村英子

所属ゼミ：森村ゼミ

発表教室：S603

タイトル：完璧

発表概要：

私たち森村ゼミは、春学期にユング心理学を通し、「深層心理」について学んできました。

学会では、彼の思想を基に「意識」「無意識」の可視化を目指し、目に見えないところの様子を表現しようとしてきました。そのために何度も議論を重ね、教室という限られたスペースでいかに良い発表ができるかを考え尽くしました。

ところが、私たちの考えは上手くまとまらずに行き詰まったのです。そこで出てきた疑問がひとつ。

「私たちは、周りからよく見られたいという思いばかりが先行し、本当にやりたいことを見失っているのではないか？」

名のある大学や企業に入りたい。

高いブランドの服を身につけてみる。

流行りの飲食店へ行き、Facebook に投稿しては皆からの「いいね」を沢山もらおうとする。

何を伝えたいのかが不明確なまま、資料だけを集め、それなりにまとめて卒論として提出する。

などなど…。

このように、自分をよく見せよう、完璧に見せたいという気持ちは誰にでもあります。
しかし、完璧を目指して築き上げたその壁の先にはいったい何

があるのでしょうか？

私たちのインスタレーションでは、こうした学会への準備を通して気付いたことをメッセージとして表現していきます。

-----キリトリ-----

教員審査結果通知 申請用フォーマット

【詳細は本プログラム p.3 参照。必要事項に記入し、切り取った上で国際文化学部窓口に提出すること】

発表部門(いずれかに○)	A B C1 C2 D
発表者名(グループ発表の場合は代表者名)	
学生区分(いずれかに○)	学部生 大学院生
発表タイトル	
ゼミ名	
<u>※グループ発表者のみ記入すること</u> 教員審査結果通知の申請を行うことは グループ全体で確認済みですか?	はい いいえ